

---

# けいおん！～平沢唯と幼馴染と高校生活～

カイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！〜平沢唯と幼馴染と高校生活〜

### 【Nコード】

N3318R

### 【作者名】

カイナ

### 【あらすじ】

桜舞う四月、若宮光矢は今年から共学となった私立桜が丘高校に幼馴染である平沢唯と共に入学した。これから三年間の高校生活、一体どのような学園生活を送るのか彼らはまだ知らない。

## 第一話 入学式の朝

桜の舞う四月上旬、ツンツンとした髪質の黒髪がざつくばらんな短髪になっている少年は一軒の家のインターホンを鳴らす。それから少ししてドアが開き、栗色の髪をポニーテールにした少女が家から出てくる。

「あ、光矢さん……お姉ちゃんですか？」

「ああ……どうせうーいゝあと五ふゝんだろっかな」

少女の言葉に光矢と呼ばれた少年は呆れたように眩き、少女も苦笑して起こしてきますと言いつつドアを閉める。

「やっぱりまだ寝てやがったか」

少年 光矢は呆れたようにそう眩き、道路に出ると塀にもたれかかってカバンからヘッドフォンを取り出し、音楽を聴き始める。彼の名前は若宮光矢、そして今日は彼らが進学する事となった桜が丘高校 去年まで女子高だったが今年から都合よく共学となった

の入学式。ちなみに彼がここへの進学を決めた理由は簡単、家から近い。以上である。そして適当に何曲か聴き、とある一曲を聴き終えようとした時曲の音楽とは別に足音が聞こえてくるのに彼は気づいた。

「光ちゃん！」

そんな呼び声も聞こえ、彼は目を閉じながら慣れたように左手を声の方に向けその手が何かを捕らえたと同時にまるで鷹が自らの爪で

獲物を捕らえたかのごとくギリギリと締め上げた。

「痛い痛い痛い痛い！」

「朝っぱらからいきなり抱きつこうとするな唯姉え、そして光ちゃん言っな」

光矢が所謂アイアンクローを行いそれで悲鳴を上げている相手はこれまた栗色の髪をした可愛い少女。彼女の名は平沢唯、光矢とは家族ぐるみで付き合い合っている幼馴染の関係で彼女もまた桜が丘高校へと進学したのだ。ちなみに光矢が同じ年の彼女を姉えと呼んでいるのは幼い頃そう呼んでいた名残で今は気恥ずかしいから唯と呼び捨てているものの最初そう呼んだ時唯がマジ泣き、先ほどの少女唯の妹である平沢憂と必死こいて説得した結果二人きりもしくは憂を合わせた三人の時には唯姉えと呼ぶという条件付で呼び捨てが許されたのだがそれは置いておこう。

「ったく……ほら、さっさと行くぞ」

「う、うん……」

光矢が呆れたようにため息をついた後そう言っ歩き出すと唯もさっきのアイアンクローのせいで乱れたらしい髪を手櫛で直しながらその後が続く。それから光矢が先を歩きその数歩後ろを唯がついて行く格好で二人は学校に向かう。そして新入生が集まっている場所クラス分けの紙が張り出されているを見つけると二人もそれに割り込み、光矢は目を細めて自分の名前を探す。

「えーっと、若宮若宮……あ、あった」

光矢は自分の名前を見つけるとそれが何組かを確認する。どうやら一年三組らしい、そう思った瞬間後ろから何者かが抱きついてきた。

「やったね光ちゃん！ 私も同じクラスだよー」

「ああそうかいそりゃよかったな離れるんで光ちゃん言っなっ！！」

突然抱きついてきた時点で予想はしていたがその後の言葉が相手を確定させる決め手となり、光矢はそう叫んで唯を引き剥がし、自分のクラスを念のため確認する。確かにそこには平沢唯の名前があった。それを見た光矢は少しため息をついてから唯を伴って自分達の教室へと向かう。そしてドアを開け指定の席に向かっていると誰かが声をかけてきた。

「やつほー」

「なんだ孝明か……そういえばお前もここに進学したんだっけな」

「も〜何さその言い方〜」

「おはよー秋草君」

「や、唯ちゃん。これからまたよろしく」

声をかけてきたのは茶色い髪がところどころ無造作に跳ねた短髪の少年。彼の名前は秋草孝明、光矢と唯とは小学校からの付き合いだ。三人が適当に軽い挨拶を終わらせると光矢が荷物を自分の机 出席番号順じゃないのか孝明の前だ の上に置きながら言う。

「それにしても、お前なんでここに進学したんだ？」

「そんなの、光矢がいるからに決まってるじゃんっ!?!」

光矢の疑問の言葉に孝明が笑顔で言うつと光矢が真顔で彼の頬を殴り飛ばす。もちろんツツコミのため力は抜いた軽い一撃なのだが彼は倒れてわざとらしいくらいに大袈裟に悶え、光矢が呆れたようにため息をつくつと彼は笑いながら起き上がる。

「冗談冗談。ま、有名私立校へのスポーツ推薦も悪くなかつたんだけどね、僕はスポーツより楽しむのが好きだから。楽しめそうつて点じゃ光矢や唯ちゃんと一緒にの方が面白そうだからね」

「そいつぁどうも」

孝明の笑いながらの言葉に光矢はへつと笑つてそう言うつと席につき、唯も自分の席 光矢の隣 に向かう。すると孝明がよいしょつと言つて席から立った。

「トイレか?」

「何言ってるのさ? 入学式が体育館で行われるから荷物を置いたら個々で体育館に集合するんだよ」

「「え?」」

それを見た光矢が聞くと孝明はくすくすと笑いながらそう言い、それを聞いた二人は呆けた声で返す。それを聞くと孝明はくっくつと笑い声を零した。

「やっぱり、光矢と唯ちゃんが同じクラスだったからそれに気づい

た唯ちゃんが光矢に抱きつきやつたねと言って二人とも気づかずに来ると思った。クラス分けの紙の端っこに結構大きく連絡事項として出てたよ」

「新入生の皆さん、八時五十分より入学式を行います。教室内に残っている生徒はすぐに体育館に集合してください」

「ほら、都合よく放送もそう言ってるよ？」

「お前、俺らをからかうために放送委員に協力してもらってわざとやってるんじゃないかな？」

「信頼されてないな、流石の僕もそこまでやらないって。第一新入生がそんな事出来るわけないじゃん」

孝明が説明を終えると丁度よく放送が鳴り、放送スピーカーを指差しながら孝明が言うのと光矢がジトリとした目つきで言い、それを聞いた孝明はあははと空笑いをしながらそう返す。それを聞いた光矢はふうと息を吐くと荷物を机の上に置いたまま立ち上がった。

「唯、行くぞ」

「うん」

光矢の言葉に唯も頷きながら席を立ち、三人は体育館に向けて歩いていった。

そして三人が自分のクラスの席に座ってしばらく待つと入学式が始まり、光矢は退屈そうに入学式定番の校長の長い話を聞き流し横で唯がうとうとと船を漕ぎまた逆横では孝明が欠伸を噛み締めている様子を見る。それからつつながく入学式は終了し、生徒達は自分達

のクラスに戻って行く。

「それじゃあ、定番の自己紹介でも行ってもらおうか。嫌がるなよ、自分がどういう人間か知ってもらえれば誰と気が合うか等が分かりやすくなる。それじゃあそこから始めてもらう」

「あ、は、はい、えーっと……」

全員が席に着いたのを確認すると教壇のところ立っている担任の先生がそう言い、前の席の生徒を指差して始めるよう促すと突然の振りによってか慌てて立ちながらその生徒が自己紹介を始める。それを光矢はぼーっと聞き流していたがあっという間に自分の番になり、立ち上がった。

「えーっと、若宮光矢……一年間よろしく」

「秋草孝明、明るく考えると読めます。若宮光矢とは深い仲なので光矢共々よろしげふっ!？」

「嘘は言うな、OK？」

「い、YES……」

正直他のクラスメイトの自己紹介を聞いてなかったので適当に済ませてとつと次の孝明に回し座ったが彼の声質爽やかな自己紹介を聞くと咄嗟に立ち上がり振り返って彼の腹目掛けて割と本気のボディブローを叩き込み、それを受けた孝明は今度こそ本気で悶えながら光矢の言葉に必死で返す。ちなみにそれらを見ていた生徒の一部がざわざわとしていたが二人は気づいておらず、唯もコントに苦笑を浮かべていた。



## 第一話 入学式の朝（後書き）

皆様初めまして、カイナと申します。読了真に感謝いたします。けいおん！には前々から興味を持っていたところこのサイトのススメバチ様やラルク様の作品に影響を受けけいおん！小説を書き始めた所存でございます。

音楽知識はそもそもないですしこのようなほのぼの学園物を書いた経験はほとんどないのでグダグダな駄作となること請け合いですけどどうぞ気長にお付き合いいただければ幸いです。それでは。

## 第二話 入部、軽音部！

入学式の日から二週間が過ぎ、今日の授業も終わった放課後。光矢は隣に座っている唯がうとうと唸っているのをぼんやりと眺めていた。

「どうしたの？」

「よお真鍋」

赤ぶち眼鏡の少女 真鍋和が声をかけ、うとうと唸っている唯に代わって光矢が挨拶をする。それから和は二人が机の上に置いてある用紙 入部届けに気がついた。

「二人ともまだ部活決めてなかったの！？ 学校始まってもう二週間経ってるのよ！？」

「んな事言っちゃってやりたい部活がない」

「私も、運動音痴だし文科系はよく分からないし……」

ただでさえ去年まで女子高だったんだから野球部やサッカー部のようなポピュラーな運動部はないしだからと言って一から作りたいかといえば大体ノーと言うだろう。そもそも光矢は中学時代帰宅部だった。唯もしゅんとした表情で呟き、和は呆れたようにため息を吐いて首を横に振った。

「はあ……こうして二トが出来上がっていくのね……」

「部活やってないだけで二ト！？」

「孝明、そっぴやお前は何に入部したんだ？　ってお前何やってんだ！？」

和の言葉に唯がショックを受けたような表情で声を上げているのを横に光矢は後ろで音楽を聞いている孝明　勝手に光矢の音楽プレイヤーとヘッドフォンを借りていた　に尋ね、勝手に人の私物を使っていることに気づくととりあえず鉄拳制裁を叩き込む。

「ほぐつ！？　いったー……もっ、別にいいじゃん減るもんじゃ無し。えーつと部活？　僕はテニス部に入ったよ。サッカー部はないしだからと言って一から作るんじゃ労力かかるしさ」

「え？　秋草君、サッカー上手なのに……」

孝明は光矢に殴られた頭をさすりながらぶすくれた表情で返し、自分はテニス部に入った旨を伝える。すると和が驚いたようにそう言った。確かに孝明は中学時代サッカー部のエースストライカーとしてその名を知らしめ、サッカーの有名校に推薦が来ていたぐらいだししかし孝明は肩をすくめてそれに返す。

「別に、確かにサッカーは好きだけどそこまで愛着ないし、ちよつとテニスにも興味あったしね。それより光矢や唯ちゃんと一緒にの方が楽しめるもん。第一サッカーやりたかったらここ入ってないってなんなら光矢もテニス部入ったら？」

「断る」

「似合うよ、その名の如く光の矢のように鋭い球を打つという異名をいだっ！？」

「ふざけんな」

孝明はへらへらと笑いながらそう言った後光矢を勧誘するが彼は即答、孝明が諦めないというように続ける。と光矢は拳骨で返した。

「む………」

「さてと、俺はそろそろ帰るぜ。今から出れば丁度スーパーのタイムセールが始まる時間に合う」

「庶民的だね」

「まーな。んじゃまた明日な」

唯が頭を悩ませていると光矢は荷物を持って立ち上がり、その言動に孝明が笑って言う。と彼もまたふっと笑ってそう返す。そしてヒラヒラと手を振って彼は教室を出て行った。

そして翌日、光矢が学校に向かっているとその背後からタタタという足音が聞こえてきた。

「光ちゃん！」

「光ちゃん言うなそして離れる……なんだ？」

その言葉と同時に唯が光矢の背中に抱きつき、光矢は呆れたようにそう言って唯を離すと唯はにこ〜と笑顔を浮かべていた。

「光ちゃん！ 私入る部活決めたよ！」

「はいはい。何に入るんだ？」

「軽音楽部！」

唯の言葉を光矢は適当そうに返し、歩きながら尋ねると唯はガッツポーズのようなものを作ってそう続ける。それを聞いた光矢は少し黙り、尋ねた。

「お前、軽音楽部って何するのか知ってるのか？」

「ううん。でも軽い音楽って言うんだから簡単なのしかやらないって」

光矢の言葉に唯が首を横に振って返すと光矢は呆れたようにため息をつき、それを横に唯がにこにここと微笑みながら続けると光矢は右手で額を押さえ、また尋ねる。

「例えば？」

「……口笛とか？」

「頭痛くなってきた……」

「え！？ どうしたの！？ 昨日何か変なもの食べた！？」

原因は現在進行形でお前だよ。光矢はそう言いたいのを飲み込んで息をつくと言っ。

「軽音楽はバンドをやる。楽器はギターとかベースとかだな」

「えー？……私そんなの弾けないよ……」

「じゃあ何なら出来るんだ？」

「……カ、カスタネット？ ほら、幼稚園でやった……」

「……………」

光矢の説明を聞いた唯がえーっと言いながら言うのに光矢がまた尋ねると唯は引きつった笑みで返す。それを聞いた光矢はまた頭を押さえた。

「あ、ちなみに唯ちゃんの言うカスタネットっていうのは厳密にはミハルスって言うてね。本来カスタネットはスペイン語で栗を意味するカスターニャって単語が語源なんだ、栗の木から作ったからとか形が栗に似てるからとか諸説あるけどそれは置いてスペインの舞踏フラメンコ等に用いられるんだ。ミハルスはそれを鳴りやすくしたものって感じかな？」

「あ、秋草君」

「お前相変わらず変な知識だけは豊富だな。つかお前どこから湧いて出た」

「人を温泉みたいに言わないでよ。学校行ってたら二人を見つけただけだっつて」

するとどこから出てきたのか孝明がさらっとカスタネットについて説明し、唯が声を出すと光矢が息をついてそう言う。それに孝明はあははっと笑いながら返し、三人は一緒に学校に向かった。ちなみに学校に行ってから和にその話をしたらこれ以上ないくらい呆れら

れたのは別のお話。

そして時間が過ぎ放課後、唯は荷物を持った後隣に座っている光矢に言った。ちなみに和と孝明はそれぞれ生徒会と部活があるのかも  
う教室にはいない。

「ね、光ちゃん、音楽室までついてきてくれる？」

「光ちゃん言うな……なんで？」

「だって、もう入部希望出しちゃったから今から辞めるって言いに  
行きたいけど、そんな事になったら白い怖い人が……あううううう」

「いつの時代のバンドだよ……分かった分かった」

唯はがくがくと震えながら最後に両手で頭を押さえ泣きそうな顔で  
うずくまり、光矢は呆れたように呟いた後分かったと返す。それを  
聞くと唯は顔をぱあっと輝かせて立ち上がった。

「よかった、じゃあ行こっ！」

唯は立ち上がって素早く光矢の腕を掴むと彼を引っ張って行き、光  
矢もなんとか自分の荷物を持って唯に引っ張られていく。そして音  
楽室の前まで来たはいいが唯は小刻みに震えながら中に入ろうとは  
しなかった。

「何やってんだ？」

「だ、だって白い怖い人が……」

「今時そんな奴いないっつもの。開けるぞ」

震えている唯に光矢が尋ねると彼女は震える声でそう呟き、光矢は呆れたように息を吐くと音楽室のドアに手をかける。

「ねえ、うちの部の前で何やってるの？」

「ん？」

ドアを開けようとした瞬間声をかけられ、光矢は思わずドアから手を離しながら声の方を向き、唯もそつちを見る。そこには前髪を上げてカチューシャで止めた、唯と同じくらいの髪の長さをした女の子が立っていた。

「あゝ、えっと」

「あ！もしかしてあなたが平沢唯さん！？」

「え？ あ、はい」

「ギターが凄く上手いんだよね！？ 来てくれるの待ってたよー！」

光矢が唯の代わりに説明しようとした瞬間その女の子は唯の両手を握り締めながら言い、唯がこくと頷くと彼女は唯の手を上下にぶんぶん振りながらそう続ける。あらぬ尾ひれがついてる、二人がそう思うと女の子は光矢を見た。

「えと、君は？」

「俺は」

「あー分かった君も入部希望者だね！？ だったら入った入った！



みんな、入部希望者が二人も来たぞー！！」

女の子が首を傾げて尋ねると光矢は唯の付き添いである事を伝えようとしますが彼女は早合点してそう言うと言気よくドアを開けて唯を連れ込みながら中のメンバーに声をかけ、唯がふええっと言ってるのを見ながら光矢はため息をついた。

「置いて帰るのも薄情だな」

後で手製のクッキーでも差し入れれば機嫌は直るだろうがそれも手間だしどうせ今日は暇だ。付き合ってやるかと結論付けると光矢も音楽室に入り、部屋のドアを閉めた。

「ようこそ軽音部へ！」

「歓迎いたしますわ〜！」

音楽室には黒髪をロングにした少女とベージュのふわふわとした髪をこれまたロングにした少女が唯に挨拶している。それから二人は光矢に気づくと黒髪の少女は動揺したような表情を見せ、ベージュの少女は首を傾げる。

「あなたは？」

「俺は唯の付き添い」

「よしっムギ！ お茶の準備だ！」

「はい！」

ベージュの少女に今度こそ唯の付き添いである事を伝えようとする

がさつきのカチューシャの少女がまたもや遮り、ベージュの少女は去っていく。光矢はそれを見てため息をつき黒髪の少女に伝えようとするものの彼女は光矢の方を見ておらず、光矢は首を傾げるがなんやかんやの後に二人は椅子に座らされていた。その前には紅茶とケーキが準備されている。それに二人が困惑しているとベージュの少女が笑顔で言った。

「どうぞ、召し上がってください」

「あ、ああ……」

彼女の言葉に光矢はこくと頷いてフォークを取り、まず一口食べる。

「美味しい」

光矢は思わずそう口に出す。甘すぎず口の中で溶けるような味わい、自分もここまでの菓子を作る事は滅多に出来ない。これは絶対クッキーを差し入れても許してくれなかっただろうなと思いつつながら彼は唯の方を見た。

「おいし〜」

彼女はほっぺたに左手を当てながら満面の笑顔でケーキを食べている。本来の目的忘れてないだろうな、光矢は頭の中でそう思っているとカチューシャの少女が話し出した。

「実は私達も新入部員なんです……先輩達が皆卒業してて今部員は私達三人しかいないんだ」

「部員が四人以上ないと部活として認められなくて、一週間以内にあと一人集まらなかつたら廃部になっていたところなんです」

「本当に、入部してくれてありがとう！」

カチューシャの少女に続けてブロンドの少女が言うとカチューシャの少女が唯の手を両手で握ってまた上下にぶんぶんと振る。唯は言いつらそんな表情を浮かべており、光矢はしょうがないと呟いてカチューシャの少女を離すと唯に言うよう促した。

「あ、あの、実は私人部を辞めさせてくださいって言いに来たんです！ ごめんなさい！」

「え……や、辞めるって言いに来たんだ……そうだったのか……」

唯がそう言って頭を下げるとカチューシャの少女はしゅーんとなる、というか他の二人のテンションも下がり、部活内の空気が凍りついたような錯覚さえ感じるほどだ。

「俺もそれを言いに来た唯の付き添いで入部希望じゃないんだ。歓迎までしてもらってすまない、もしケーキとかがそのためだったなら後で代金を支払うが」

「あ、それは気にしないでください」

「も、もっと別の楽器をやると思ってた……」

光矢も頭を下げた後そう尋ねるがブロンドの少女は両手を前に出してそう言い、唯がカチューシャの少女に謝ってそう言っているのを聞くと問いかけた。

「じゃあ、何なら出来るんですか？」

「カスタネット……ハ、ハーモニカ!!」

(まあ、カスタネットとも言にくいわな)

ブロンドの少女の問いかけに唯はそう返し、光矢も苦笑交じりに心中で呟く。

「あ、ハーモニカならあるよ。吹いて見せ」

「ごめんなさい吹けません！」

(まあ吹いてるとこ見たことないしな、てか何故持つてる!?)

するとカチューシャの少女が懐からハーモニカを出して唯にそう言う。唯は速攻で謝る。それに光矢が途中でツツコミを入れていると黒髪の少女が口を開いた。

「でも、うちの部に入ろうって思ったってことは音楽に興味はあるんだよね?……他に入りたい部活とかってあるの?」

「う、ううん、特には」

黒髪の少女の言葉に唯は首を横に振って返すと次にカチューシャの少女が口を開く。

「それならさ、私達の演奏を一度聞いてから入部するかどうか判断しない?」

「え、いいの？」

「もちろんいいよ」

カチューシャの少女の言葉に唯が聞き返すと彼女は不敵な笑みを浮かべて返し、他の二人も頷く。それから光矢と唯は楽器の前に置かれた長椅子に移動し、前を見る。カチューシャの少女がドラム、ブルンドの少女がキーボード、黒髪の少女がベースのようだ。しかも黒髪の少女はレフティだ。

「それじゃあいくよ！ 1、2、3、4！」

カチューシャの少女がスティックでリズムを取ってカウントすると演奏が始まる、曲は翼をくださいのアレンジバージョン。卒業式では定番の曲、それがアップテンポにアレンジされていた。それを聞いている光矢はふと横の唯を見る、なんだか感動しているような様子を受けた。そして演奏を終えるとカチューシャの少女が頭をかきながら二人に近づいた。

「えへへ……どうだった？」

「あの、なんて言うか……凄く言葉にしにくいんだけど……」

カチューシャの少女の言葉に唯は手を握り締めながら眩き、意を決したように言う。

「……あんまり上手くないですね！」

（ ）ばっさりだー！（ ）

唯の言葉にカチューシャの少女と光矢の心中でのツツコミが噛み合う、しかし唯は胸元に両手を当てて楽しそうに微笑んでいた。

「でもなんだか楽しそうな雰囲気伝わってきました……私、この部に入部します！」

「ありがとうございます！ これから一緒に頑張ろう！」

唯の言葉に黒髪の少女が唯の手を握り締めながら言い、カチューシャの少女はその後ろでバンザイと言い小躍りを始める。それを聞いた光矢はとりあえずよしと頷く、するとブロンドの少女が声をかけてきた。

「あの、あなたはどうしますか？」

「おおそうだ！ お前は どうするんだ!？」

ブロンドの少女に続けてさっきまで小躍りをしていたカチューシャの少女が光矢に迫る。それに光矢は入部を断るとでも言おうとしたがその右手が何者かに握られた。

「……なんだ、唯？」

「光ちゃんも一緒に入るう？」

「光ちゃん言うな、そして断る」

唯の言葉にいつものようにツツコミを入れた後断ると言つと今度はカチューシャの少女が光矢を指差して言った。

「入れ！」

「だが断る！」

「断るのを断る！」

「断るのを断るのを断る！」

「断るのを断るのを断るのをことわりゆっ!？」

「噛んだな、俺の勝ちだ。というわけで俺は帰る。頑張れよ唯」

カチューシャの少女と光矢の断り合戦が始まったがカチューシャの少女が噛んだのを聞くと光矢は勝ち誇った笑みを浮かべながら音楽室から出て行くこうとする。しかしその右手は唯に掴まれたまま、光矢は息をついて唯を見る、それが彼の敗因だった。

「一緒にやろうよお……」

「うぐっ」

唯はうるうるとした小動物のような瞳で上目遣いをしており、それを直視してしまった光矢は息を詰まらせる。本人は全くの無自覚でやっているらしいがこれはVS光矢の最終兵器、この瞳を見てしまった光矢が唯のお願いから逃げ切ったのは彼の人生全てを見ても片手で足りる程度だ。

「……分かった」

「……やったー!!!」

そして今回も陥落。光矢が諦めたように呟くと四人は嬉しそうな声を上げ、唯はさらに光ちゃんありがとーと言って抱きつく。光矢はそれを引き剥がしながら入部希望書を請求、カチューシャの少女が手渡してきたそれにささつと必要事項を記入するとカチューシャの少女に再度手渡した。

「ほい、それと名乗っておく。俺の名前は若宮光矢だ」

「改めて、平沢唯です！」

「田井中律！ 担当はドラムでこの部の部長だ！ よろしくな」

「秋山澪です。担当はベースです……よ、よろしく」

「私は琴吹紬です。キーボードを担当しています。よろしくお願います」

光矢が名乗ると唯も名乗り、続けてカチューシャの少女 田井中律に黒髪の少女 秋山澪、ブロンドの少女 琴吹紬が名前を名乗る。それから唯が言った。

「でも、私楽器全然出来ないし、どうしよっか？……あ、マネージヤーっていうのは！？」

「運動部じゃねえんだから必要ねえよ」

「そうだ！ せっかくだから入部と同時にギターを始めてみたらどうかしら？」



「あ、それいいんじゃない？」

「この部、ギターいないしね」

唯は困ったように髪をかいた後名案を思いついたとでもいうような表情で言うが光矢がそれをあつさり却下、すると紬がそう言い、それを聞いた律と澪も頷くが唯は困ったようにううっと唸る。

「で、でもギターって難しそうないメージが……」

「大丈夫！ 私達も分かることは教えてあげるから！」

「そ、そうだね！ さっきの演奏聞いてたら私にも出来るかもって思えてきた！」

「それはよかった……」

唯の言葉に律が元気付けるように言つと唯は自信満々にそう返す。それを聞いた律はさりげなく失礼な事言われたせいかぴくぴくと頬を引きつらせながら微笑んでそう言った。

「若宮君はどうするんですか？」

「ん、どうするって？」

「楽器、平沢さんと一緒にギターをやるのもいいけど」

相変わらずの天然娘に苦笑を浮かべている光矢に紬が話しかけ、それに彼が首を傾げると紬の後ろにいる澪がそう言う。それを聞いた光矢が髪をかきながら言った。

「いや、俺ギター弾けるけど」

「……えっ!?!」「」「」

光矢の言葉に彼以外の四人が驚愕の声をあげる、と光矢は唯を見ながら言った。

「他の三人はいい、唯、お前どういう意味だ? 中学時代何回か聞かせたぞ」

「え、あ、いや、その……あ、あはは」

「ったく、どうせお菓子に意識がいつてたんだろ」

光矢の言葉に唯は彼から目を逸らしながら乾いた笑み見せ、光矢は悪態をつく。すると律が言った。

「なんだよ、それならそうと早く言ってくればいいのに」

「もう一年ばかり弾いてねえから多分かなり鈍ってるぞ。元々暇な時の趣味の一環レベルだからな」

「じゃあ、唯にギターを教えるのは若宮君お願いできるかな?」

「別にいいぜ」

律の言葉に光矢がそう言うのと続けて漣が尋ね、光矢はそれにこくんと頷く。

「光ちゃんせんせい師匠、よろしくお願いします！」

「光ちゃん言うな、そして師匠も止める」

唯が敬礼みたいなポーズを取って言うと光矢は呆れたように返す。

「じゃあ、時間も時間だしこの話はまた次回にしようか」

「そうだな。んじゃ今日は解散！」

漣の言葉を聞いた律は大きく頷くと解散の号令をかけ、全員音楽室を出て行くとそれぞれの帰路につく。

「光ちゃん師匠！ 明日からよろしくお願いします！」

「だから光ちゃん言うな、師匠も言うな」

唯の敬礼交じりの言葉に光矢は呆れたように返すと唯は面白そうにえへ〜と笑う、それにまた光矢はやれやれとため息をついた。そしていつの間にか唯の家までついていた。

「それじゃあな」

「光ちゃん」

「だから光ちゃん言うな……」

光矢がそう言って自分の家に歩き出していると唯が呼びとめ、光矢は慣れたようにそう言って振り向く。

「今日はありがとね。じゃ、また明日」

唯は柔和に微笑んで光矢に今日のお礼を言うと家に入り、その不意打ちに光矢は思わず顔を赤くしてしまったがぶんぶんと顔を横に振ると早足で彼女の隣の家である自分の家に帰っていった。

## 第二話 入部、軽音部！（後書き）

随分長くなったな、4000文字くらいは書かないと落ち着かない  
と思ったけどそれを軽く越えてるし……。

あ、ちなみに僕はけいおん！については漫画を第一巻しか持ってないしアニメは全く見ていないため多少の矛盾点があっても多めに  
見てください、主にアニメ関係は。

### 第三話 楽器紹介

とある一軒家の一部屋、そこにあるベッドで寝こけている少年  
光矢は顔の上に「菓子作り全集」という本を開いたまま乗せて眠っ  
ていたがベッド脇に置いていた携帯がピピピと機械的なアラーム音  
を鳴らし始めると彼は起き上がり、携帯を開いて7:30のアラ  
ームを止めるとふわぁと大きく欠伸をした。

「あゝ、本読みながら眠っちゃってた……」

光矢はそう独り言を呟くと菓子作り全集をたたんで本棚に戻す。そ  
して勉強机の上に乗せているカバンを開いて荷物をチェックし始め  
た。今日の授業の教科書とノート、筆記用具に音楽プレイヤーとヘ  
ッドフォン、まあ大体こんなもんかと確認を終えてカバンを閉じ、  
部屋の隅に目をやると思い出したように呟いた。

「あ、そだ」

そう呟いた後光矢は部屋の隅に行つてギターケースを持ち上げる。  
軽音楽部に入部した事により今日からこれも持っていく事になった。

「少し弾いとくか」

もう一年近く弾いてないからかなり鈍つていると言ってるしどれぐ  
らい弾けるか試しておいてもいいだろう。そう考えて彼はギターケ  
ースを開けて中のギター 昔父がバンドを組んでいた時に使つて  
いたというお下ガリのギブソン・ES-335 を取り出し、軽  
く弾き始める。一応昨日の内に弦の調整等を行っていたから音自体  
に問題は無いものの彼は苦しそうな表情を見せる。指が思うように

動かない、やはり結構鈍っていた。

「……ま、なんとかなるだろ」

これから練習していけば勘は取り戻せるだろ。光矢はそう結論付けるとギターをギターケースに戻してカバンの横に置いておく。

「光矢ー、ご飯よー」

「はいはい」

そして階下から聞こえてきた母親の呼び声を聞くと光矢は軽くそう返して部屋を出て行き怪談を下りて台所に向かっていた。今日の朝食はトーストに目玉焼き、野菜サラダだ。パンに塗るためのバターやジャムも用意されており、光矢はイチゴジャムをトーストに塗って齧りつく。

「ほう言えばお兄ひゃん……ゴクン、さっきギターの音が聞こえてきたよ」

「あら光矢、ギター再開したの？」

バターを塗って食べている少女　光矢の妹である真由の言葉に母親がくすくすと笑いながら言う　光矢はぶっきらぼうにまあそんなもんと言って全部残さず食べ終わるとごちそうさまと言い残して台所を出て行った。そして自分の部屋に戻ってカバンとギターケースを持つと玄関に移動する。

「行ってきまーす」

そう言い残すと家を出て行き、隣である唯の家の前を通りがかって少し考える様子を見せるがギターを部室に置いてくるため普段より早く出たんだから絶対に唯はまだ寝てるだろうし待ってたら早く出た意味がないと判断しスルーして学校に向かう。そして一人学校に着くと軽い足取りで部室に向かう。そして部室に辿り着くとそこには人影があつた。

「よお……秋山？」

「あ、若宮君……えと」

「ギターを置きに来ただけだ。鍵閉めるならちよつと待ってくれ」

「うん」

黒髪を長く伸ばした少女　秋山澪。光矢が彼女の名前を呼ぶと彼女は少し困った様子を見せるが光矢はさりとそう言い、それに澪は静かに頷いてドアから離れる。そして部室の適当な隅にギターケースを置くと部室から出て行った。

「サンキュ」

「いいよ。えと、若宮君ってギター何使ってるの？」

「エレキだけど？」

光矢の礼の言葉に澪は微笑を浮かべながら返した後少し詰まっただけからそう尋ね、それに光矢がさりと返すと澪は額に手をやってまた返す。



「そうじゃなくって、製作会社とか……名前何？」

「製作会社？……親父が昔バンドしてた頃のお下がりで……確かギブソンなんか」

溇の問いに光矢は考え込んで記憶を手繰り寄せるとやっとそうとだけ思い出す。

「へえ、結構いいの使ってるんだね」

「みーおー！」

ギブソンの名を聞いた溇がそう言っていると階段を駆け上がる音とそんな声が聞こえ、直後律がやってきたと思うと溇に抱きつく。

「ちよつ、律!？」

「やっぱここにいたんだ。ってあれ、光矢もいたの？」

「ああ、ギターを置きにな」

「ふん……」

溇が慌てたように叫ぶと律はにしと笑いながら抱きつく力を強め、その後光矢の存在に気づく。その言葉に光矢がそう返すと律はにやにやと嫌らしく笑い始めた。

「なんだ？」

「いゝやゝ、お二人の邪魔して悪かったかなってふぎやつ!？」

「あ、悪い。孝明にいつもやっってる癖で」

嫌らしく笑い始めた律に光矢が尋ねると律は笑いながら茶化すように言うが直後光矢の拳骨がその頭に叩き込まれ、光矢は殴った後頭を押さえて悶える彼女に謝罪する。そしてふと携帯を見るとまた口を開く。

「じゃあ、俺はそろそろ教室に戻る。鍵俺が返して来ようか？」

「あ、気にしないでいいよ」

「そうか。んじゃまた放課後にな」

「う、うん、つてえっ!？」

「ちよっ!？」

光矢の問いに漣が首を横に振って返すと光矢はじゃあ遠慮なくと言って階段脇に歩き寄ると何を思ったか一階下に一気に飛び降り、漣と律は驚いたように階段に駆け寄り、下を見る。しかし光矢は何事も無かったかのように歩き去っていたらしくその姿は既に無い。それを確認した二人は啞然とした様子で顔を見合わせた後自分達も戻ろうと階段を普通に歩き下りていった。それから光矢は教室に入ると隣の席でぐでーっとなっている唯を見て苦笑しながら自分の席に着き、唯のおはよー光ちゃーんという言葉にはようという挨拶と光ちゃん言うなといういつものツッコミを入れておく。

「やく終わった終わった。光矢、帰ろう」

そして時間が過ぎて放課後、光矢が机の中の荷物をカバンに入れていると孝明が後ろから声をかけ、それを聞いた光矢は残念でしたと

いうように笑った。

「悪いな。今日は俺が部活だ」

「あゝ、唯ちゃんのお供で軽音楽部に入ったんだっけ？ 」「ご苦労様」

「まあ、ギターの実験はあるからな……唯、行くぞ」

「あ、待ってよ光ちゃん！ の、和ちゃん、また明日ね！」

光矢の返答を聞いた孝明は思い出したように言った後労うように続け、それに光矢はまたふつと笑いながら言つと立ち上がつて唯に呼びかける。それを聞いた唯は慌てたようにカバンを持って立ち上がり和にさよならを言つと待つてと言つたのに既に教室を出ている光矢を追いかけた。それから唯は部室への廊下で光矢に追いついた。

「もゝ、置いてかないでよ光ちゃん」

「光ちゃん言つな、唯姉え」

唯がぷうつと頬を膨らませながら言つと光矢も呆れたように息をつきながら返し、自分の事を姉えと呼んでくれたことが嬉しかったのか唯はにこつと微笑む。そして笑顔のまま言つた。

「でも楽しみだなゝ、今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるでしょ？」

「軽音部の本分はバンドでの演奏なんだからな？ 」「というか昨日は退部するつもりだったろうに、本当に大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫、なんとかなるよ。だって光ちゃんがいるんだもん」

「う……」

唯がほわほわとした笑顔でそう言う。と光矢はまた呆れたようにそう言い、続ける。それに唯は見るもの全てを和ませるような柔和な笑顔を光矢に向けてそう言い、その笑顔を見た光矢の心臓がドキリと高鳴る。その初めての経験に光矢は顔にこそ出さないものの内心動揺しながら少し歩くスピードを速めた。

「わ、待ってよ光ちゃん！」

(な、なんなんだ！？ 昨日からなんか変だぞ、俺！？)

後ろから唯の呼び声が聞こえるが光矢はそれにいつものように光ちゃん言うなと言いつ返すのも忘れてドキドキと高鳴る胸を押さえつつ軽音部への部室へ急いだ。そして部室の前で唯が来るのを待ち、唯がやってくるとドアを開け部室に入る。

「うーっす」

「こんにちは〜」

「おお若宮それに唯！ 来たか！」

「こんにちは、どうぞ座ってください」

光矢と唯の挨拶に律と紬が返し、紬の言葉通り二人は椅子に座る。そして紬が紅茶とケーキを出してきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

袖が出してきた紅茶とケーキを見た唯は嬉しそうに頬を緩ませながらお礼を言っておケーキを食べ始め、それを横に見ながら光矢は真正面の澪に離しかけた。

「なあ、秋山……ここは軽音部なんだよな？」

「あ……………ああ」

光矢の問いに澪はかなり黙った後彼から目を逸らしながらようやく頷く。その意味する事はおおよそ理解でき、光矢はまたため息をついた。

「ね〜ね〜澪ちゃん、澪ちゃんはなんでギターじゃなくってベースをしようって思ったの？」

「えっ！？…………だ、だって、ギターはは……………恥ずかしいから……………」

突然の唯の問いに澪は不意を突かれて驚き、最後にはしばむような声でそう答える。それに唯が恥ずかしいと呟いて首を傾げると澪は恥ずかしそうにう〜と唸りながら答えた。

「だ、だって、ギターってバンドの中心って感じで、先頭に立って演奏しなきゃいけないでしょ？ そうなると観客の視線も自然に集まる……………じ、自分がその立場になるって、考えただけで……………」

澪は恥ずかしそうにそう返答を言い、言い終えて何かを考えるような表情を見せると彼女の顔からしゅーっと湯気が出る。そしてくらあっと席から倒れた。

「み、澪ちゃん!？」

「澪! しっかりしろ!」

唯が驚いたように声を上げると澪の隣に座っていた律が澪を抱きかかえて声をかける。彼女の顔は真っ赤で、また目もぐるぐると渦巻きになっていた。考えるだけでこうなるとは、かなり繊細というか恥ずかしがり屋だ。

「バンド組んで大丈夫なのかな?……」

バンドである以上多少なりとも目立つ事になるのに目立つと考えただけでこんな状態になってしまつて本当に目立つたらどうなつてしまふのだろうか、光矢はそう思いながらケーキを齧る。すると唯は次に紬を見た。

「ムギちゃんはキーボード上手いよね? いつからやってるの?」

「私、四歳の頃からピアノを習つてて、コンクールで賞を取つた事だつてあるのよ」

「へ、へえ〜……凄いね」

唯の言葉に紬は右手を右の頬に当てながら柔和に微笑んでそう言い、その事実唯は啞然としながらそう言う。それを横に見ながら光矢は紅茶を飲み、ふと気づいたように言った。

「そつえば、この部屋音楽室の割りにコップやら何やら随分良い物が揃つてるな?」

「あ、それ私も疑問に思ってたの。最近の学校ってこんな感じなのかな？」

「ああ、それは私の家から持ってきたのよ」

「「自前!?!」」

(つかどうやってこんな数のもの運び込んだんだ!?)

光矢の気づいたような声に続けるように唯が言うと細がさらっと言い、その発言に光矢と唯が同時に叫んだ後光矢は心中でさらに続ける。机は音楽室に置かれている物の高さが同じものを合わせているだけだが人数分のティーセットに食器棚、少女一人で運び込めるようなものではなかった。

(というか、かなりのお嬢様だったのか……)

喋り方から良い家の出とは予想していたが恐らく予想を超えるもの、光矢はぽかーんとしながら心中でそう呟いた。そして唯は最後に律を見て微笑みを浮かべる。

「りっちゃんはドラムって感じだよな？」

「なっ!?! わ、私にだって始めた理由があるのよ!?!」

「へへ、どんなだ？」

唯の言葉に律が憤慨したように叫ぶと光矢が紅茶を飲みながら尋ね、ストリートに聞き返されるとは思わなかったか律は目を逸らして人差し指同士をツンツンと当て合いながら言った。

「えーっとほらあれよ、その……かつこいいから」

「理由ないんじゃないん」

律の言葉に流石幼馴染か光矢と唯は異口同音でツツコミを入れる。  
それを聞いた律は大袈裟に腕を振りながら答えた。

「だ、だつてさ、ギターとかベースとかキーボードとか、そう指  
でちまちましたようなのを想像するだけでこう……キーツてなるの  
よ！」

「あ」

楽器選びにも性格が出るというのか。律の言葉に光矢はそう思いな  
がら納得というように息を吐きながら頷き、それを聞いてむかつと  
したのか律が光矢をビシッと指差した。

「だ、だつたら光矢はなんでギター始めたんだ!？」

「ん?……えーっと、理由は忘れたがギターに興味を持ってな。俺  
の親父が昔バンド組んでたらしくて、俺が使ってるギターは親父の  
お下がりだ」

「ふーん……なあ、何か弾いてみてくれないか？」

「あ、私も聞きたい！」

律の問いに光矢は正直にそう返し、復活した溲はそれを聞くと何か  
弾いてみてくれとリクエスト、唯も右手を挙げてそう続けると光矢



はへいへいと返し部屋の隅に立てかけていたギターケースからギターを取り出す。そして近くにあったアンプを運んで繋ぎ、ポリユームを調整すると立ったままギターを構えて適当に思いついた曲を演奏し始める。それを聞き出すと残る四人は急に黙り込むが演奏に集中している光矢は気づいておらず演奏を終えるとふくと息を吐いた、そしてぽかーんとなっている四人にようやく気づく。

「どうした？」

「じよ、上手だな……」

「これでも今朝久しぶりに弾いたら随分鈍ってたんだがな。まあ朝よりは幾分か指もよく動いた」

「凄いな！ さっすが光矢だ！」

「本当に凄いわ！」

漣がぼかんとしながら言う。光矢はふつと笑みを浮かべながら言い、律と絢が拍手しながら続けて言う。流石に照れたようにはにかみながら髪をかく。唯はまだぽかーんとしており、光矢が怪訝そうな目を向けると唯ははうつと言いながら意識を戻した。

「す、凄い！ かつこよかったよ、光ちゃん！」

「光ちゃん言うな」

唯の感動したかのような声に光矢は慣れたイントネーションで返す。それからしばらくお茶会を続けていると漣がふと口を開いた。

「そっいえば、唯はもうギターを買ったのか？」

「ギター？」

溲の言葉にケーキを食べている唯は首を傾げ、部室内が静寂に包まれる。そして唯はあつと言つと恥ずかしそうに髪をかきながら返した。

「そっか。私ギターやるんだっけ、忘れてた」

「……軽音部は喫茶店じゃないぞ」

唯の暢気な言葉に溲は呆れきつた表情で返す。それから唯が尋ねた。

「ね、ギターって値段どれくらいかかるの？」

「ん、安いやつなら一万円台からあるけどあんまり安すぎるのもよくないから……最低でも三万くらいのがいいかも」

「三万!?」

「……なんで若宮君まで驚くの？」

唯の問いに溲は口元に手をやって考えた後そう言い、その言葉に唯と光矢が共々驚きの声を上げると溲は啞然とした様子で尋ねる。

「いや、俺ギターショップで買うの弦や楽譜ぐらいだったから。ギターの値段そんなに注意して見てなかった……買い換える予定も無いし」

「三万、私のお小遣い半年分……」

光矢が苦笑しながらそう言う横で唯はがくがくと震えながら呟く。

「高いのは十万円以上のもあるよ？」

「……………りっちゃん」

「ん？」

溥の補足するような言葉を聞いた唯はくるりと律の方を向いて彼女に声をかけ、律がどうしたというように唯に目を向けると笑顔を見せた。

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

唯の笑顔での言葉に負けじと律も笑顔で反撃、それを聞いた唯ががくつと肩を落とすと溥が困ったように呟いた。

「でも、楽器がないと始まらないしなあ……………」

「そうだな……………よし、今度の休みにギターを見に行こうぜ！」

「「おーっ！」「」

「お、おおー……………」

溥の言葉に律は頷いて言った後思いついたといわんばかりにガッツポーズを取ってそう言い、その言葉を聞いた唯と紬が元気良く右手を挙げて返すと少し遅れて溥も恥ずかしそうに右手を挙げる。そし

て唯達は一人手を挙げてない光矢を見た。

「……俺も行くのか？」

「当たり前だろ！」

「行こ！ 光ちゃん！」

「光ちゃん言うな……分かったよ」

唯達の視線を受けた光矢の問いに律が頷くと唯もそう続け、その言葉に光矢はため息混じりに返した後分かったと頷く。

### 第三話 楽器紹介（後書き）

本当ならギターを買うまでで一部分のはずですがここらがきりいいので一度切っておきます。

ところで、ギターって結構な数あるんですね……なんとなくやさそうって理由だけで光矢のギターはギブソン・ES-335にしましたが数が多すぎて決めるだけで一苦労です……。さて、こんな駄文の分際で贅沢を言いますが感想等お待ちしております。それでは。

## 第四話 楽器購入

とある休日、本来ならやる事があればそれをやるか趣味に没頭しているだろう日なのは何でこんな事に巻き込まれているのだろう。光矢はそう思いながら自宅の隣である平沢家のインターフォンを鳴らす。すると家の中からは「い」という声が聞こえ、とたとたという足音が近づいてきたらドアが開き、栗色の髪をポニーテールにした少女が顔を出した。

「あ、光矢さん。おはようございます……お姉ちゃんですか？」

「ああ。軽音部に入部したとは聞いたる？ 唯姉えのギターを買いに行く事になってんだ。あ、そうそうこれ」

「あ、クッキー！ いつもありがとうございます」

少女 憂が苦笑交じりにそう尋ねると光矢も呆れたようにため息をつきながら返し、思い出したようにビニール袋に入れたクッキーを憂に手渡す。それを見た憂は嬉しそうに微笑んでお礼を言い、光矢も気にするなど返した。

「えーっと……待ってます？」

「……先に行く」

「はい。すぐに起こして後を追わせますね」

「悪いな」

憂の問いに光矢は少し考えてから返し、その言葉に憂が言い光矢が一礼して返すと憂はドアを閉め、光矢は一足先に待ち合わせ場所に向かった。しかし少し早く出すぎていたか待ち合わせ場所にはまだ誰もいない。

「唯姉え待つてりやよかつたかな……」

「やあ光矢、こんなとこで何してんの？」

光矢がぼそりと呟くと突然どこからともなく現れた孝明が声をかけ、光矢はその姿を見ると明らかに嫌そうな表情を見せてはあとため息をついた。

「うわっ酷い！ そんなあからさまに嫌そうな顔しなくてもいいのに〜！」

「お前、なんでここにいるんだ？」

「暇だから散歩に出て来てただけ。光矢こそどうしたの？」

孝明はわざとらしくオーバーなリアクションを取ってそう言うが対する光矢はいやに冷静にそう尋ね、それに孝明は笑いながら返し逆に尋ねる。それに光矢が説明しようとした瞬間だった。

「あら、若宮さん。早いですね……あら、そちらは？」

「ん？ よお琴吹。こいつあ不本意ながら幼馴染みたいなものだ」

説明しようとした瞬間細がやってきて光矢に挨拶、隣にいる孝明を見て不思議そうな表情で首を傾げると光矢も左手を軽く上げて挨拶

し、悪ふざけを交えたような表情でそう説明する。それに孝明がまた妙な表情を見せたが紬の方を見てぺこりと頭を下げた。

「秋草孝明と申します。以後よろしく」

「ご丁寧にどうも。琴吹紬と申します」

「オツケー、ムギちゃんね。よろしく」

孝明が自己紹介すると紬もぺこりと頭を下げて名前を名乗り、それを聞いた孝明は普段の飄々とした笑みを浮かべてそう返す。

「おっ！ おーいムギー光矢ー！」

「り、律、あまり大きな声出すなよ……恥ずかしいじゃないか」

するとそんな呼び声が聞こえ、三人は声の方を向く。そこには光矢達を見つけて大きく腕を振り存在をアピールしている律とその横で縮こまっている澁の姿があり、それを見た光矢は呆れたようにため息をつき紬はくすくすと笑っていた。そして律は光矢達の元に辿り着くと孝明を見る。

「ん？ お前、誰だ？」

「俺の小学校時代からの腐れ縁の秋草孝明。一応俺らと同じクラスだ」

律が孝明を不思議そうな目で見てみると光矢がそう紹介、それを聞いた律はへ々と頷いた後自分を指差した。



「へ」。軽音楽部部長の田井中律だ、よろしくな」

「秋山漣、よろしく」

「オツケ、りっちゃんに漣ちゃんね、よろしく。それにしても光矢、唯ちゃんを置いて三人相手にデートなんてやるじゃげふっ!？」

律に続いて漣も名乗ると孝明は純粹に笑いながら言い、今度はおちよくるような笑いで光矢向けて言うとすぐさま光矢が重いボディブローを叩き込んだ。

「唯のギターを買いに行くだけだ」

「いったー……でも、その唯ちゃんは?……」

光矢の言葉に孝明がボディブローを叩き込まれた腹を押さええずくまりながらそう尋ね、それを聞いた律はそついや遅いなと呟いた後立ち上がった孝明の両肩を掴んだ。

「ところで孝明! 会って早々なんだが軽音楽部に入部しないか!？」

「律、無理矢理の勧誘は止める」

「あはは、可愛い女の子からの誘いはありがたいとこなんだけどさ。僕は楽器出来ないしもうテニス部に入部しちゃってるから、どっちにしる身体動かす方が性に合ってるし」

律は目をキラーンと輝かせながら孝明を勧誘しようとするが漣がそれをたしなめ孝明自身もそう断りを入れ、律は残念とつつむく。そして孝明から離れ顔を上げながらまた言った。

「それにしても、唯はどうしたんだ？」

「来る前に憂に起こすようには頼んどいたが……」

「唯ちゃんって朝弱いもんね……電話したらどう？」

律の言葉に光矢がそう言うが孝明が頭をかきながら呟き、そう言う  
と光矢もそうすつかと返して携帯を取り出す。

「みんな、ごめん」

すると丁度良く唯がやってきて五人に合流し、唯はふうと息を吐い  
てすまなそうに笑った。

「ごめんね、遅刻しちゃって」

「いやいや、事故に巻き込まれたんじゃないかと心配してたよ」

「じゃあ、唯も来た事だし行きますか」

「うん！」

唯の謝罪の言葉に孝明が笑いながら返すと律がそう言い、唯が元気  
良く頷くと一行は歩き出す。

「……ってなんで秋草君がいるの!？」

「そしてなんでお前はナチュラルについて来ようとしている!？」

直後唯はようやく孝明に気づいて驚愕の声を上げ、さらに光矢も彼

にツツコミを入れる。それに孝明が笑い声を上げた。

「冗談だよ冗談。じゃあまた学校でね」

孝明は笑いながらそう言つて歩き去り、唯はばいばーいと手を振つて見送る。それから一行は改めて歩き出した。

「そういえば、唯ちゃんお金は準備できた？」

「うん。お母さんに無理言つて五万円前借りさせてもらったよ」

「そう」

紬の言葉に唯が頷いて答えると澪がよかつたというように笑みを浮かべ、唯はぎゅっと拳を握り締めた。

「お金つていつ必要になるか分からないよね。これからは大事に使わなきゃ！……いけないんだけど……」

唯は最初こそ力強く言い切るがふとその視線が一つの方向に向かう。その先の服屋には可愛い服が飾られていた。

「この服、可愛い……今なら買える……」

「じらじらじらー！」

その服を見ながら財布からお金を出そうとする唯を律が止め澪が呆れ顔があらあらうふふと笑っている横で光矢は唯に近づき彼女の首筋を引っ掴むと引きずり出した。

「わ〜ん、待ってよ光ちゃん見るだけだから〜！」

「光ちゃん言うな。そして信用できん。今まで何回見るだけって頼み込んで気がつけば衝動買いしてたか、数えるのも面倒だ」

唯の泣き声に光矢はそう言っただけで唯を引きずりその後を苦笑しながら漣達が続く。それから唯が解放されたのはギター店についてから、唯はふうはあと息をつき呼吸を整えると追いついた漣達と共にお店に入る。

「ギターがいつぱい……」

唯はきよるきよると店内を見ながらふとツインネックのギターに目をやり、頭の上にクエスチョンマークを乱舞させる。恐らく今彼女の頭の中には腕が四本ある人間が思い浮かんでいる事であろう。

「唯、何してんの？ こっちこっち」

律が呼び寄せると唯もそっちの方に歩いていき、ギターを色々と見る。しかし少しすると頭からぶしゅーとばかりに煙を出しながら漣に尋ねた。

「い、いつぱいありすぎて分からない……何か選ぶ基準とかあるの？」

「もちろんあるよ」

「ほんとに？ 何々？」

唯の問いに漣はこくと頷いて答え、それを聞いた唯が聞くと漣は

頷いて言った。

「ギターは音色はもちろん重さやネックの形も色々あるんだ。だから女の子はネックが細くて軽い奴を」

「あ、このギター可愛いー」

「聞けー！」

漣の説明を聞いていた唯はふと見つけたギターを見るとそう言っ走り寄り、漣が声を上げる。

漣が見つけたギターはギブソン・レスポール、唯は目をキラキラさせながらギターを見ているが律がその値段を見るとあゝと声を出した。

「唯、これ15万するぞ」

「え！？ じゃあ流石に手が出ないや……」

「このギターが欲しいの？」

律の言葉に唯がしゅんとなると紬がそう尋ね、唯はこくと頷く。それを聞くと紬は待っててと言って光矢に声をかけた。

「ねえ」

「なんだ？ 俺に店員脅せってのか？」

「違うわよ。値切るってどつやるの？」

「値切り？ 店員に負けてくださいって言えばいいんだろうがそう簡単には……あゝ孝明連れてくりやよかったな、あいつそういう交渉得意だし」

「うん、分かった。じゃあやってみるね」

紬と光矢はそう話し合った後光矢は息をついて孝明を連れてくればよかったと後悔するように呟く。しかし紬は笑顔で分かったわと言うと店員の方に歩いていき、光矢もその後を追った。

「あの〜、ギターのお値段五万円に負けてくれないでしょうか？」

「あ、あなたは社長の娘さん!？」

「マジで!？」

紬が笑みを浮かべて店員に尋ねると彼はひいっと驚きの声を上げながら叫び、その言葉に光矢も驚きの声を上げる。まさかたまに弦や楽譜を買いに行くこのギター店が紬の親の企業とは予想していなかった。

「え、あ、あの、ど、どのギターを？」

「あの、えーっと」

「ギブソン・レスポールです。15万の、そこで女の子がたむろしてる」

店員ががくがく震えながらそう尋ねると紬はギターの名前をど忘れしたというように口元に手をやって虚空を見上げるが光矢がそう説明する。そして店員は黙ったまま紬を見ると何かを考えているよう

な表情を見せ、やがてこくと頷いた。

「わ……分かりました」

「ありがとうございます」

店員の言葉を聞いた紬は柔和な笑顔でお礼を言うと一礼し、店員もはいつと礼を返す。そして紬は唯達の方に歩いていった。

「唯ちゃん、あのギター五万円で売ってくれるってー」

「マジで!?!」

「何!?! 何やったの!?!」

紬の言葉に律と唯が驚きの声を上げており、光矢はそれを見ながら店員の肩をポンと叩いた。

「気を落とさないください。これから後もし弦や楽譜が必要になつたら出来るだけこのお店を鼻屑にするようにしますので」

「……はい、ありがとうございます……」

光矢の言葉に店員はこくと頷いて答え、レジへと向かう。唯がギブソン・レスポールを持ってレジへと向かっていた。

「あ、ありがとうございます……」

心なしかげつそりとしている店員は唯にギターを売るとぺこりと頭を下げ、唯は嬉しそうにギターを抱えると光矢達と共に店を出て行く。

「やった、これで部活が出来るね」

「紅茶飲んでケーキ食ってばかりじゃなくなるのは進歩だな」

「も〜」

唯の言葉に光矢が冗談交じりに言う。唯がぷーと頬を膨らませながら言い、光矢もははつと笑う。それから律達と別れ唯の家に辿り着くと光矢が思い出したように唯の頭に何かをトンと優しくぶつけ、唯はその何か　本を見ながら口を開く。

「ふえ？　な、何これ？」

「ギターの弾き方やら基本くらい予習していた方がいいだろ？　唯姉え、もし何か分からない事があったら電話してこい。分かる範囲で教えてやる」

「うん、ありがとね。光ちゃん」

「こ、光ちゃん言うな」

光矢の言葉に唯が笑顔で言う。光矢はふいっとな顔を背け少し頬を赤くしながら返す。そして唯が家に入って行くのを確認すると光矢も自分の家に入ってしまった。

「あ、お兄ちゃん。お帰りー」

「ただいま」



光矢が家に入ると彼の妹である真由が声をかけ、光矢も静かにそう返すと靴を脱いで部屋に行こうとするが真由はじつと光矢を見、言った。

「お兄ちゃん、顔赤くない？」

「き、気のせいだ！」

真由の言葉に光矢はぎくりとしながらそう言い返すものの声が上ずってしまい、それを聞いた真由はにやにやと笑いながら続ける。

「声上ずってるよ？　もしかして唯お姉ちゃんとか何かあったとか？」

「な、何も無い！！！」

「あははっ慌てる。あ〜やし〜」

「真由！！！！」

真由の問いに光矢は激昂したように声を上げるがそれを見た真由は面白いものを見たとしてもいうように笑いながら言い、それを聞いた光矢が怒鳴ると真由はひゃ〜とわざとらしく言いながら自分の部屋に逃げ込む。それを見た光矢はちつと舌打ちを叩くと何か考えるような表情をしながら部屋に戻っていった。

「えへへ、可愛いなあ………持ってみたりして。うおっ、ミュージシャンっぽい！？　サ、サインの練習しなきゃ！？」

「お姉ちゃん、うるさい………」

唯は部屋にあつた身体全体を映せるサイズの鏡の前に立ってギターを持ちながら騒いでおり、それを聞いた憂が彼女の部屋のドアを開けて苦情のように言うが唯は聞いておらず、憂は諦めたようにため息をついてドアを閉めた。

「えっへへへ、明日から部活頑張つてすぐ光ちゃんが驚くぐらい上手になるうつと。一緒に演奏できたら楽しいだろうな」

唯はジャカジャカと音を出しながら一人そう言い、自分と光矢が一緒のステージで息ピッタリに演奏している姿を想像する。もちろんその横や後ろには漣に律、紬の姿もある……はずなのだが光矢のイメージが強すぎて上手く想像できない。というより光矢の事を思い浮かべるだけで変に胸がドキドキしてきてしまった。

「……………れ、練習練習」

唯はぶんぶんと首を横に振つてそう言う光矢からもらったギターの基礎本を開いて弾き方を学び始める。しかしその頭の中には光矢の姿があり、どうにも集中できなかった。そして週明けの月曜日、憂はいつものように階段の下から唯を呼びかける。

「お姉ちゃん、光矢さん迎えに来てるから早く起きないと怒られるよー?……………お姉ちゃん?」

憂がそう言うものの全く返答はなく憂は首を傾げながら唯の部屋に向かい、開けるよと言ってドアを開ける。

「添い寝!?!」

そこにはギターと添い寝している唯の姿があり、思わず憂はそつ声を上げていた。

#### 第四話 楽器購入（後書き）

今回はギター購入編、孝明と軽音楽部メンバーの対面も済ませましたしこれからは彼もたまに軽音楽部と絡んでもらう予定です。作中で彼が断言したとおり彼自身は入部しませんけどね。

さてそろそろキャラ設定くらい入れた方がいいかな？彼らの初期設定に考えてるものはまだ半分出たかも怪しいけど、特に光矢は趣味関連伏線や描写とかにはチラチラ出てるけど断言はしてないし……。こんな駄文ですけど感想等もらえればありがたいです。それでは。

## 第五話 練習開始？そして中間テスト

「よっころしよ、っ」と

軽音楽部メンバーで唯のギターを買いに行った週明けの月曜日、もう授業も終わった放課後に光矢は何かの資料を運んでいた。そして机の上に置くとうしっと言って肩を回す。

「ありがとう、若宮君」

「気にすんなよ。んじゃ俺は行くから」

赤ぶち眼鏡の少女 和のお礼の言葉に光矢は手をひらひらと振って返す。彼が軽音楽部の部室に向かっていた途中に生徒会で使う資料を運んでいた和に出会い、運ぶのを手伝っていたというか資料を全部運んでいたのだ。そして和が唯によろしくと言うと光矢もおーと言い返して生徒会室を出て行き、軽音楽部の部室に急いだ。そして彼が軽音楽部部室の前に辿り着くと部室の中からギターの音が聞こえてくるのに気づく。

「唯姉えか？」

光矢はそう呟いてドアを開ける、と丁度唯がギターを弾き終えたようなポーズを取っており光矢はやっぱりというように笑みを浮かべる。

「あ、光矢。遅かったね〜」

「何でお前がここにいる？ 孝明」

突然聞こえてきた聞き覚えのある、しかし本来ならばここにいるはずではないはず者の声、その正体に光矢が言うとその相手 孝明はけらけらと笑った。

「いや〜りっちゃんに誘われてさ〜。今日丁度テニス部は休みだし入部はしないって前提で遊びに来てるんだ」

「秋草さん、紅茶どうぞ」

「ありがと、ムギちゃん」

孝明が笑いながらそう言っていると紬が彼に紅茶を渡し、孝明はお礼を言っていると紅茶を口につける。と彼はむっと表情を変えた。

「これ、ダージリン・ティーかな？」

「？ はい、そうですけど」

「だーじりん？ なんだそれ？」

孝明の言葉に紬は首を少し傾げながら頷き、律が呆けた声で言っていると孝明は紅茶を飲みながら説明を始める。

「ダージリンって言うのは紅茶の銘柄の一つでね。時に紅茶のシャパンとまで言われる品でセイロンのウバ、中国のキーマンと並び世界三大紅茶とまで呼ばれるものなんだ。市場にはダージリンの名を騙る偽者やほんの少ししかダージリンを使わない粗悪品も出回ってるみたいだけど、これは本物のちゃんとしたものみたいだね」

「へ」

「毎度毎度どこからそんな知識を手に入れる？　というかお前に判別つくのか？」

「Wikipedia万歳だね」

「は？」

「あゝいやいやこつちの話。でもこのお菓子も紅茶によくあって美味しいよ、いっつも食べてるそうだけどもらっちゃっていいの？」

孝明の説明を聞いた律と漣は感心したように頷き、光矢がため息をつきながらそう言っていると孝明はぼそりと呟く。それに光矢がはつと言っていると孝明は飄々とした笑みを浮かべながら紅茶を飲んだ。

「そうなんですか。私家で余ってるものを持ってきてるだけでそこまで詳しくは知りませんでした、勉強になります。あ、お菓子も色んなところから貰うんですが家に置いておいても余らせてしまうので皆さんに食べてもらった方がいいんです」

「世界三大紅茶って言われる紅茶や貰うお菓子が余るような家ってどんな家だよ……」

紬が頷きながらそう言っていると光矢がツッコミを入れ、それから唯の方を向いた。

「そういえば唯、お前さつき何か弾いてたよな？　何か弾いてみてくれないか？」

「うん、いいよ」

光矢の言葉に唯は嬉しそうな笑顔でそう言つと弦に指をやる。

チャラリ〜ララ〜チャラララチャララ〜

「なんでそれ!？」

それから唯が弾き始めたのは有名なラーメンの曲。それに光矢がツッコミを入れると漣が首を傾げた。

「唯、家でギターの練習してないの？」

「家じゃ放つたらかしなんじゃないの？」

「そ、そんなこと無いよ!」

漣の言葉に律が両手を頭の後ろにやりながらにやにやとした笑いで続けると唯がキツとした表情で言い、メンバーが驚いたような顔を見せると唯は自信満々というような表情で続ける。

「すっごい大事にしてるんだよ? 埃がついたら取って、鏡の前でポーズ取ったり添い寝してみたり服着せてみたり写真撮ってみたり、ポーツと眺めてて一日が終わるなんて事もしょっちゅう……」

「「弾けよ」「」

唯は最後恥ずかしいというように両手を頬に当ててふるふると首を横に振りながら言うがそれに対し光矢と律がハモリツッコミを入れる。それを聞いた唯は彼らから目を逸らし両手の人差し指をツンツンとつつき合わせながら呟く。



「いや〜ギターつてきらきらぴかぴかしてるから、なんか触るのが怖くって……」

「あ〜分かる分かる。そういえばギターのフィルムも剥がしてないもんね……唯つてもしかして携帯のモニタのフィルムも剥がしてないんじゃない？」

「すごい！　なんで分かったの!？」

唯の言葉に澪が笑いながら頷いてそう言い、気づいたように続けると唯は驚愕の表情でそう叫ぶ。それを聞いた澪はなんと言えばいいのか分からないというようにはあと息をつき、直後律がなんだかうずうずとしたような手つきで唯のギターを見る。

「そいやーっ!！」

「あぁーっ!！」

そして唯の隙をついてフィルムをびりびりと剥がし、それを見た唯が悲痛な悲鳴を上げ半泣きそうな表情でふるふると震え、部室の隅で体育館座りになる。なんかず〜んというような音が聞こえてきそうだし負のオーラが見えてきた。

「田井中が悪い」

「律、謝れ」

「ご、ごめん！　ほんの出来心だったんだ!！」

光矢と澪の連続攻撃に律はパンツと両手を合わせ頭を下げ謝るが唯は動かさず、光矢はしょうがないと呟いて自分のカバンの中を探る。

「ほら、このクッキーやるから機嫌直せ」

「そ、そんなもので機嫌が直るわけ」

光矢が取り出したのはビニール袋に入れた十枚程度のクッキー、それを見た澁が呆れたように言うが直後唯は目をキラキラさせながら袋を引ったくり美味しそうにクッキーを齧り出した。

「直った!？」

「はふ〜、やっぱり光ちゃんのクッキー美味しい〜」

「光ちゃん言うな」

澁が驚いたように叫んでいると唯が幸せそうな表情で幸せそうに言い、光矢がいつもの調子でツッコむ。その唯の言葉を聞いた律がへつと声を出した。

「こ、光ちゃんのクッキー？」

「ああ、俺が作った。菓子作りが趣味なもんでな」

「光矢のお菓子って美味しいんだよね。中学時代家庭科の調理実習でクラス中で取り合いになってたのを思い出すよ」

律の言葉に対して光矢は頷いてそう言い、孝明が笑いながら続ける。すると唯はクッキーを食べながら何かを悟ったように目を瞑りうんと頷いた。

「そうだよ、やっぱりギターって弾くものだよ……ただ大事にしているだけじゃギターも可哀想だよ……ありがとっりっちゃん！ 私やる気出てきたよ！」

「そ、そうか？ うん、唯がギターを練習するきっかけになると思っただんだ！ 流石私ぐふっ!？」

「調子に乗るな」

唯がぐつと拳を握りながら言つと律は自慢げにそう言つがそれに彼女の隣に立っていた澪が肘打ちでツツコミを入れ、的確に入ったらしく律は脇腹を押さえながら床に手をつけ悶え出した。

「そっいえば、どうやってギターでライブみたいな音出すの？」

「光矢がやってただろ？ アンプに繋いだら出るよ。やってみる？」

唯がふと首を傾げて尋ねると澪がそう言つてアンプを持ってくる。そして唯は澪の言う通りにギターをアンプに繋ぎ、構える。そして弦を鳴らすとジャラーンとアンプから音が出た。

「おおー！ かっこいいー!……でもまだ弾けるのはこれだけ……」

唯は感動したように声を上げた後残念そうな表情で某ラーメンの音楽を弾く。

「アンプで音を鳴らすのはもうちょっと練習した後だね……」

唯は残念そうにそう言つてアンプからコードを抜こうとし、それを見た光矢はげつと呟いてカバンからヘッドフォンと音楽プレイヤーを取り出すと素早くヘッドフォンを耳につけ適当な音楽を流し出す。

孝明も分かっているのかさつと両手で耳を塞いだ。

「あつ、唯！ 危ない！！！」

「ほえ？」

漣の悲鳴のような声を聞いた唯はほえと言いながらコードを抜く。その直後アンプからボンツという爆音みたいな音が響いて唯は倒れ、漣も反射的に耳を押さえながら言った。

「ボ、ポリュームを下げる前にコードを抜くとさつきみたいな音がするんだ……」

「み、漣ちゃん……もうちょっと早く言って……み、耳がキーンって……」

「光矢、お前……一人だけヘッドフォンで助かるなんてずるいぞ……」

漣の言葉に唯は間近で直撃したため耳鳴りと戦いながらそう返し、律も耳を塞ぎながら光矢に向けて言う。それに光矢は苦笑で返していた。そして孝明がそろそろ帰るよと言って立ち上がり今日はありがとうと言って部屋を出て行くと孝明も自分のギターを取り出して練習を始める。すると唯がふとギターを見ながら言った。

「そういえば、ギターの弦って怖いよね。細くて硬いから指切っちゃいそう……」

唯の言葉を聞いた瞬間律がキラーンと目を輝かせ、悪戯っぽい笑みを浮かべながら口を開く。

「そうだぜー、気をつけないと指がスパークして切れて血がドバースと」

「きゃーっ！……！」

律が悪戯っぽくそう言っていると悲鳴が聞こえる。しかしその悲鳴の主は唯ではなく何故か漣だった。

「……あ、あれ？　なんで漣が悲鳴を？　唯を驚かせようとしたのに……」

「い、い、痛い話は駄目なんだ……」

律の言葉に漣は耳を押さえ身を縮めてぶるぶる震えながらそう言い、光矢は苦笑しながらギターを弾く。そして漣は気を取り直すとコホンと咳をした。

「ま、まあ、ギターを練習している内に指先が硬くなるから血が出たりする事は無いよ。ほら、私はベースだけど」

「ほんと？」

漣がそう言っつて右手を差し出すと唯は首を傾げながら言い漣の指先を揉む。するとそのぷにぷに感が気に入ったのかぷにぷにぷにと揉み出した。

「あの、唯？」

「も、もうちょっと……」

澗の言葉に唯はそう言いながらふにふにと澗の指を揉んでおり、光矢は適当に弾き終わると唯に近づき彼女の頭をコンと軽く叩いた。

「練習しろ」

「うう……でも、ギターを練習するって言っても何から始めたらいいの……」

「ギター買いに行った帰りに渡しただろうが。基本覚えろって」

「あ、そうだった……」

光矢の言葉に唯がううっと言いながらそう言っていると光矢は呆れたように返す。それを聞いた唯はカバンの中から基礎本を取り出して戻ってくる。光矢に頭を下げた。

「楽譜の読み方教えてください」

「そこからかよ。分からなかったら電話しろって言っただろうが」

「いや、あはは……（…練習し始めたのが十時回ってからで連絡しにくかったなんて言ったら怒られるよね……）」

唯の頭下げながらの言葉に光矢は呆れたようにそう言っていると唯は苦笑で返し、心中で呟く。そして唯から基礎本を取って軽く読むと唯に返し、まずはコードから教え始めた。

「えっと、これがCでこれがDで……」

そして部活が終了して唯は一人帰りながら光矢に教えてもらったコードを反芻しつつ指を動かす。ちなみに普段一緒に帰っている光矢は今日はスーパードで牛乳の特売だからと言って全速力で疾走帰宅していた。

「唯ーっ！」

「あ、和ちゃん！」

突然聞こえてきた呼び声に振り向くとそこにいた少女。和に気づき唯は手を上げて返す。と和は怪訝そうな目を見せた。

「何それ？ 新しい挨拶？」

「え？……あ」

和に言われて気づいたが思わずコードが指に出ていた。それに唯はえへへと笑いながら手を下ろす。

「えへへ、光ちゃんにコード教えてもらって、今覚えなおしてたんだ」

「そう。頑張ってるのね」

「うん。そういえば和ちゃん遅かったね。どうしたの？」

「ええ、図書館で中間テストの勉強してたから」

「へ〜……」

唯と和は二人会話を繰り返す。和の言葉に唯が頷いたところで一旦沈黙が訪れる。

「え！？ 中間テスト！？」

そしてそう言って出した指にまたコードが出てしまい、和は呆れた表情でそれもコード？とツツコミを入れた。

「そっかあ、もう中間テストなんだあ……せつかく頑張つてギター練習しようと思つたのに……」

「あんた今まで試験勉強なんてろくにしていなかつたじゃない。大概泣きついてたでしょ？」

「そっかー……なら大丈夫だね」

「いや、大丈夫じゃないでしょ……」

唯がしゅーんとしながらそう呟いていると和がそう言い、それを聞いた唯がウインクしながら返すと和は呆れたようにため息をついて言った。

「あ、そっぴやもうすぐ中間テストか……ま、なんとかなるだろ」

一方光矢も今日唯に教えていたコードを意識しながらギターを弾き、ふと思ひ出したように呟くがすぐにそう呟くとギターの練習に戻った。



## 第五話 練習開始？そして中間テスト（後書き）

どうでもいいでしょうが孝明の種知識はwikiを参考にしております。

さて、さらさらと筆が進んだので一日で二話投稿出来ました。ちなみにキャラ設定は区切りよさそうな次回の中間テスト編の次に入れる予定です。

さ、やっと光矢の趣味の一部が出せるようになってきたし頑張らな  
いとな。こんな読者がいるのかも分からないような駄文ですがこれ  
からお付き合いよろしくお願いいたします。感想等もらえたら喜  
びます。それでは。

## 第六話 中間テスト！そして追試！

私立桜が丘高校、ここの教室に集まっている生徒は殺気立った様子で教科書やノートを読み人によつては暗記の語呂合わせを口に出している。

「……」

そんな中光矢も何かの本を読みながらノートに書き込みを行っていた。しかしその本は教科書でも参考書でもなく「初心者のためのギター入門」と書かれたギターの練習本。光矢はこんな中テスト勉強をせず唯の練習メニューに頭を悩ませていた。

「よし教科書しまえー、テスト始めるぞー」

先生がやって来てそう言うとなんか人がもうちょっと待ってーとか悲鳴を上げたりしているが光矢は平然とした表情で本をしまい、シャープペンをくるくると回しテスト用紙が配られるのを待つ。

そんな感じの日は数日続き、テストが終了しその翌日からテストが返却されていく。

「若宮ー」

「はいはいー」

担任の呼び声に光矢は軽くそう言いながら前に出てテストを受け取り、確認するとまあこんなもんかと呟いて席に戻りテストをさつさとカバンにしまい込む。ちなみにその後呼ばれた唯はちくんといい擬音語が似合いそうな表情を見せていた。そしてテスト返却が終了

して放課後、光矢は立ち上がって未だに心ここにあらず状態の唯を呼ぶ。

「唯、部活行くぞ」

「うん……」

「唯ちゃん。部活行くぞ」

「なんでてめえも来るんだ」

光矢の言葉に唯はただ言われた事に返すようなイントネーションで返し、続けて孝明が言うのと光矢がツッコミを入れた。それから数分した後唯は意識を取り戻し結局孝明も共に軽音部の部室に行く。

「ちわっす」

「おっはよ」

「こんにちわ……」

三者三様にそう言うと既に集まっていた律、漣、紬が三人に顔を向け、律が右手を挙げる。

「おっすお前ら！ いや〜ようやくテスト終わったな〜」

「高校になって急に難しくなって大変でしたわ」

「そうだな……そして、ここにもっと大変そうな奴が……」

律がいつものように元気良く言うと紬もほんわかとした笑顔で言い、漣も頷いた後一人テンションの低い唯を見てそう続ける。

「そんなに、テスト悪かったのか？」

「……クラスで一人追試だそうです」

澗の言葉に唯は答案　一番上のは12点だった　を見せながら  
そう言い、澗達三人はうわあと心中で呟く。そして紬がフォローする  
ように声を出した。

「で、でも大丈夫よ！　今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない  
？」

「そうそう！　ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

「甘いな」

紬のフォローに合わせて律もそう言うのと光矢が言い、それに二人が  
へっと言うと唯は目を逸らしながら呟く。

「勉強は全くしてなかったけど」

「励ましの言葉返せコノヤロウ」

唯の言葉に律がツッコミで返す、そして澗が呆れたように尋ねた。

「なんで勉強しなかったの？」

「しようとしたんだけど……なんか勉強中って他の事に集中でき  
りしない？」

「あゝ分かる分かる。部屋の掃除はかどったりね」

溥の問いに唯があははと苦笑をしながら言い尋ねると律がこくこくと頷き、唯は苦笑交じりに目を逸らしながら続けた。

「それで勉強の息抜きにつてギターの練習してたら抜け出せなくなつて……でも、おかげでコードほとんど弾けるようになったよ！」

「その集中力を勉強に回せば……」

唯は苦笑交じりの言葉の後ピースサインをして嬉しそうに続け、溥が呆れたようにため息をつく。それから律が孝明に尋ねた。

「そついえば、孝明はどうだったんだ？」

「ん、僕？ これだけど」

律の言葉に孝明は軽くそつ言つて答案を渡す。どれも赤点まではいつてないが平均にも届いていない言わば中の下程度だった。

「え、お前あんな博識なのに……」

「雑学はすぐ覚えられるんだけどこつというのはどうもね。興味持てないつて言つか」

ダーズリン・ティーなんてマニアックな知識を暗唱するのにテストは平均以下、それに律と紬がきよとんとしていると孝明はあははと笑いながらあつさりとそつ言う。それから今度は唯が尋ねた。

「そついうりっちゃんはどつだったの？」

「ん〜私〜？ 余裕ですよこの通り！」

唯の言葉に律はにやにやと笑いながらば〜んと効果音がつきそうな勢いで答案を見せる。一番上の数字は89点、それ以外も軒並み80点前後をマークしており律はおほとお嬢様みたいな笑いを見せるが唯は何か残念そうに律を見た。

「こんなの、りっちゃんのキャラじゃないよ」

「なんだと！ どういう意味だ！？ 私くらいの人間になるとなんでもそつなくこなしちゃうのよ！！」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに……」

唯の言葉に律は自信満々にそう返し、それを聞いた唯はしゅーんとなる。すると漣がにやついて言った。

「テスト前日に勉強が分からないって泣きついてきたのはどこの誰だっけ？」

「あつ漣！ ばらすなよー！！」

「それでこそりっちゃんだよ！」

「赤点取った奴に言われたくないわー！！ っていい顔すんなー！」

「で、ムギちゃんはどっだったんだい？」

「え？ 私ですか？……は、恥ずかしいですけど」

澗の言葉を聞いた律が慌てたように叫ぶと唯がいい顔で律の両肩を掴んで言い、それに律が吼えていると孝明が紬に話しかける。それを聞いた紬は恥ずかしそうに自分の答案を見せた。

「わ、全科目八十台前半……」

「くーっ、こうなったら澗と光矢での最終勝負だ!!」

「のぞむところだよ!!」

「当人よそに話を進めるな!!」

孝明が驚いたように呟くと律が唯を指差しながら言い、それに唯がのぞむところと返すと光矢と澗がハモリツツコミを入れる。しかし二人は聞いておらず律は澗の、唯は光矢の答案を勝手に取り出した。

「これが澗のだ!!」

「光ちゃんの力思い知るといいよ!!」

二人はびしっと効果音がつきそうなくらいに答案を見せ付ける。澗の答案は全科目80台後半をマークしており、対する光矢は……。

「さ、最低点数90、最高点数100!？」

見事に全科目九十点台、一つ満点をマークしていた。文句なしに光矢の勝利、それを見た律はがくと膝をついた。

「ば、馬鹿な……光矢は授業中寝てて試験中は分からんって発狂、追試だつてサボるような奴だと思っていたのに……」

「そうか田井中あ、お前俺をそんな目で見てたのか……上等だてめえ、覚悟できてんだらうな？」

「まーまー光矢、そう目くじら立てない立てない。授業中寝てるつてのは当たってるんだしげふっ!？」

律の呟きを聞いた光矢はぼきぼきと拳を鳴らして律に一步一步歩み寄っているがそれを孝明が笑いながら慣れたように抑えるが余計な一言を言ったため彼は光矢のボディブローを受けてしまう。それから光矢はつたくと息を吐き、カバンの中を見た。

「にしても全部コードを覚えたとなるとあれはもう必要ないか。じやあもつと真面目にしとけばよかつたかな」

「へ？」

「ああ、テストが終わった後唯にコードを猛特訓させようと練習メニュー作つたんだ。テスト前の時間使つて」

「……じよ、冗談だろ？」

光矢の言葉に律がへつと聞き返すと彼はそう説明、それを聞いた律が頬を引くつかせながら尋ねると光矢は黙る。その意味を悟つた律はがーんというような顔を浮かべており、漣が呆れたように言った。

「でも、だつたら若宮君に教えてもらえばいいじゃん」

「光ちゃん怒つたら怖いもん！ スパルタだもん!」



「数学教えてたらずぐ寝るわ英語聞き取りやすいようゆっくり読んでたらそれ子守唄にされるわ挙句お腹空いたお菓子作って言って言って全然勉強しなかつたら怒るわ!!!」

溲の言葉に唯が泣きそうな声で言うつと光矢が怒鳴り、唯はうつつと唸る。それに溲がため息をついていると紬がお茶出来ました〜と言つてお菓子も一緒に持ってきたためいつものティータイムに入った。そして紅茶を飲みながら孝明がふと口を開く。

「そういえば、赤点取った人は追試で合格点取るまで部活禁止だつて聞いたけど」

「うん、そうだよ」

「えっ!? それじゃあ部室にいるのもまずいんじゃないあ……」

孝明の言葉に唯が頷くと溲が心配そうに言うつ、と唯はにっこりと笑顔を浮かべた。

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし」

「そっか〜じゃあ大丈夫だね〜……つてなんでやねん!」

「ギブギブ……」

唯の言葉に律は笑いながらそう言うつが直後ノリツッコミとばかりに唯の首を絞め、唯は律の手を叩きながらギブギブと唸る。それを見ながら溲はしょうがないとため息をついて口を開いた。

「しょうがないな、それじゃあ今日は勉強会をするか」

「おっいいいなそれ。唯も漣に教われれば確実に合格点取れるぜ！ 漣は上手いんだぜ……一夜漬け術教えるのが！」

「おーい！ 印象悪いな！ 普通に教えるってば」

漣の言葉に律はにかつと笑った後目をキラーンと怪しく輝かせて続け、それを聞いた漣がツツコミを入れるようにそう言った。

「それじゃ、どこでやる？」

「ん、部活せずに追試の勉強つても気が引けるし……唯の家は大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

「んじやとつとと行くか……って孝明、お前は部活いいのか？」

「幸か不幸か今日は休みなもんで」

「自主的休部じゃねえよな？」

「いやだなあはは」

孝明の問いに漣は考えながらそう言い、唯に尋ねると彼女はこくんと頷く。それを聞いた光矢は立ち上がりながらそう言った後気づいたように孝明に尋ねると彼は今日テニス部は休みと返すものの光矢はじとりとした目つきで遠まわしにさぼってんじやねえよなと聞く。それに孝明は飄々とした笑みを浮かべており、光矢は諦めのため息

をついた。

それから一行は平沢家へと向かい、唯のただいまーという声に合わせて律達がおじゃましまーすと続ける。すると家の一室から栗色の髪をポニーテールにした少女　憂がやってきた。

「お姉ちゃんお帰り〜。あ、光矢さんこんにちは、秋草さんもお久しぶりです……お友達？」

「うん、部活の友達だよ」

憂は唯に挨拶した後光矢と孝明に挨拶、その後律達を見て唯に聞くと唯はこくと頷き、憂はまた深く頭を下げた。

「初めまして、妹の憂です。姉がいつもお世話になってます」

（（出来た子だー！！！！））

憂の挨拶に律と澪は驚いたように返し、紬は礼を返す。そして上がって唯の部屋に向かっていると不意に声をかけられた。

「あ、お兄ちゃん!!」

「なんだ真由、お前も来てたのか」

「や、真由ちゃん。久しぶり」

声をかけてきたのは光矢の妹こと真由、その姿に光矢が返すと孝明もやつと左手を挙げて続ける。

「誰だ？」

「俺の妹の真由だ」

「若宮真由と申します」

律の問いに光矢が真由を指しながら紹介し、真由もぺこりと頭を下げる。それに他の皆もよろしくと返した後一行は唯の部屋に行き、ドアを開ける。

「どござー」

「……すごい数だな、ぬいぐるみ……」

唯が中に入り律は後に続いて中に入るとそう呟く。部屋の中は犬や猫等の動物ぬいぐるみが多く揃っており、中には全長100センチはあるつかというような巨大な白熊のぬいぐるみもあった。

「あ、これ？ いくつか光ちゃんが作ったんだよ」

「「「え!?!」」」

「なんだ？ 何か文句でもあるのか？」

唯の事なさげな言葉を聞いた律、漣、紬の三人はばつと光矢を見る。それに光矢は額に軽く青筋を立てながら言い、律や漣はいやそのあははと誤魔化し笑いをし、紬は上手なんですわ〜と笑う。

「料理に掃除裁縫は昔から趣味の一環でやってたからな。特に菓子作りが好きでよく唯や憂にお裾分けしてた」

「光ちゃんの裁縫能力は凄いんだよ！ 特にくーたんなんて最高傑

作！」

「くーたん？」

「そののでかい白熊の事だ」

「あれ！？ あれお手製！？」

光矢の言葉に唯が熱弁していると細が首を傾げ、光矢が全長100センチはあるような巨大白熊ぬいぐるみを指差すと律が驚愕の声を上げる。そして光矢は目をキラーンと輝かせながら拳を握った。

「くーたんは俺の裁縫人生の中でも一番の大作だ！ 何せ企画設計製作に小六の夏休みほとんどをかけ材料も小六にしては拘った一品なんだからな！」

「そんなに！？」

「自由研究が間に合わなくなってくーたんの設計図と材料の余りから作ったミニくーたんを提出したの懐かしいね」

「ふわふわ感が結構人気だったよね、あれ」

光矢の熱弁を聞いた澁が驚いた声を上げると唯がにこりと笑いながら言い、孝明も笑いながら続ける。それらに律達三人はもう何も言えなくなっていた。

「あゝ」

「ひゃあっ！？」

突然後ろから声をかけられたのに漣が驚いた声を上げる。そこにいたのは憂、その呆然とした表情に漣がごめんと謝り唯がどうしたのと尋ねると憂はおぼんとその上に乗っているお茶とお菓子差し出した。

「皆さんよかつたらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですが」

( (本当に出来た子だー!!) )

憂の言葉に律と漣はまた心中で声を上げていた。そして憂は失礼しますと言ってまた頭を下げてから部屋を出て行き、おぼんを受け取った律はぼーっと唯を見ていた。

「いや、なんっていつか……同じ姉妹でこうも違うもんかね？」

「何が？」

「妹さんにいいところ全部吸い取られたんじゃない？」

「ひびーい……！」

律の言葉に唯は首を傾げるがその次の漣の言葉に唯はぼーっと頬を膨らませて抗議する。

「あながち本当かもね？」

「ああ……！」

それを後ろで見ながら孝明と光矢は互いにしか聞こえない程度の声  
でそう言い合っていた。

「それじゃ、そろそろ唯ちゃん勉強を始めましょうか」

「あ、そうだな。じゃあやるか」

紬の言葉を聞いた溲の号令で勉強会がスタート。しかし唯の勉強を  
見るのは溲だけで事足りておりたまに紬がちよっと口出しをする程  
度、光矢に孝明、律は暇を持て余していた。

「暇だ」

「そうだね……あ、なんなら何か話でもしてあげようか？」

「断る。お前の専門的もしくはマニアックな話にいちいちついてい  
けん」

「ちえ〜」

光矢と孝明はそう言いあい、光矢はやれやれと息を吐くとヘッドフ  
ォンを取り出して音楽を聴き始め、孝明もふわぁと欠伸をすると両  
手を頭の後ろに回し壁にもたれる。それから光矢はしばらく目を瞑  
って音楽を聴いていたが適当な一曲を聴き終わると一旦目を開ける。  
と唯が伸びをしており、光矢はヘッドフォンを外して尋ねた。

「終わりか？」

「ん？ ああ。これだけ出来れば充分だと思うから」

「時間も時間ですし、そろそろおいとましようかと」

「ああ、確かにもう六時回ってんな」

光矢の言葉に漣が返すと紬が笑みを浮かべながら返し、それを聞いた光矢は携帯の時計を見て頷く。すると孝明も立ち上がった。

「それじゃ、僕らは帰るとしますか」

「ああ……ってあれ？ 律は？」

「あれ、いない？」

孝明の言葉に漣は頷いた後律がいないと呟き、唯が部屋を見回しながらそう言う。

「先に帰ったんでしょうか？」

「ま、いいだろ。俺らも帰ろうぜ」

紬が首を傾げながら呟くと光矢はそう言うて立ち上がり、漣もそうだなと言って立ち上がる。そして唯も見送るよと言って一緒に部屋を出て行き、階段を下りる。

「うおっ、負けそう!?!」

「……今の声」

突然聞こえてきた聞き覚えのある声、それに反応した漣はその声が聞こえてきた部屋に入る。そこには憂と共にゲームをやっている律



の姿があった。二人プレイのゲームなのか真由は後ろで見ている。

「馴染みすぎ!」

「うおっびっくりしたー……勉強終わったの?」

「まあな。さ、帰るぞ」

漣がツッコむと律はびくりとなって振り向き、そう聞く。それに漣はため息混じりに頷くと律の首根っこを引っ掴んで玄関に向けて引きずり出した。

「あゝ、せめてあれが終わるまで」

「駄目だ」

「真由、晩飯までには帰ってこいよ」

律の懇願するような言葉に漣はさらりとそう言っ律を連れて行き、光矢の言葉に律の使っていたコントローラーを握りプレイし始めた真由ははゝいと返す。それを聞いた光矢も玄関に向かい、一行はお邪魔しましたと言っ平沢家を出て行くとそれぞれの家へと帰っった。

それから数日後、軽音部部室。唯を除く軽音部メンバーは唯が追試に合格しているのを祈りながら部室に集まっていた。ちなみに孝明も来ようとしていたが他のテニス部メンバーに今日こそはとばかりに部活へと強制連行されている。

「ったく、やっぱり部活さぼってやがったか」

「まあまあ」

光矢が苛々とした様子でだが呆れたように呟くと紬がそれを抑えるように言い、光矢もへいへいと頷く。するとようやく唯がやってくる、しかしその表情はどこか呆然としており、身体もかたかたと震えていた。

「ど、どうしよう、漣ちゃん、皆……」

「え？ ま、まさかまた駄目だったとか？」

唯の言葉に漣がそう聞くと唯は答案を見せる。

「100点取っちゃった……私すげえ……」

「「極端な子!?!」」

「唯って昔から真面目にやれば出来るんだよな……」

唯の言葉に漣と律が100点と記載されている答案を見て驚きの声を上げ、光矢が呆れたように呟く。そして律がよしっと言って声を上げた。

「んじゃ、追試合格祝いにカラオケ行くか!」

「奢ってくれるの!?!」

「それはねーよ」

律の言葉に唯が目を輝かせて聞き返すと律はそう返し、唯はぶーっ

と頬を膨らませる。その律の頭を光矢がゴンと軽く叩いて唯に尋ねた。

「その前にだ。唯、お前コードちゃんと覚えてるだろうな？」

「まっかせなさい！ なんなら今から全部完璧に弾いてみせるよ！」

「よし、やってみる」

光矢の言葉に唯は自信満々とばかりに胸を張って答え、それに光矢は頷いて前もって準備しておいた唯のギブソン・レスポールを手渡す。唯はそれを構えるとふうふうと深呼吸し、軽音部メンバーはごくんと息を飲む。しかし唯は微動だにしなかった。

「…………唯？」

「じゅめんなさいー！」

光矢の言葉に唯は反射的と言わんばかりに頭を下げる。それに光矢がじとりとした目を向けると唯はあうあうとなりながら弁解を始める。

「そ、その、今までの勉強が頭に入りすぎちゃって…………忘れちゃいました…………あはははは」

「そーかそーか…………」

唯の言葉を聞いた光矢はふんふんと頷く。しかし彼女らは気づいていた、彼の額にしつかりした青筋が立っている事に。そして光矢は自分のカバンの中からノートを一冊取り出し自分のギターケースを

持つと唯の前に立った。

「じゃあ、今からどんな猛勉強をしても二度とコードを忘れないようマンツーマンで猛特訓してやる！ いやーお前のための練習メニューが無駄にならなくて幸いだよ！！」

「やー！　せめてお茶とケーキー！」

「駄目だ！　秋山琴吹田井中別室借りるぞ！！」

「み、澪ちゃんムギちゃんりっちゃん、助けてー！！」

光矢はそう言って唯の首根っこを引つ掴むと部屋から唯を連れて出て行くとし、唯は必死で三人に助けを求めるが三人は光矢の剣幕に押されただひらひらと手を振るのみ。唯がうわーんと泣き声を上げた辺りで部屋のドアはぱたんと音を立てて閉まる。

「……ギターの練習に復帰させるまでが一苦労だと思っていたが、それでもなかったな」

「というか、光矢って本当にスパルタみたいだな」

二人が去ってから澪と律がそう話し合い、紬はただ苦笑を浮かべていた。

第六話 中間テスト！そして追試！（後書き）

光矢は頭が良く料理や掃除、裁縫等家事全般が趣味且つ妙なところス  
パルタです。いや、それにしてもただ僕が書くの早いだけかもしれ  
ないけど五話も書いて感想全く来ないってのも流石にへこみます  
ね。……そんなに駄文なのかな……。  
さ、次回はキャラ設定を入れてからその次に合宿編と続けます。そ  
れとも合宿の間に何かオリジナルイベントでも起こそうかな？……  
ま、それでは。

## キャラ設定

名前：若宮光矢 わかみや こうや

性別：男

年齢：16

容姿：髪は黒色でツンツンした髪質のざつくばらんな短髪。身長は171センチで体型は標準型、それなりに鍛えている。

性格：基本的に穏和だが根は熱血直情型。また若干恥ずかしがりや。

楽器：ギター（ギブソン・ES-335を使用）

設定：本作の主人公。平沢家とは家が隣同士で互いに家族ぐるみ付き合いをしている仲。基本的に口は悪いが敬語は心得ており目の人間に対しては自分なりの敬語を使っている。

他人を呼ぶ時は唯の事は二人きりもしくは互いの妹等の例外を除いて「唯姉え」、それ以外の時は「唯」、憂の事は「憂」で孝明等男友達は名前呼び、唯憂以外の女友達は一貫して名字呼びのスタンス。唯からは幼い頃から「光ちゃん」と呼ばれているが恥ずかしいためそれに対しては常に「光ちゃん言うな」と言い返している他彼女からの抱きつく等のスキンシップに対しても照れ隠しや恥ずかしいから止めさせる目的の鉄拳制裁は基本辞さない。

運動は得意で基本的に運動神経抜群スポーツ万能、中学時代は様々な運動部に勧誘されていたが本人が拒否していたため基本的に助っ人レベルしかやっていなかった。他にも見た目によらず頭も基本的に良く授業中は寝ているものの教科書を読んでいれば大体理解でき中学時代は真面目に授業を受けていた唯に何度か勉強を教えていたほど。しかし唯曰くスパルタ。

普段温厚な性格のため基本的に喧嘩はしない方だが喧嘩自体は強く孝明と共にとはいえ一度不良五十人を一気に叩きのめした事があるほど。また唯の事は表面上幼馴染としか認識していないが心の底では大事な存在と認識しており彼女に手を出す相手は絶対に許さない。

ギターを始めた理由は詳しくは忘れたが何かで興味を持ち父親のおさがりをもらった。他にも自称多趣味で料理裁縫掃除等家事全般を趣味感覚でやっており特にお菓子作りは大好き、よく作った余りを平沢家にお裾分けしている他裁縫も唯のぬいぐるみを修繕したり彼女の希望の品を作っている事もある。

名前：あきくさたかあき秋草孝明

性別：男

年齢：16

容姿：髪は茶色でところどころ跳ねた短髪。身長は165センチで体型は痩せ型だが鍛えられている。

性格：自由奔放で飄々としている。

設定：光矢と唯とは小学校からの付き合い。他人の事は男友達は名前の呼び捨て、女友達は名前にちゃん付けか愛称を用いるスタンス。基本笑みを浮かべていたり白々しいものの言い方をしている。

常に飄々としており自由奔放で大体自分の意思の通りに動いている。何よりもまず楽しむ事が好きで光矢や唯は見ていて飽きないという理由からスポーツ有名校の推薦を蹴って二人と同じ桜が丘に進学したほど。また中学時代はサッカー部のエースだったが高校にサッカー部はないため作るうともせず興味があるという理由でテニス部に入部した、がよくさぼっている。また学校に黙って喫茶店でバイトしている。

学校の勉強こそ中の下辺りをキープしているレベルだがその代わりに本来マニアックもしくは専門的な知識を何食わぬ顔で暗唱したり妙な情報を知っていたりと光矢をしてお前何者だと言われる存在。またよくおちよくるため光矢からは殴られたりツッコミを入れられたりしているが同時に一定の信頼も置かれている。

光矢と同じく喧嘩はしないタイプだが喧嘩自体は光矢と同等かそれ以上の実力で光矢と共に不良五十人を一気に叩きのめし、光矢と孝明は裏の最強コンビとしてその名が不良に知れ渡っているほどで孝

明白く「光矢は知らないみたいだけど物騒な異名もあるよ」とのこと。

楽器が出来ないし掛け持ちは良心が痛むからという理由から軽音部へは入部していないが実際に入っているテニス部よりも軽音部の方に多くやってきており律からは準部員の称号を与えられ、自身も影ながら色んな手で軽音部を応援している。

名前：わかみや まゆ若宮真由

性別：女

年齢：15

容姿：黒髪を背中まで伸ばしている。身長は156センチで体型は標準型、スタイルは割りといい方。

性格：基本的にクールだが若干怒りっぽく一旦怒るとかなりの直情型と化す。

設定：光矢の妹。他人を呼ぶ時は唯の事は「唯お姉ちゃん」でそれ以外は女友達は名前の呼び捨てかちゃん付け、男友達や年上の相手は名字にさん付けするスタンス。敬語を必要以上に使わない兄に対して家族や親しい相手を除くと敬語を使用しているが怒りを露にした時はかなり口調が荒くなる。光矢曰く「怒ったら口が悪くなるから誤魔化すため普段敬語を使っている」とのこと。また素は素直で明るくさっぱりとした性格。

幼い頃から剣道を習っており剣道の時は髪をポニーテールに結っている。これは癖の一つでスポーツの際は髪を結つてないと調子が出ないらしく常にヘアゴムを手放さない。また木刀以外でもバットやパイプなどとりあえず細長いものさえあれば不良相手に大立ち回りを行える実力で光矢に「こいつは木刀持たせりゃ護身には充分、むしろ周りの護衛も任せられる」と言われている。

運動神経もよくスポーツは万能、頭も光矢ほどではないがよく常に成績はトップクラス。憂とは幼い頃から家族ぐるみの付き合いをしているため既に家族とも言える程の間柄であり家から近いし憂が行



くからという理由で桜が丘への進学を決めた。

## キャラ設定（後書き）

一応ざつとこんなもんですかね。光矢と孝明はこれの次の話までに  
出てこなく個人的に大事だと思ってる設定は若干ぼやかしてますけ  
ど。

これからもこの作品をよろしくお願いします……まずはこれのちゃ  
んとした題名を決めなきゃいけませんけどね、流石に仮題のまま最  
後までいったら色々……もう平沢唯と幼馴染と高校生活を本題つ  
て事にしちゃおっかな。一気に投稿します次のお話もよろしく、  
それでは。

## 第七話 軽音部、夏の合宿旅行!?

「うーみいだあー!!! さー、泳ぐぞおー!!!」

「おーい、あんまりハメ外しすぎるなよー」

「唯、水がしょっぱいぞ!」

「塩、塩だよりっちゃん!」

「き、聞いちゃいねえ……」

水着を着ている律が大声を上げるとその後ろから漣が注意を呼びかけるものの律と唯はテンションのあまり聞いておらず漣はがくんと頭を下げる。それを見ながら紬は苦笑を浮かべ、光矢もふうと息を吐いた。

今は夏休み。そして今は軽音部メンバーでの旅行中……と、いうわけでもなく。

時間を戻して夏休み前、いつも通り唯と律、紬がティータイムをしている横で光矢はギターを適当に鳴らしていた。すると突然漣がぱんと机に両手を叩きつけながら口を開く。

「合宿をします!!!」

「え? 合宿!??」

「マジで!?? 海? 山?」

「遊びに行くんじゃないありません!」

澪の言葉に唯が驚いたように聞き返すと律が目キラキラさせながら続け、澪は首を横に振ってそう宣言すると二人をびしっと指差して続ける。

「バンド合宿！ 朝から晩までみっちり練習するのー！」

「うわー、着ていく服買わなきゃ！」

「海だったら水着も買わないと！」

「聞けー！！！」

しかし澪の真面目な宣言にも関わらず唯と律は遊び気分で嬉しそうにそう言いあい、澪はまた机に両手を当てながらそう叫ぶ、そしてふうと息をついて両手を組みながら続けた。

「唯と若宮君が入部してもう数ヶ月経つのに未だに一回もバンド練習したこと無いだろ？」

「ああ、言われてみれば……テスト後の唯コード猛特訓で忘れてた」

「ううー……あんなに怒ってる光ちゃん久しぶりに見たよおー……」

「光ちゃん言うな」

澪の言葉を聞いた光矢は思い出すように言い、彼の言葉を聞いた唯がぶるぶると震えながら眩くと光矢がいつものように返す。そして律が首を傾げた。

「でも、なんでまた急に？」

「夏休み明けたら学園祭があるだろ？」

「ああ、ライブ」

「学園祭！？ はいはい！ メイド喫茶やりたい！」

「私お化け屋敷ー！」

「ここ軽音部！ ライブやるのー！！」

律の問いに漣がそう言つと光矢は察したように頷き言おうとするがそれを遮る勢いで律が手を挙げてそう言い、唯も続くと漣はまた叫び、律の頭をごんつと殴った。

「ちょ、ちよつとしたジョークなのに……なんで私だけ……」

律は涙目でたんこぶの出ている頭を押さえており、唯は苦笑を浮かべていた。それから律が漣を見ながら言う。

「でも、漣ならメイド服とか似合いそうだけどな」

「なっ！？ え、あ、わ、私が……」

律の言葉を受けた漣は途端に顔を真っ赤にして顔からぷしゅーっと煙を出し始め、それを見た律は悪戯っぽく笑う。

「なんてなー、冗談だよ冗談ほげっ！？」

その言葉を聞いた瞬間漣の拳骨が再度律に叩き込まれ、律の頭に見事なたんこぶ鏡餅が完成する。





孝明、つまり軽音部の合宿という名目の今回は部外者になるはずだ。すると律がぐつとサムズアップをする。

「孝明はもはや軽音部準部員と言っても過言ではない存在だからな！ 軽音部部長の名において特別参加を許したのだ！」

「あはは。光栄だよ部長さん、ありがとね」

律の言葉に孝明は笑いながらお礼を言い、それを見た光矢は色々な意味で諦めのため息をついた。

「あの〜、じゃあ中の案内をしますね？」

「お、おう……」

紬の言葉に光矢は頷き、紬を先頭にメンバーは別荘に入っていく。まず全員が雑魚寝しても充分過ぎる広さがあるリビングにかなりいい設備が整っているキッチン、数人は足を伸ばせそうな内風呂、次に三人部屋、二人部屋、一人部屋に分かれた客間、これまた広いトイレ、そして最後にスタジオに案内される。

「ここがスタジオです」

「広いな。ここでも充分寝れそうだ……ドラムセットにアンプもあるし、好きに使っていいのか？」

「もちろんです。どうぞ遠慮なく使ってください」

紬の言葉に光矢はスタジオを眺め回しながらそう言い、紬に尋ねると彼女は笑顔で頷く。それから孝明がふと口を開いた。



「そういえば、唯ちゃんとりっちゃんはどこだろ？」

「そういえば……どこに行ったんだ？」

「どこでしょう？」

「まさか迷ったか？」

孝明の言葉を聞いて漣も気づいたように言い、紬が首を傾げてそう言くと光矢が呆れたように続ける。そして一行は一度スタジオを出て二人を探し始めた。そしてとある部屋に辿り着くと孝明が人の気配に気づき、紬がドアを開ける。

「よーっし、遊ぶぞー!!」

「おーっ!!」

そこには水着に着替えた律と唯の姿があり、それを見た漣は呆れたように口を開く。

「おいおい、ここに来た目的は遊ぶんじゃない……」

「突撃ーっ!!」

漣の言葉を遮って律と唯は部屋を出て行き海へと走っていく。そしていつの間にか着替えたらしい紬もその後を追い、三人はぽつーんという効果音がつきそうな状態で残されると突然漣が荷物を探り出した。

「私も遊ぶー、水着どこー？」

「……」

流石に男子がいる中で着替えられないだろうし万一着替えられたら色々やばい。光矢と孝明は顔を見合わせて苦笑すると部屋を出て行き、孝明は僕も着替えてくるよーと言って荷物を手に適当な部屋に入っていた。

「……俺も行くか」

唯が水着も持つて行こー一緒に遊ぼーと前日に騒いでいたため一応学校で使う水着を持ってきている。光矢も荷物にそれがある事を確認すると空いている部屋に入っていた。

そして三人も着替えて海へと向かい、冒頭の状態となったわけである。

「行つくぞー唯ー！」

「来い、りっちゃん！」

「そーれえっ！」

浜辺では律が唯を見ながらビーチボールを構えており、唯が受け止めようと構えを取ると律はバレーのアタックの如く唯にボールを打ち込む。

「ふぎゅっ!？」

「あっはは、唯ー、どんくさいぞー」

それを唯は顔面で受け止め、それを見た律が笑い声を上げた。

「さうつと、やってきたはいいけどどうする？」

自前の水着にパーカーを着ている孝明はやって来て早々光矢にそう尋ねるが光矢はぐっぐつと準備運動を始めており、適当に体操を終えると海の方に歩いていく。

「んじゃ、ちよつと泳いでくる」

「あつそ、元気だね」

「何言つてんだ？ 海に来たらやる事なんて泳ぐか釣りしかないだろ？」

光矢がそう言うと孝明は笑みを浮かべながらそう言い、その言葉を聞いた光矢は頭の上にクエスチョンマークを出しながら返して海にいく。それに孝明は苦笑を浮かべていた。

「ま、僕もそれくらいしかあんま興味ないしね。ムギちゃん、この辺に釣りできるとこと釣り道具ない？」

「あ、ありますよ。その岩場を越えれば魚がいますし釣り道具はその小屋に一式用意されてるはずですよ」

「ありがとう」

孝明は苦笑を浮かべてそう言うと紬に尋ね、彼の言葉に紬が小屋を指差してそう説明すると孝明は短く礼を言って歩いていった。

「そーれいつ！」

「きゃうっ！」

一方律と唯、律の投げたビーチボールを唯は取り損ねて弾き、ボールはふわあつと宙を舞って光矢の方に飛んでいった。

「光ちゃん！」

「光ちゃん言うなっ」と

唯の言葉に光矢はそう返しつつ左手でぽんつとボールを弾いてトスすると右手で Bannon と思いつきりアタック。それは律目掛けて飛んでいき彼女の顔面にぶち当たった。

「ほげっ!?!」

「あ、ありがと、って言っつていいのかな?……」

律が情けない声をあげると唯は苦笑交じりに光矢にお礼を言い、ふと光矢を見る。

「なんだ？」

「いや、えと……しっかりしてるなっつて」

光矢の細目での問いに唯はそう返す。彼は着やせするタイプなのだろうが服を着ている上では気づかないがその身体には筋肉がしっかりついている、見た目だけなら運動部と並んでも遜色なくらいだ。

「そうか？ 孝明だってあれでかなり鍛えられてるぜ？」

孝明は中学校時代サッカー部のエースストライカー。身体自体は小柄な痩せ型とはいえその身体はしっかりと鍛えられている。

「そ、そっかな？ えへへ……」

「そうだろ？ んじゃ俺はちょっと一泳ぎしてくるから」

「あ、うん」

唯のはにかみながらの言葉を聞きながら光矢はそう言うのとゴーグルをつけて海に入り、唯も頷くと光矢が泳ぎ出したのを見送ってから律の元に歩いていった。光矢はクロールで一気に沖まで遠泳を始める。

その頃、漣は律に近づきながら海を見ており、どことなく楽しそうに笑みを浮かべて口を開いた。

「それにしても、綺麗なところだな！」

「……」

しかし漣の言葉に律は返さず、彼女の視線は漣の胸へと一直線。

「くっ……くっ……くっ……」

そして先ほど光矢にアタックで顔面にぶつけられたビーチボールを漣の顔面目掛けて全力投球、それを漣は油断してたためか綺麗に顔面で受けてしまった。

「うぐつ!? な、何するんだよ律!？」

「う、ううつ、私だって、私だってー!!!」

「?」

漣は突然ボールをぶつけられた事に対し律に怒るが彼女はわーんと泣き声を挙げながら全速力で走り去り、漣は首を傾げるしか出来なかった。

それから唯達女子四人は波打ち際で水掛け遊びをしたりすいか割りなどを楽しむ。ちなみに一番それらを楽しんでいたのは練習練習と言っていた漣だった。

「ふ〜」

「いや〜大漁大漁。ここっていい釣り場あるね〜」

そして泳ぎ疲れたか光矢が戻ってくるのと用意されていたクーラーボックス一杯に魚を入れほくほくと上機嫌な笑顔を浮かべて孝明がやってくるのはほぼ同時で、それらを見ると律がふ〜と息を吐いた。

「ふう〜、遊んだな〜」

「あつ! バンド練習! ……全く、律が遊ぼうとか言うから時間ほとんどなくなっちゃったじゃないか」

「一番楽しそうに遊んでたの誰だよ!？」

律の言葉に漣が思い出したように言い、腰に手を当てながら呆れたように律向けて言うのと律は吼えるような勢いで漣にツッコミを返し

た。  
それからメンバーは漣に連れられてスタジオに行き、唯はその大き  
さにおおーっと目を輝かせているが一方律はふえーっと疲れたよう  
に息を吐いていた。

「なー漣ー、今日はもう止めようぜー……遊び疲れたー……」

律の言葉に漣は呆れたようにため息をつくがふと何かを思いついた  
というような表情を見せると少し笑みを浮かべながら言う。

「そついえば律、さつき海で遊んでた時に思ったんだけど……太っ  
てないか？ 最近ドラム叩いてないからじゃないの？」

「うわぁーん！ー！ー！」

漣の言葉を聞いた瞬間律はドラムの方に走り半泣きになりながらド  
ドドドドと一心不乱にドラムを叩き始め、それを見た漣はにやりと  
笑みを浮かべる。

「さ、唯。お前も練習だ……コードは全部覚えてるよな？」

「は、はいー！」

光矢は唯に声をかけ、にやりと笑みを浮かべてそう尋ねると唯は背  
筋を伸ばして答える。それを聞いた光矢はよしと頷き、適当に弾い  
てみるよう促した。それを聞いた唯もこくと頷いて自分のギター  
を構える。それから唯はギターを弾き始め、それを聞いた光矢はへ  
えというような笑みを浮かべる。そして数分程度で唯は弾き終えた。

「ど、どっ……」

「たった数ヶ月でここまでとは、流石だな」

「すっごーい、弾けるようになってる」

唯の言葉に光矢が頷きながら返すと絀が拍手をし、それを聞いた唯はピースサインを作った。

「えっへへー、光ちゃんにコード教えてもらってからたっくさん練習したんだもん」

「光ちゃん言うな」

唯の嬉しそうな言葉に光矢は毎度の如く返し、聞いていた澁もうんと頷いて言った。

「へ〜……後はチョーキングとかスライドとか、細かいテクニクを覚えたら完璧だな」

「チョーキング？」

「「違う」」

澁の言葉に律はそう言って後ろから唯の首を絞め、唯はギブギブと唸る。それに光矢と澁がハモリツツコミを入れ、澁が説明した。

「チョーキングっていうのは音を出しながら弦を引っ張るの。そうすれば音程が上がるんだよ」

「まあ実際にやってみせた方が早いだろ」



漣の説明に光矢はそう言つて自分のギターを構え、さつき漣が言ったように音を弾きながら弦を引つ張つた。するとギターはさつきとは違つグワーンという音を出し、唯はおーと唸りながら真似をする。今度はみょーんみょーんという音が出た。

「そうそう」

「あははははは」

「そんなツボるところ!？」

「それが唯だ」

漣が頷いていると唯はツボに入つたか笑い出し、それに漣がツッコミを入れると光矢が言い、孝明も頷く。すると律がふと手を挙げて言った。

「なあ、ちよつと曲合わせてみないか？」

「あ、そうだな」

「じゃあ僕が聞いてるよ」

「頼むぞ」

律の言葉に漣が頷くと孝明がそう言い、光矢も頼むぞと言ってドラムの前に立つ。紬もキーボードを用意し、三人がギターとベースをアンプに繋ぐとギターを構え、律がスティックを頭上で叩いた。

「1、2、3、4！」

律の合図と共に演奏がスタート、曲は現在練習中のオリジナル曲。そして演奏が終了すると律が孝明に尋ねる。

「どうだ？」

「ん〜、ちよつとテンポがずれてるところがあつたけどまあいいと思うよ。もう少し個人練習をしてからもう一回合わせてみたら？」

律の言葉に孝明がそう感想を述べ、それを聞くと律はふんふんと頷いた。

「そっかー……にしても、腹減つたー」

「まあ、もうそんな時間だしな……」

「ご飯どうしましょうか？」

律は頷いた後天井を見上げながらそう言い、漣が時計を見ながらそう言つと紬が尋ねる。すると光矢が口を開いた。

「しょうがない。俺と孝明で何か作ろう」

「……えっ!？」

光矢の言葉に律、漣、紬の三人が意外そうな声を上げ、それを聞いた光矢はため息をつく。

「だから、家事全般を趣味でやってるって前に言つたろうが」

「僕も一通り嗜む程度にはね。光矢には及ばないけどまあ手伝うく

「らいならなんとか」

「まあ任せとけて。キッチン借りるぞ、孝明も本来部外者なんだからこれぐらい役に立てよ」

「はいはい、分かってるって」

光矢と孝明は一通りそう言い合うと光矢が孝明の首根っこを掴みキッチンに引きずっていく。それを見送ってから唯達は今回こそアンブのポリウムを下げてからコードを抜き、光矢のギターも含め片づけを行った。そして一方の光矢と孝明もキッチンに立つとまず食材の確認を始める。

「じゃがいもにんじん、たまねぎに……カレーの材料が一通り揃ってるよ」

「んじゃカレーと……そういや孝明、お前確か魚釣ってたよな」

「まーねー。スズキが多いよ」

「んじゃあスズキをムニエルにして……ああそうだ、じゃがいもがあるんならフィッシュ・アンド・チップスでも作るか？」

「そうしよっか。じゃあ僕はスズキを切ってるよ」

「俺はカレーを作る。幸いにもスパイスも豊富だ」

二人は話し合ってメニューを決めると孝明はクーラーボックスからスズキを取り出し、光矢もウキウキとどこか楽しそうな表情を浮かべてカレー作りに取り掛かる。それから時間にしておおよそ一時間

弱、律が腹減ったーとご飯の催促に来た頃丁度出来上がった。

「二人ともー、飯まだかー」

「丁度出来たぜ。そこで待ってる」

「いよつしゃー!」

律の言葉を聞いた光矢が盛り付けをしながらそう言つと律は嬉しそうな声を上げ、光矢は人数分確認するとおぼんに乗せて運び出す。

「おい孝明、お前も」

「ごめん、ちょっと待って」

「? へいへい」

光矢はキッチンの隅で何かの作業をしている孝明を呼ぶが彼はすまなそうな笑みを浮かべてそう言い、それに光矢は首を傾げるがまあいいかと結論付けると料理を運ぶ。

「ほい、カレーとスズキのムニエル、でもってフィッシュ・アンド・チップスだ」

「うおー、カレー以外見たことねえ料理だ!？」

「良いにおーい」

「美味しそうすわ」

「先に食べてていいのか？」

「おう。俺達の分は今から運ぶから先食ってる」

「ごめんごめん、お詫びに光矢の運んできたよ」

「お、おう」

光矢の料理名説明を受けると律が騒ぎ出し、唯もほわほわとした微笑みを見せる。細も微笑みながら言い、澪が聞くと光矢は頷くがそこに孝明が二人分の料理を運んでやってきて、光矢はそれを受け取るとテーブルに並べた。

「……………いただきまーす……………」

そして全員手を合わせて唱和し、それぞれ唯はカレー、律と細はムニエル、澪はフィッシュ・アンド・チップスに口をつける。

「わっ、程よく辛くて、美味しい！」

「うおー、これ美味えー！！」

「カリカリとしてて、歯ごたえがある……美味しい」

「本当に、家のシェフの味とほとんど変わりません」

女子四人はそれぞれそう感想を述べ、光矢と孝明は嬉しそうに笑いながら顔を見合わせると自分達も料理を食べ始める。そしてさっきまで遊び練習していたためか皆お腹が空いていたのか美味しいため止まらなかつたのか料理は残さず完食、ここまで食べられれば料理人冥利につきるだろう。

「あー食った食ったー。あとデザートがありや大満足なんだけど」

「りーっー、それは流石に我俣だろ」

「ああ、あるよ」

「……え!?」「……」

律がお腹をポンポンと叩きながらそう言うと言と溲がたしなめるように言う。しかし孝明がそれに対してさらつと言い、彼以外の五人が驚いたように言つと孝明は席を立ちキッチンに向かうと色んなフルーツやクリーム、アイスを入れたパフェを持ってきた。

「パフェ!? お前いつの間に!?!」

「こんな事もあるつかと三種類二個ずつ作つといたんだ。苺、チョコ、バナナの三種類。さあどうぞ」

「……じゃ、じゃあ遠慮なく……」「……」

光矢が驚いたように尋ねると孝明はさらつとそう言い、どうぞと言つと唯、律、溲の三人はおずおずと手を伸ばし、彼女らが取った後に緋が、残ったものを光矢と孝明が取った。

「……」「……」

そしてまた全員で唱和して唯と光矢はイチゴのパフェ、律と溲はチョコのパフェ、緋と孝明はバナナのパフェを食べ始めた。

「うわっ、美味しい!」

「これでも喫茶店でバイトしてるし、たまにデザートも作る時だつてあるから任せといてよ」

律が驚いたように叫ぶと孝明が笑ってそう言い、メンバーはへーと

頷く。そして全員甘いものは別腹と言わんばかりにデザートも完食、しばらく食休みを置いてから一行はスタジオへと戻ってきた。

「あゝ、光ちゃんの料理ってやっぱり美味しいよ〜」

「孝明のパフェも美味かったぜ〜。あゝ連れてきてよかった〜」

唯と律は食事とデザートのを反芻してるのか口をもぐもぐと動かしながらそう言い、ふとスタジオの床にゴロンと寝転がった。

「あゝ、床が冷たくて気持ちい〜……………」

「ほんとだ〜……………」

「お休みなさい〜」

「起きろー！ 練習するぞー！！」

唯と律はそう言い合うと突然眠り出し、溲が必死で揺り動かすが起きる気配はない。それを見ながら光矢はため息をついた。

「孝明、あれをやるぞ」

「あ、あれ！？ あれをやるの！？……………仕方が無い……………」

光矢の言葉に孝明はわざとらしいぐらい大袈裟に驚愕の表情を取った後くつと唸ってスタジオを出て行く。そして一分足らずでお玉とフライパンを二つずつ持ってきた、もちろん夕飯作りに使用していないものだ。

「はい……………」

そして孝明はお玉とフライパンを一つずつ光矢に手渡す、それを見た絀が不思議そうに首を傾げた。

「何を始めるんですか？」

「まさかフライパンで殴って叩き起こす気か？」

「んな事したら運悪けりや傷害罪だ……いくぞ、孝明！」

「うん！」

絀の問いに続けて漣が聞くと光矢は呆れたようにそう返し、右手におたまを左手にフライパンを握りながら同じ構えを取っている孝明に呼びかけ、孝明も頷くと光矢が声をあげた。

「右手にお玉を、左手にフライパンを！」

「横たわりし者に正義の鉄槌を！」

「秘技・死者の目覚め……！」

ガンガンガンガン……！！

「のぎゃあー……！！」

「……っ！？」

その口上の直後二人はお玉でフライパンを叩き鳴らし、ガンガンガンと激音が辺りに響き渡る。それを受けた唯と律は悲鳴を上げながら起き上がり、漣と絀も咄嗟に縮こまりながら両手で耳を塞ぐ。そして反響しているフライパンの音が止んでから漣が尋ねた。



「な、なんなんだ？ それ？……」

「前にやってたゲームで見たことあるんだ。寝ぼすけな兄を起こすためしつかりものの妹が開発した秘技、その名も死者の目覚め。すつきり目が覚めたでしょ？」

「あ、頭の中でガンガンって音が反響してる……」

漣の言葉に孝明が笑いながら言うと律がふらふらとしながらそう言い、孝明はあらくと言うと光矢からお玉とフライパンを回収し片付けてくる。そしてようやく観念したか唯と律も練習を始めた、しかしそれから数十分程度が経過してからだった。

「もう、ギター持てない……」

「早いな!？」

「だってこのギター重いんだもーん」

突然唯が座ってそう言うのと光矢がツッコミを入れ、唯は泣きそうな声でそう言った。それに漣がため息をつく。

「だから軽いやつ買えって言ったのに」

「誰だこのギター買うつて言ったの!？」

「お前だ!！」

漣の呆れたような言葉に唯が叫ぶと光矢と漣はそれ以上の声を張り

上げてハモリツッコミを入れ、それに唯ははうつと情けない声を上げた。それから孝明がしょうがないと声を出す。

「しょうがない。今日はもうここまでにして明日の朝帰るまでの時間に早朝練習でもしたら？」

「そうするか」

孝明の言葉に滲はため息をついてそう言い、それを聞くと唯と律はやったーと声を上げた。それから女性陣は露天風呂に向かい、光矢と孝明は室内風呂に向かう。

「やゝ、楽しかったね」

「まーな。さて、明日の朝食何にするか考えないとな。カレーは一晚寝かせる予定だったのにまさか全部食われるとは予想してなかった……」

「そだね。さ、僕も明日のデザートをどうするか考えないと」

孝明の笑いながらの言葉に光矢は割りと言顔で返し、それを聞いた孝明もこくと頷いた。

一方こちらは女性風呂、滲はふと息をつき手を伸ばしながら口を開く。

「まさか露天風呂もあるなんてな。それにしても、そんなに心配するほどでもなかったみたいだな」

「唯ちゃんも上手くなってたしね」

澪の言葉に袖もにこつと微笑みながら頷く。

「だからもつと遊べばよかったのに！」

「誰だー！？」

すると突然前髪で目が隠れている少女が声を出し、澪が驚きの声を上げる。

「私だ」

「お前だったのか……前髪長いな」

少女　律は前髪を上げながら言い、澪もははと苦笑を漏らす。  
すると唯が楽しそうな笑みを浮かべた。

「今日始めて皆と合わせてみたけど、すごい楽しかった！　やっぱり音楽っていいね！」

「そうか」

「合宿しようって言うてくれた澪ちゃんのおかげだよ！　ありがとう澪ちゃん！」

「あ、うあ……」

唯の楽しそうな言葉に澪がにこつと微笑みながら言う。唯は澪の手を握りながら微笑んでお礼を言い、突然のそれに澪は驚いたように顔を赤くする。とそれを見た律がにやにやと笑った。

「溇の奴、照れてるぞー！」

「ち、ちがつ……のぼせただけだー！」

律の言葉に溇の叫びが露天風呂に響いた。

そして風呂が終了し、今日休む部屋の部屋割りが決定される。

「ちょっと待て」

「なんだ？」

部屋割りのメモを見ながら光矢が突然抗議のような声を上げ、メモを渡した律が首を傾げて尋ねると光矢はメモを律に突きつけながら叫んだ。

「俺と唯が同室ってどういう意味だ!？」

確かにメモには二人部屋：若宮光矢、平沢唯と書かれている。ちなみに空いていて使えるのは三人部屋、二人部屋、一人部屋が一室ずつのみ。紬曰く他の部屋はちよつと準備が整ってなくて、らしく三人部屋に律、溇、紬が、一人部屋に孝明が泊まることになっている。すると孝明が口を開いた。

「例えば強盗の侵入とかもしもの事があつた時にか弱い女性が一人じゃ危ないでしょ？ そうなると人数的にも女性は三人部屋もしくは二人部屋に男を相部屋で置くしかない。そうなると一番心配ないのが光矢と唯ちゃんのペアなんだよ」

「うっ、だ、だが……」

「私は別にいいよ。久しぶりに一緒に寝よーねー光ちゃん」

「光ちゃん言うな……」

孝明の説明を聞いた光矢はどうにかしてこの状況を打破しようとするが、よりによって唯が相部屋を許可、その言葉に光矢はいつものツツコミを入れるしか出来ず諦めのため息をついた。そして一行は各々の部屋で就寝につく、ちなみに光矢は口を酸っぱくして一緒には寝ない事を唯に宣告、唯がぶーと頬を膨らませているのを見ないようにして光矢はとつとと眠りに着いた。

(く〜……ん?)

光矢は寢息を立ててぐっすり眠っていたがふと違和感に気づく。なんか妙な暖かさが前の方に、そしてすうすうという声や顔に息が当たっているような感覚……。そう思いながら光矢は目を開ける。

「!!!?? なっ、なっ、なっ!?!?……」

すぐ目の前、本当にもう少し近かったら鼻が触れているくらいの距離で唯が眠っていた。彼女はあどけなく無防備な寝顔をさらしており、それに思わず光矢は顔を真っ赤にして硬直するが我に返った瞬間横になりながら右手を振り上げる。

「こっつ、この、馬鹿唯姉えー!!!」

そしてそんな怒号と同時にゴーンという拳骨音が響く。ちなみに現在の時刻は六時、朝食を作るためいつもより早めにセットしていた携帯のアラームがちょうど鳴り出すがその音が綺麗に消えるほどの

怒号と拳骨音だった。

「な、なんだ!? 何事だ!?!」

その怒号で目を覚ました漣が慌てたようにパンツとドアを開け、眠そうに目を擦っている律と欠伸交じりの紬、そしてもう起きていたらしく着替えも終わっている孝明も部屋に入る。そこにはベッドの上で正座でお説教を聞かされ頭にたんこぶを作りながらうつむいている唯とこちらも正座でお説教を行っている光矢の姿があった。

「な、なんなんだ?」

「どうせ唯ちゃんが寝ぼけたか何かで光矢の布団に入ったんでしょ? まあしばらく終わりそうにないし簡単なモーニングセットくらいしか作れないけど朝ごはん作ってくるよ」

「あ、ああ、頼む」

漣がきよとんとしている横で孝明がそう予測、続けてそう言ってキッチンに歩いていくと漣はこくと頷いてそう言った。そして孝明の作ったモーニングセットを食べてから少し練習をし、軽音部メンバー+ の旅行合宿は終了した。

それから数日後、軽音部の部室にいる漣に律が声をかけた。

「みーおー、この前の合宿の写真出来たってー」

「写真? いつ撮ってたの? 見せて見せて」

「うん、ほら、よく撮れてるだろー」

律の言葉に漣がそう言っ  
て写真を見せてと言っ  
て右手を伸ばすと律  
はにっ  
と笑いながら写真を見せる、それは合宿の夜漣が無防備に寝  
ている写真だった。それを見た瞬間漣は真正面から律の首を絞め持  
ち上げる。

「ネガを渡しなさい」

「デ、デジタルカメラなのでネガないです、ってかギブ……」

漣の脅迫のような声質の言葉に律は苦しそうな声でそう返すのが精一杯だった。

第七話 軽音部、夏の合宿旅行！？（後書き）

いや、まさか一万文字超えるとは流石に予想しなかった……とりあえず漫画では合宿の時に食事風景や就寝の描写はなかったのそこは適当に作ってみました。オリジナルとはお世辞にも言えないでしょうけど今の僕にはこれが限界です。ところで光矢と孝明がああ寝ぼすけコンビを起こす時に使った技は作中で言った通りとあるゲームの元ネタですがさあ、元ネタが何か分かるかな！？

光矢「分かる人にやすぐに分かるだろ……」

感想お待ちしております。それでは！



## 第八話 顧問！

夏休みも明けて現在九月、授業も終了し軽音楽部のメンバーは部室でお茶を飲んだりお菓子を食べた後練習に励んでいた。ちなみに部長である律曰く準部員である孝明も遊びに来ていますが今回はサボりではなくれっきとしたテニス部休みの日、クラスメイトのテニス部メンバーに光矢が確認していたから間違いない。

「あいたっ」

「どうした？ 唯」

「うう、手の皮が剥けちゃった……」

ギターを練習していた唯が突然そんな声を出すと律がどうしたと尋ね、唯はそう言って指を見せる。指先の皮が剥け、僅かとはいえ血も出ていた。

「うわあ、痛々しい……」

「澁ちゃんほら見てー……澁ちゃん？」

「見えない聞こえない見えない聞こえない……」

律が呟くと唯は澁にも見せようとするがその澁は耳を塞いでうすぐまりながら必死で自分にそついい聞かせていた。

「そついや痛い話は駄目だとか言ってたな……」

それを眺めながら光矢はそう呟く。と律は何か悪戯を思いついた子供のように目をキラーンと怪しく輝かせ、両手の平を自分に向けてから突然大声を上げた。

「あーっ！！ 私もドラムの練習のしすぎで手のマメが潰れちゃったー！！」

「！！！！」

その言葉を聞いた瞬間漣はいつものツツコミ等も忘れてガタガタと震え始め、後ろから律がほらほらーと言って無傷の手の平を見せようとするが漣は本当に手のマメが潰れていると思っっているらしく必死で目を閉じ顔を背ける。それを見ながら光矢は唯に話しかけた。

「指の皮を剥いたら指はどんどん硬くなってくぞ」

「へ」

「まあ、それが必ずしもイコールギターが上手になっているとは限らないけどな」

「ガーン！」

「擬態語をわざわざ口に出してまで驚く事か？……ん？」

光矢の説明を聞いた唯は最後にガーンと口に出して驚いたように言い、それを聞いた光矢は呆れたようにツツコミを入れた後人の気配に気づいて入り口の方を見る。

「琴吹か」

「あ、ムギちゃん。どうしたの？」

「な、なんだか入りづらくって、じじよじじよ……」

「「？」」

そこにいたのは紬、その姿を確認した光矢が言うと唯も気づいたように声をかけ、紬は心なしか少し顔を赤くしながらそう呟く。その内容がよく聞こえなかった二人は首を傾げるしか出来なかった。すると孝明が何かを手にやってくる。

「皆ー、面白そうなもの見つけたよー」

「ん〜なにになに〜？……昔の軽音部のアルバムみたいだな」

孝明が見せてきたのは昔の軽音部のアルバム、律もそれを興味津々に見始めるがそれは俗に言うヘビメタのメンバー。真っ白いメイクをし怖いような雰囲気を出していた。

「うわー、凄いね……」

「ああ…（…ん？）」

唯の言葉に光矢も頷きながらふと一枚の写真を見る、それは真っ白いメイクをした髪の毛の長い女性の写真。それを見て光矢は首を傾げ、それに唯が気づく。

「どうしたの？ 光ちゃん？」

「光ちゃん言うな……なんでもない」

唯の言葉に光矢はいつものツツコミを入れた後そう続ける、と律がくすくすと笑い出した。

「それにしても、一体いつの時代のバンドだよって話だよな！ あつははははー！」

「……」

「光ちゃんそんな目で私を見ないでー……」

律がそう言っただけで笑い出すと光矢はそんなイメージしか軽音部に持っていないかった唯をじつと見始め、それに気づいた唯は恥ずかしそうにそう返す。すると孝明がふと細に声をかけた。

「そういえば、ムギちゃんはどこ行ってたの？ 遅いなんて珍しいよね？」

「ああ、学園祭のステージを借りる申請に行ってたんだけど軽音部ってまだちゃんとした部活って認められてないから断られちゃった」

「へ〜」

「あ、この写真すごーい」

「……ってちよつと待てー！ー！」

孝明の問いに細はいつものんびり口調で返し、それを律がアルバムを読みながら適当そうに返すと唯も一枚の写真を指差しながら言う。その直後光矢が細の言葉の内容に気づいてツツコミを入れ、直後律も気づいて弾かれたように立ち上がり細の両肩を掴む。

「軽音部が部として認められてないだつてー!? もっと緊迫感出してー!」

「う、ごめんなさーい……」

「田井中、確か四人以上集まれば部として認められるんだろ?」

「そのはずなんだけどなあ?」

「ていうか、部活として認められてなかったのに……」

律は紬の身体をゆすりながら叫び、紬も苦笑ながらに謝る。それから光矢が尋ねると律は紬から手を離して髪をかきながらそう返す。それから唯が口を開き、部室をきよるきよると見回しながら続ける。

「音楽室、好き放題に使ってよかったのかな?」

「確かに」

唯の言葉に光矢も同意する。ティーセットを持ち込み、お菓子を食べお茶を飲んでいた。本当に問題ないのだろうか、そういう視線を律に向けると律はうぐつと唸り広いおでこに冷や汗を浮かべながらうんと頷いた。

「い、今まで何も言われなかったから大丈夫だよ! うん!……た、多分、きつと、めいびー……」

「そっかなー?」

「とりあえず聞きに行ってみるか。生徒会室だよな？」

「そうですね」

律は最初こそ力強く言っていたが後ろになるにつれ言葉が弱くなつていきその目もどんどん部員から逸らしていく。それに唯がうんと唸りながら呟くと光矢がそう言い、紬も頷いた。それに唯もこくと頷くとふと声を出した。

「そういえば、漣ちゃんは？」

「ああ、漣ちゃんならまだそこで震えてるよ？」

「帰ってこーい！！！」

唯の言葉を聞いた孝明は部室の隅っこで震えている漣を指差してそう言い、律が必死に漣をこっちの世界に呼び戻す。そして軽音部メンバー＋ は生徒会室へと向かった。

「たのもー！！」

「普通に入れよ」

「失礼しまーす」

唯と律がまるで道場破りのごとく挨拶して入ると光矢はツッコミを入れながら入り、漣、紬、孝明の三人はちゃんとした挨拶をする。すると生徒会室で執務をしていた生徒が顔を上げた。

「あら？ 唯に若宮君、秋草君も」

「あ、和ちゃん」

「友達？」

「うん、幼馴染なの」

「どうも」

生徒 真鍋和に唯がぱつと顔を輝かせながら声をかけると律が尋ね、唯はこくと頷いて返す。和も軽音部メンバーにどうもと挨拶を返した。それから唯はまた和に話しかけた。

「和ちゃんって生徒会役員だったんだね」

「うん」

「今まで知らなかったのかよ」

「本当に友達？」

「まーまーそんな事後でいいじゃん。それより和ちゃん、軽音部が部として認められてないみたいだけど？」

唯の言葉に和が頷くと光矢と律がツッコミを入れる。それを孝明が治めながら和に聞くと和はちよつと待つてと言って何かの用紙の束を取り出し調べ始める。

「……うん、確かに軽音部は部活のリストにないわね……あ、もしかして部活申請用紙を出してないんじゃないの？」

「部活申請用紙！？ そ、そんなの聞いてな……」

和の言葉に律は驚いたように言い返すがその言葉は途中で止まり、ふと何かを考え出す。すると漣が口を開いた。

「律、確かお前が『私が部長やるから私が出す』とか言ってたか？」

「……忘れてた」

「やっぱりお前のせいかー！！！」

漣の言葉を聞いた律はそう呟き、それを聞いた湊は律のほっぺを力いっぱい引っ張る。それを見ながら和はふと口を開いた。

「軽音部って、本当に唯にぴったりだと思っわ」

「ほえ？」

和の言葉に唯は首を傾げ、それを見た和は今度は光矢に声をかけた。

「若宮君も大変ね……」

「もう慣れたよ……っと、用紙貰うぞ。田井中ー、とっとと部活申請用紙書けー」

和の言葉に光矢はどこか悟ったような表情でそう返し、部活申請用紙と書かれた引き出しを勝手に探って用紙を取り出すと律にそう言っ用紙を突きつけ、湊もカバンからボールペンを取り出す。それを聞いた律はうくと唸って適当な机に用紙を置いてペンを構えた。

「はいはい。えーっと軽音部、部員は五名で準部員一名」



「それはいらん」

「……部長が私で、副部長は……漣でいつか  
「おい!!」」

律が準部員を勝手に書こうとすると光矢がツツコミを入れ、続けて副部長を勝手に漣にすると漣がツツコミを入れるがもう書かれたため諦めのため息をつく。それから必要事項を記入していくがふとそのペンが止まった。

「……なあ、顧問って誰だ？」

「確か音楽の担当は……」

「山中さわ子先生だね」

「でも山中先生は合唱部の顧問をしてるわよ？」

律の言葉を聞いた漣が軽音部だから音楽の担当である先生を考え出すと孝明が即答、それを聞いた和がそう言つと律はあらーと呟く。

「顧問がいなけりゃどうにもならないぞ」

「んじゃ、駄目元で山中先生にアタックだ！」

「「おおー!!」」

光矢の言葉を聞いた律がそう言つと唯と紬が右手を挙げて返す。

「突撃ーっ!!」

「……悪い真鍋、また後で来る」

「ええ、まあ頑張つて……」

そして律の号令で光矢以外のメンバーは生徒会室を出て行き、光矢が和にそう言つと和も苦笑交じりに返し、光矢はおうと言つと彼女らの後を追つた。

「山中さわ子先生、我が校の音楽教師である。その綺麗な顔立ちと柔らかな物腰で生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく、ファンクラブが存在するほど人気がある」

「あの……いきなり何を言つてるの？」

「先生！」

突然律がナレーション語りで山中先生を褒め出すとその山中先生本人がツツコミを入れ、律がきりつとした様子で山中に声をかけ、唯達軽音部女子メンバーが口を揃えた。

「……軽音部の顧問になってください……」

「ああ、だから私の事褒めてたんだ……でもごめんなさい、私合唱部の顧問をしているから掛け持ちはちょっと……本当にごめんなさいね？」

「……」

唯達の言葉を聞いた山中は苦笑を浮かべながらそう言った後すまなそうに続け、最後にもう一回謝りを入れる。それを聞いた律は少し黙った。

「今まで声をかけてきた男の人の数は数え切れず……」

「だ、だから！ おだてても無理です！！」

律の再びナレーション語りを聞いた山中は恥ずかしそうにそう叫ぶ。すると突然唯が山中をじーっと見始めた。

「どうしたの？」

「……先生つて、ここの卒業生ですか？」

「？ そうだけど……どうして？」

「さっき見てた軽音部のアルバムに先生と似た人がいたから……」

「！？」

唯の問いを聞いた山中はそれを肯定した後聞き返し、それに唯は口元に指をやりながらそう返す。それを聞いた山中の表情が固まり、彼女らに背を向けると突然走り出す。

「孝明！」

「はいはいっつと」

何がなんだかよく分からないが逃がすわけにはいかないと直感的に感じ取ったのか光矢は孝明を呼んで後を追いつ、孝明も走り出す。その後を唯達も追いかけた。そして二人は音楽室まで辿り着くと山中は何かを探していた。

「先生？ 何を探しているんですか？」

「え！？ あ、いや……」

光矢の言葉に山中は目を逸らしながら呟き、唯達が合流すると孝明はニヤリと笑みを浮かべて懐から一冊のアルバムを取り出した。

「もしかして、お探しのものはこれでしょうか？」

「あつー！」

「持ってたんなら先に言えよ！！！ つかどつから取り出し……あ、あ、やっぱりいい」

「いや、つい！ 言いそびれちゃって」

孝明が懐からアルバムを取り出すと山中がアルバムを指しながら声を上げ、光矢がツッコミを入れる。孝明は小柄だし体型も痩せ型、一体どこにアルバムなんか隠し持っていたのだろうかと言いたいが途中で諦めた、理由はもう孝明だからで充分だろう。その言葉に孝明はついをわざとらしく強調してそう返し、唯にアルバムを手渡すと唯はえーと言いながらページをめくる。

「あ、あった。ほら、この写真の人、先生ですよね？」

そう言つて唯が指差したのは光矢が気になつていた真つ白いメイクの髪の長い女性、それを見た律がよく分かつたなと驚愕の表情を取り、山中は諦めたようにうつむいた。

「そつよ……私、昔この軽音部にいたの……」

「い、意外です……」

「あ、じゃあもしかしてギターも弾けるの？」

「あ、弾いてみてください！」

山中の言葉に漣が驚いたように言うと言律が続け、唯がギターを手渡ししながら言う。それを思わず受け取ってしまった山中はニヤリと気味悪い笑みを浮かべ、メガネを外した。

「クツクツク……しゃーねえーなあー」

（（（（（目つき変わった！？）（（（（（

山中の目つきはさっきまでのおしとやかからはかけ離れた殺気すら感じられそうな威圧感溢れる目つきに変わっており、それに軽音部メンバー＋は異口同音の心中ツッコミを披露する。すると山中は早弾き、タツピング、さらには歯ギターという様々なテクニクを披露しだす。

「私のギター……」

「お前ら音楽室好きに使いすぎなんだよー！……」

「「「「「ごめんなさい！……」「「「「「

唯が涙目になって呟いていると突然山中は普段のキャラからは信じられないような大声で正論を言い、その威圧感に思わず女子は頭を下げる。その直後山中ははっと言って正気に戻り、よよよと力なく座り込んだ。

「先生の時は、おしとやかなキャラで通すって決めてたのに……」

「先生……」

山中がそう呟いていると律が彼女に肩に手をやり、山中が顔を上げる。その瞬間律が口を開く。

「バラされたくなかったら、顧問やってください」

「りっちゃんたくましい子!？」

「あ、ちなみにりっちゃんの携帯の録画機能使って録画しときましたので。ああ僕はテニス部員ですが先生が軽音部の顧問をやったさるならば絶対口外しないと誓いますよ?」

「てめえは抜け目ねえな!？」

なんと律と孝明が二人がかりで山中を脅し始めた。孝明はさっきまでの模様を律の携帯で録画しておりしっかり証拠として再生をやっている。それを聞いた山中はうーうーと唸りながら耳を塞ぎ、やがて諦めたようにうつむいた。

「分かったわよ……」

「はい！ じゃあ顧問は山中さわ子先生つと！ 判子お願いしますねー！」

山中の言葉を聞いた律はさらさらっと顧問に山中さわ子と書き、判子お願いしますと言って山中に手渡す。山中は諦めたようにうつむいて用紙を受け取り、一行は職員室に向かうと山中の判子をもらい、生徒会室に行つて部活申請紙を和に渡す。これでようやく軽音部は正式な部活として認められることとなった。

第八話 顧問！（後書き）

孝明は色々謎がありますというか掴み所がありません。

さう次回があれでその次に学園祭……せっかくだから学園祭にはオリジナルストーリーでも組み込んでみるか？……ま、そこはまた後で考えるとして、それでは。



## 第九話 ボーカル決定！目指せ学園祭！

山中先生が軽音部の顧問になった翌日、授業も終わって軽音部メンバーは部室に集合していた。ちなみに孝明はテニス部をさぼって野暮用の名の元バイトに行っており、テニス部メンバーが怒り狂っていたがまあいいだろう。

「さあ！ 顧問も決まった事だし後は学園祭に向けて練習するだけだ！」

「ほぼ無理矢理顧問にされたんだけどね……相変わらずお茶飲んでるし、お菓子まで持ち込んで……もう」

「まあまあ」

律のガツポーズ交じりの言葉に山中が呆れたように言い、ケーキを食べお茶を飲んでる唯を見ながらそう言つと律がまあまあと治めようとする。しかし山中はきりつとした目を見せていた。

「まあまあじゃないわよ全く」

「先生もケーキ食べますか？」

「いただきますー！」

山中が怒ろうとした瞬間気づいていないのか紬が山中にケーキを勧めると彼女は速攻でそう言い、ケーキを食べる。む、おいしいと呟いていた。そしてケーキを齧りながら山中が尋ねる。

「そういえば、学祭でやる曲は決まったの？」

「あ、はい。今オリジナルの曲を練習中なんです。聞いてもらえますか？」

「もちろん」

山中の問いに漣が頷いて返し、尋ねると山中はもちろんと頷いて次にニヤリと笑みを浮かべる。

「なんなら演奏中のパフォーマンスの仕方も教えてあげる」

「それはいいです」

「さ、やるぞ。準備しろー」

山中の提案に漣が真顔で返していると光矢がそう言い、唯がはいと言ってアンプにコードを繋ぎ、律もスティックを持つ。そして準備を終えて全員が構え、律が合図すると一斉に演奏を始めた。そして演奏が終わると漣がふうと息を吐いて山中に尋ねる。

「ど、どうでしょうか？」

「そうねえ、言いたい事は色々あるけど……ボーカルはないの？」

「……あ」「」「」「」

漣の言葉に山中は考える様子を見せた後尋ね、それを聞いた軽音部メンバーは思わず声を出す。それを聞いた山中は少し黙った後また尋ねる。

「じゃあ、まさか歌詞も？」

「……ありません」

山中の問いに返したのは律、それに山中は呆れたように頭を押さえる。すると漣が声を出した。

「あ、歌詞だったら作ってきたんですけど……」

「ほんと？ 見せて見せて」

「え？ で、でも恥ずかしい……」

「い〜じゃん〜」

漣の一枚の紙を持ちながらの言葉を聞いた唯が歌詞を見せてとせがむと漣は恥ずかしそうに言い、唯がいいじゃんと返すと漣は恥ずかしいと逃げる。それがしばらく続いていると山中が苛々とした様子で漣に手を伸ばす。

「早く見せんかい！」

「あぁっ！！」

山中がそう言って歌詞をひったくると漣は悲痛な悲鳴を上げ、山中と律が歌詞を見ると光矢も好奇心から後ろから覗き込む。

「君を見てるといつもハートDOKI DOKI 揺れる思いはマシユマロみたいにふわふわ」

「……無理」  
「か、身体が……かゆっ……」

その歌詞の一部を見た瞬間光矢は右手で顔を覆いながらそう呟いて歌詞から目を離し、山中と律は悶え苦しみ始める。すると漣は歌詞を返してもらいながら呟く。

「私としてはいい感じに書けたと思ったんだけどなあ……やっぱり駄目かなあ？」

「い、いや、駄目って訳じゃなくって……」

「ほ、ほら！ 唯からも何か言っつてよ！」

そう言う漣は涙目で、それを見た山中はびくりとなりながら言い、律も慌てたように唯に振った。

「すごくいい……」

「マジで!?!」

しかしその唯はうつとりしており光矢と律のハモリツッコミが決まる。そして律が漣から歌詞を奪い取って唯に見せる。

「だってこれだよ？ ふわふわ時間タイムだぜ？」

「うんっ！ 私この歌詞大好きだよ！」

「ほ、ほんと？」

律の言葉に唯は頷いて溲の両手を握り、それに溲もうれしはずかし  
というような表情を見せる。それを見ながら光矢が紬に尋ねた。

「琴吹、お前はどつて!? (かなりうつとりしてる!?)」

「ム、ムギも気に入ったの?」

「はい」

光矢はそう言いながら紬の方を向くが彼女もまたうつとりしており  
光矢は驚いたように心中で叫ぶと続いて律が尋ねる。それに紬は恥  
ずかしながらというように頷く。そして律は歌詞を彼女に見せた。

「正直、こういつのアリだと思っ?」

「ええ……本人同士がいいのであればいいんじゃないんでしょうか  
っ!?」

「お前は何を言っているんだ?」

律の言葉に紬は力説するようにそう言い、その言葉にまた光矢と律  
がハモリツツコミを入れた。

「さ、さわちゃんはこの歌詞ないと思うよな!? こ、光矢もそう  
だよな!」

「さ、さわちゃん?……そ、そうね……」

「少なくとも歌いたくないのは確かだ……」

律の言葉を聞いたさわ子は何かを考え出し、光矢もため息をつきながら答える。その言葉を聞いた律はそうだよなと頷いて皆の方を向きなおした。

「そ、そうだよな！ 皆、やっぱり考え直した方がいいんじゃない」

「あ、私もこの歌詞好きかも」

「裏切った!?!」

しかし律が主張している横から山中がきゃはっという様子で言い、その言葉に光矢と律がまたもやハモリツッコミを入れる。そして光矢が諦めたようにうつむいた。

「じゃあ、もうこの歌詞でいくか……」

「そうだな……んじゃあ、ボーカルは溲ってことで……」

「わ、私は無理だよ!!」

光矢の諦めの言葉を聞いた律も諦めたようにため息をついて頷き、作者である溲にボーカルを任せようとするが溲はぶんぶんと首を横に振って叫んだ。それに光矢と律が首を傾げる。

「「なんで?」」

「こ、こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えないよぉー!!」

「おい作者!」

「自分が歌えないような歌詞書くな!」

二人の言葉に滯はぶんぶんとして首を横に振り顔を手で覆い隠しながら叫ぶ。それにまた光矢と律がツッコミを入れ、律はふうと息を吐くと唯が凄いやりたそうな表情をしているのに気がついた。

「……唯、やってみる？」

「え、私？　で、でも私歌そんなに上手くないし、私なんかが務まるかどうか」

「じゃあムギ歌ってみる？」

「ごめん！　歌う！　歌いたいですー！！」

律の言葉を聞いた唯が恥ずかしそうにそう言っていると律はあっさりスルー、それを聞いた唯は慌てて律の制服を掴みながらそう叫んだ。

「それじゃ、ちょっと歌ってみようー！」

「ラジャーー！！」

律の言葉を聞いた唯は敬礼した後ギターを準備し、ふうつと息を吐いて目を瞑る。

（唯姉え、ギター弾きながら歌えるのか？）

光矢はふと心中でそう思う、と唯が歌いだした。

「君を見てるといつもハート」

「唯、ギター弾き忘れてるぞ」

しかしギターの方を弾き忘れており光矢が注意すると唯はあつと言

った後でへへと笑ってやり直す。そして今度はちゃんとギターを弾いているが……

「唯、今度は歌えてないぞ」

「ほうあ！ ギターを弾きながら一緒に歌、歌えない……」

「だろうな……」

今度は歌を歌えておらずまた光矢がツッコむと唯はがくんと膝をつき、光矢は息を吐きながらそう言う。すると山中が立ち上がった。

「先生が付きつきりで特訓してあげるわ！」

「先生！」

山中が膝をついている唯の前に立ち、手を差し伸べながら言う。唯がそう返して手を握り返すというどこかの青春ドラマみたいなシーンが展開され、光矢が苦笑を浮かべていると山中は立ち上がった。唯の両肩を掴みながら不気味に笑いつつ口を開く。

「それじゃまず歯ギターのやり方は」

「それはいいです」

「無駄なことは教えんでいい」

山中の言葉に唯はさらりと返し、光矢も続けると山中はちつと舌打ちをした。

それから一週間後、軽音部の部室で和が何かの用紙に必要事項を記入していた。



「ボーカルは唯、曲名はふわふわ時間タイムつと、じゃあ出演時間が決まったらまた連絡するわね」

「悪いな真鍋、わざわざ来てもらって」

「生徒会の仕事だから別にいいわよ。でも、唯がボーカルって本当に大丈夫なの？ 若宮君の方が安心なんじゃ？」

「あんな歌詞歌いたくない、歌うくらいなら辞退したい」

「そ、そう……」

和が用紙に記入を終えてそう言うのと光矢が軽く頭を下げながら返し、それに和は笑って言った後尋ねるが光矢はぶんぶんと首を横に振ってそう返す。それに和は苦笑を漏らしていた。するとその瞬間バァンと音を立てて部室のドアが開く。

「待たせたわね！」

「ああ山中先生……唯、本当に大丈夫なんだろうな？」

「完璧よ！」

ドアが開いた直後聞こえてきた声の主は山中先生、その姿を見た光矢がため息混じりに尋ねると山中はそう言ってサムズアップをし、横でギターを構えて立っている唯に目を向ける。

「さあ唯ちゃん！ 見せてやりなさい！」

その言葉を聞いた唯はこくと頷いてギターを弾き始める。それを聞いた全員が思わずそれぞれ声を漏らした。

「う、上手くなってる……」

「す、凄い……」

「なんて自信に満ち溢れた表情……」

「へえ、指導力は確かみたいだな……」

律、漣、紬、光矢が声を漏らし、いよいよ唯は歌いだす。

「ぎみ〴〵を見て〴〵る〴〵どい〴〵づも〴〵ばーどどぎどぎ……」

「声枯れてんじゃないかねえか!？」

しかし唯の歌声を聞いた瞬間光矢がツツコミを入れ、二人はてへというように右手を頭の後ろにやってちよろつと舌を出す。

「練習させすぎちゃった」

「ごえ〴〵がれ〴〵ぢゃった」

「可愛い子ぶつても駄目だー!!!」

二人に対して光矢は二人をびしつと指差しながらツツコミを叩き込む。それを見ながら和がはあとため息をついて口を開いた。

「どうする? 変更できるのは今日までよ」

「えっ!?! そうなのか!?!」

和の言葉に律が驚きの声を上げ、それを聞いた光矢はすたすたと漣

に歩き寄ると彼女の肩をぽんと叩いた。

「秋山、もうお前がやるしか道はない」

「え、ええっ!？」

光矢の言葉に漣が驚きの声を上げると律がつんと頷いた。

「確かに漣なら歌詞は覚えてるだろうし、光矢にこの歌を歌ってもらうのは……」

「拷問だろ、歌う方はもちろん聞く方も」

「頑張つてね、漣ちゃん」

律の言葉に光矢は深く息を吐きながら返し、紬もにっこり笑顔で続ける。それを聞いた漣の顔が急激に赤く染まり始めた。

「ふ、ふええ、ふえああああ……」

「だー漣っ! 大丈夫かー!？」

そして頭から湯気を出しながら後ろに倒れ、律が慌てて揺り起こそうとするが彼女は頭の上にひよこを舞い躍らせながら目をぐるぐると渦巻きにしている。

「……若宮君、こんな調子で大丈夫なの？」

「……なんとかするしかないだろ……」

その光景を見ていた和は光矢に尋ね、それを聞いた光矢も右手で額を押さえながらそう呟いていた。学園祭まで、もう数日しかない。

## 第九話 ボーカル決定！目指せ学園祭！（後書き）

いや〜どうにか4000文字……まあ別にここには文字数規定があるわけじゃないですが個人的に癖でこれくらい書かないと落ち着かないと言っね、最低4000文字前後。

そしてこの小説の題名ですがもう思いつかないのでこの仮題をそのまま本題という形にしたいと思います（おい）。もしも何かいい題名の案があったらご教授お願いします！（止める）。

さあ次回は前編の山場？こと学園祭。何かオリジナルのストーリーも組み込んで行こうかな？ま、それでは。

## 第十話 桜高祭！そして軽音部初ライブ！

十月上旬、今日この学校は盛り上がりを見せていた。校庭は生徒や一般人で溢れかえり、校内にもたくさんの人がいる。その校庭には【たこ焼き屋】、【焼きそば屋】、【お好み焼き屋】など様々な露店が立ち並んでいる。

そう、今日はここ桜ヶ丘高校の学園祭。正式名称【桜高祭】である。そしてこの一生徒である光矢も例外なく校庭に立ち並ぶ一つの露店で……。

「バナナクリームパフェ一個、カスタードクレープ一個お願いしまーす！」

「おっしゃあ！」

「はいはい！」

「クッキー入れた袋どこですかー!？」

「なくなったか!? そのビニール袋の中に詰めてる！」

「一緒に入ってるケーキも苺のショートケーキはそろそろなくなるだろうから補充しといた方がいいよ！」

様々なお菓子を作っていた。彼らがやっているのは【デザート屋】。クッキーやケーキ、クレープなどを単品ではなく全て売っているのだ。まあ流石にクッキーやケーキなど作るのに時間がかかるものは作り置きではあるがクレープやパフェに関しては注文を受けて作っている。

ここで一番の働きを見せているのはお菓子作りが趣味である光矢と学校には内緒にしているとはいえファミレスでバイトをしている孝

明の二人。接客を担当しているクラスメイトの女子の注文を的確に聞き分けて作っていきさらに作り置きのカッキーの場所も完璧に把握している。

「カスタードクレープ、上がったぜ！」

「はいっ、バナナクリームパフェお待ちどうさまです！」

二人は同時にそう言って注文の品を渡すと客はありがとうございませと云って代金を支払う。

「あゝいゝお釣りです〜」

「唯、あんま声を出すな。のど飴舐めとけ」

ちなみに唯は練習の余り声が枯れているため客引きや接客をさせるわけにもいかずかといって料理を任せられるほどの実力も無いためつり銭渡し係に任命されていた。

「ぎゃー！ またブレーカーが落ちたー！！」

「どこのクラスよもー！ きちんと守ってよねー！」

「……大変そうだねー」

別の露店からそんな声が響き、孝明はそれを他人事のように見ている。事実この露店はブレーカーが落ちてはいない、その謎を知っている光矢が孝明に言った。

「当日ソーラーパネルとかの自家発電装置を持参するって、お前何者だよ？」

この露店の屋根の上にはソーラーパネルが設置されており場所も太陽が良く当たる場所をとっている、それによってここは無事に済んでいるのだ。しかしそれを設置したのはただの一生徒である孝明、それに光矢が尋ねると彼は笑顔を見せた。

「ま、色々ね。面白そうな事には全力を挙げて協力するのが僕のやり方だから」

「ああそうかい」

「チョコレートクリームパフェ二つお願いしまーす！」

「「はいはい！」」

孝明は素晴らしいほどの笑顔でそう言い、それを聞いた光矢はそうかと言って諦めのため息をつく。そしてこれに関する思考を諦めると接客担当の女子からの注文を聞いて注文品を作り始めた。それから客の数も少なくなってきた頃、光矢は注文のストロベリークリームクレープを客に渡す。と突然携帯のバイブが入り、光矢はタオルで軽く手を拭くと電話に出る。

「もしもし？」

「あー光矢？」

「田井中か。どうした？」

「体育館にアンプとか機材運ばなきゃいけないってさ、私達なんとか扱けたし光矢と唯は大丈夫か？」



「唯は別に問題ないだろうが俺は店にいないと万一店が混んできた時に菓子作りの戦力が……他に誰か適当なのを手伝いに」  
「大丈夫だよ」

電話の相手は律、内容は機材を運ぶというものだが光矢は店の方を心配してかそう返す。すると孝明が突然遮る形でそう言い、光矢は孝明の方を見る。すると彼はぐつとサムズアップした。

「光矢一人いなくなった程度で僕は困らないよ。他の人達も慣れてきてるし必要とあらば僕の本気を見せてあげるから」

「……てめえの軽口にはもう慣れたが、頼むぞ」

「オツケーオツケー、まつかせといてよ。もう大船どころかタイタニック号に乗ったくらいに」

「沈んでんじゃねえか。まあいい、行くぞ唯、準備しろ！ 田井中、今から向かうって伝えとけ！」

「オツケー」

「おっし、待ってるぜ！」

孝明のけらけらと笑いながらの言葉に光矢はいつものように返して唯を呼び律にも今から向かうと伝えて電話を切った。

「じゃ、頑張つてね。成功を祈ってるよ」

「おっし」

孝明の言葉に光矢はそう返す、とクラスメイトの女子の一人が話しかけてきた。

「あ、あの、若宮君、その……ライブ、絶対に見に行くから、頑張つてね?」

「ああ、サンキユ。んじゃ孝明、あとは任せるぞ」

「オツケー、任されたよ」

その女子の言葉に光矢は微笑を浮かべながら返した後孝明にそう言う。孝明もまたサムズアップをしながらそう言う。

「ごう、ちゃん早くー」

「わあ、たわあ、たちよと待ってる、制服でよかったそっちと違ってこっちは白衣とエプロン外すんだ。それと光ちゃん言うな!」

待ちきれなくなったか唯の言葉に光矢はそう言って制服を汚さないために着ている白衣とエプロンを外し、最後にいつものようにそう言い締める。そして準備が出来ると二人は軽音部部室に向かう、その道中だった。

「おいお前! 人様にぶつかつといて挨拶もなしか!??」

「ん?」

突然喧騒が聞こえ、光矢はそっちを見る。そこには他校らしき男子が来校していた一般人の男性に対し声を荒げている姿がありその相手は完全にびびっている。どうせあの男子が肩が触れたとか因縁を

つけているのだろう、真偽確認して止めてくるか。光矢はそう考え  
ると唯に待つてると言い残し歩いていこうとする。その時だった。

「あなた、やりすぎですよ？」

「ああ!？」

光矢より先に彼に声をかけたのは黒い髪を長く伸ばした少女、それ  
に男子が睨みを聞かせるが彼女は平然と続ける。

「私はあなたがすぐそのメイド喫茶をやっている女子店員を見て  
いて前方不注意でぶつかつた光景を目撃しています。完全にそつち  
の過失です」

「なっ!？ う、うぜえんだよテメツ!!」

少女の言葉を聞いた男子は顔を赤くしながら彼女に殴りかかるが彼  
女はその拳を平然と避けていく、そして男子がくそつと叫んでもう  
一度拳を振り上げるとその腕を光矢が掴んだ。

「て、てめえ何しやる!？」

「事情は聞いたが、それが事実なら明らかに悪いのはそつちだ」

「てめえ、この女が嘘ついているとは思わねえのか!？」

「あん？ 妹を無条件に信じるのが何か悪いのか？」

「こ、光矢さん……」

男子の怒号を聞いた光矢はこっちもまた平然と返し、それに男子がまた怒鳴ると光矢はさらっとそう言う。それに光矢が妹と称した少女の隣にいる栗色の髪の少女が苦笑交じりに彼を呼ぶ、と男子はぎくりとなつて光矢の腕を振り払って距離を取りながら彼を見る。その表情はどこか恐怖のものに近かった。

「こ、光矢つてまさか若宮光矢!？」

「? そうだけど、クラスメイトか何かだったか？」

「……ん、んじゃあなっ!!！」

男子の言葉に光矢は肯定を入れ、首を傾げて尋ねるが彼は逃げるように去っていく。それを見た光矢はまた首を傾げた後黒髪を伸ばした少女に向きなおす。

「真由、いきなり無茶は止めろ」

「だってカツアゲなんて許せないし、いざとなればその辺の箒とかでも使えば、そもそも素手でもあんなの一人くらい」

「- こんな時期に騒ぎを起こすなつて言いたいんだ」

光矢の言葉に黒髪を伸ばした少女　真由はそう返すがそれを遮る形で光矢はそう言う。それを聞いた真由はふいつと顔を背け、光矢はふうと息をついた。

「憂も悪いな」

「いえ、慣れてますから。それに真由には何度も助けられてるし」

「うゝいゝ、真由ちゃん」

光矢の言葉に栗色髪の少女　憂が微笑みながらそう言つたとその直後唯が二人に抱きかかる。それを見た光矢はやれやれと呟いて唯の首根っこを掴んで歩き出した。

「さ、行くぞ」

「あゝん……」

光矢の言葉に唯はあゝんと泣き声を上げると真由と憂はくすりと笑つて軽く手を振つた。

「お兄ちゃん、頑張つてね」

「お姉ちゃんも頑張つてね」

「おっ」

「頑張るね」

妹二人のエールに光矢は左手を振つてそう返し、唯も引つ張られながら右手を振つて返す。それから二人が部室まで辿り着くと律がおうと右手を挙げる。

「待つてたぜ、んじゃ早速で悪いけどアンプ運んでもらえるか？」

「おっ」

「……あれ？　ムギちゃんと澪ちゃんは？」

律はそう言つて用意しておいたアンプをぼんぼんと叩きながら言い、光矢はそう言つてアンプを持ち上げ、唯もアンプを持つととするが

重すぎて一回下ろし、気づいたように尋ねる。それに律はああと頷いた。

「ムギも機材運び、漣には別の事やってもらってる。今の漣には危なっかしくて機材運ばせられないからな」

「「ああ〜」」

律の言葉を聞いた二人はすぐに納得する。自分がボーカルという事で上の空になり機材を落つことされたらたまったものじゃない。そう納得すると光矢はアンプを持ちながら言った。

「んじゃあムギー一人に任せるわけにもいかないしとつとと運ぶか」

「うん！ せ〜のつとと〜！」

光矢の言葉を聞いた唯も身体全体を使って力いっぱいアンプを持ち上げる。そして二人は体育館に向けて歩いていくが平然と持っている光矢に比べ唯はふらふらと危なっかしい足取りになっている。と二人の前に紐が現れた。

「あ、ムギちゃん」

「二人ともお疲れ様」

「おう、まだ残ってるけど琴吹も落として怪我とかしないように気をつけるよ」

「ええ。じゃあね」

紬に気づいた唯が腕をふるふる震わせながら声をかけると紬は笑顔で言い、光矢が注意するようにそう言うと紬は笑ってそう言うと部屋の方に歩いていく。それから二人はまた歩き出し、光矢は唯にペースを合わせて歩いている、その時だった。

「ふんふんふん」

「……」

紬が軽快な鼻歌を歌いながら汗一つかかずにドラムを持って笑顔で歩き二人を追い抜いていく。それを見て二人は思わず啞然としてしまうが、少しすると気を取り直して運び始めた。それから何往復かして機材運びが終わると二人は部屋に戻り唯はぐでつと床に突っ伏す。

「はあく、疲れた」

「お疲れさん」

「皆さん、お茶入れましたよ」

「あくどうも……つか、ほんとによく体力あるな……」

唯が床に突っ伏しながら言うのと律が苦笑交じりに言い、紬が紅茶を入れてそう言うと光矢は返し、心中で呟く。そして四人がお茶を飲んで雑談をしていると漣が入ってきた。ちなみにお茶を飲んでいたら唯の喉も治ってきたらしい、歌うのは無理だが普通の会話程度なら問題ないようだ。

「機材運ぶの、終わった？」

「あ、澪ちゃん」

澪は入りながらそう言つと唯が声をかけ、澪は空いている席に座ると律が気づいたように言った。

「お、なんか落ち着いてるな」

「ん？」

「あんなにボーカルするの嫌がってたのに」

「そんな子供じゃないんだし、いつまでも動揺しちゃいけないわよ」

律の言葉に澪は笑いながらそう言つて袖に差し出されたカップを持つ、が顔こそ動揺していないというように笑つてはいるものの身体は正直と言つべきかカップはカチャカチャと音を立て普通ではありえないくらいに揺れていた。なんかもう今にも中身が零れそうで心配になりそうなほどに。

( (めっちゃ動揺してる！？) )

思わず光矢と律が心中八モリツツコミをしまい、光矢が口を開く。

「秋山、もうすぐで本番なのに本当に大丈夫なのか？」

「もうやだ……律！ 私とボーカル変わって！」



「じゃあドラムどつするんだよ!？」

「私がやるから!」

「じゃあベースどつするんだよ!？」

「それも私がやるから!」

「おーやってもらおうか!？ 逆に見てみたいわ!」

澪は涙目で律に訴えるがボーカルという彼女にとって最大の地獄を前に動揺のあまりに頭が混乱しているらしく訳が分からなくなっている始末だ。

「離れんかい……」

そして抱きついてくる澪を律が必死に引き剥がそうとしているとまたドアが開いた。

「皆、いるわね!？」

「山中先生？ どうしたんですか？」

入ってきたのはご機嫌な山中、その姿を見た光矢が尋ねると山中はふふふと笑いながら口を開く。

「不本意ながらも軽音部の顧問になった事だし、何か手伝うことないかな?」と思つて……衣装作ってきました!!」

「ノリノリだ!？」

「へ〜、ぱつと見ただけで良く出来てるな〜」

山中がそう言つて衣装を取り出すと律が思わずツッコミこれまた裁縫も趣味である光矢は衣装を見ながらそう頷く。そして律が山中に話しかけた。

「いや、先生……気持ちはいりただけど……ちょっと、タイミング悪かったかな？」

律がそう言つて澗の方を見ると彼女は「あんな服着て歌うの？」とこの世の終わりみたいいな表情で呟いている。それを見た光矢もああと頷いた。

「ちよつとタイミング悪かったな」

「そつかく、この服はお気に召さなかつたか……」

光矢の言葉に山中がふんふんと頷くと澗は全力で首を縦に振る。そして山中は少し考えるとあつと声を出した。

「じゃあ私の昔の衣装はどう？」

「あー！ やっぱりさっきの衣装着たくなってきたー！！」

山中の提案を聞いた瞬間澗はそう叫び、光矢はため息をつく。と律が席を立てて声を出した。

「ストップさわちゃん！ こんな服着るの澗じゃなくても恥ずかしいよー！」

「律……だ、だよな！」

「そうかなあ……頑張つて作ったんだけどなあ……それに」

律の言葉を聞いた漣が頷くと山中はんぐと考えるような表情を再度見せ、ふと視線を奥に向ける。

「唯ちゃん達は喜んで着てるわよ？」

「お前らー！！！」

「！？」

山中の言う通り紬はナース服に、唯に至ってはスクール水着に一切の恥らいなく着替えている。それを見た律が吼えるように怒鳴り声を上げ、光矢は気恥ずかしさからか必死で二人から目を逸らす。そしてついに律、漣、光矢も観念して五人はステージ衣装を受け取り、楽器を持つメンバーは楽器を持って体育館に向かう。そして男女別々の指定の位置で着替えると舞台袖で合流する。そして白を基調とした衣装に身を包んだ唯は舞台袖から体育館を覗いて声を出した。

「うわゝ、人いっぱいいるよぉ……」

「よし、今こそ練習の成果を見せる時だぜ！」

「うん！」

「おう！」

「はい！」

唯の言葉を聞いた律　黒を基調とした衣装に着替えている　は拳を握りながら言い、それを聞いた三人　紬も黒が基調の衣装、光矢は執事服に着替えた　は三者三様に返す。すると舞台袖の力

ーテンに隠れた澪が声を出す。

「り、律……なんでこんな格好で平気なんだよー!?」

「うふふ、可愛いですわよ澪ちゃん」

澪は黒い衣装　女子は全員ゴシック系統らしい　に身を包みながらそう言い、それに律は笑いながら返す。そして進行の音が響いた。

「次は、軽音楽部によるバンド演奏です」

「よーっし皆、行くぞー!!」

「……おーっ!!」「」

進行の音が聞こえてくると律が言い、三人が右手を挙げながら返すと澪は緊張のあまりがくがくと震え出す。とそこに待機していた山中が声をかけた。

「まだ緊張してるの?……あ、澪ちゃんだって分からないようにメイクしてあげよっか?」

「い、いつてきまーっす!!」

半ば脅迫のように聞こえてくる山中の言葉を聞いた澪はそう言って他のメンバーと共に舞台に出て行く。そして全員が配置につき、ギターの最終調整を軽く行う。そして舞台の照明がつき、観客から歓声が上がった。

「あ、あ、あ……だ、駄目だっ……」

「澪ちゃん!」

観客に飲まれて震えてしまい、澪は震えながらも駄目だと心中で呟くがそこに唯が声をかけ、澪が唯の方に顔を向けると彼女はにこっと微笑んだ。

「私、澪ちゃんが頑張って練習してきたの知ってるから。絶対に大丈夫だよ! 頑張ろう!」

「おう、失敗なんて恐れるな。もし失敗しても俺らがその分成功で塗りつぶしてやる。いつも通りやれば大丈夫だ」

「……」

唯に続いて光矢もそう言い、それを聞いた澪はうんと頷くと律を見、律もこくと頷いてスティックを掲げた。

「1、2、3、4、1、2、3!!」

カウントに合わせて光矢と唯がギターを鳴らし、律の力強いドラムが入る。しばらくして澪のベースに細のキーボードが入り、その五重奏に澪の歌声が合わさった。

「君を見てるといつもハートDOKI DOKI

揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ

いつも頑張る（いつも頑張る）君の横顔（君の横顔）

ずっと見ても気づかないよね

夢の中なら（夢の中なら）二人の距離

縮められるのにな

ああカミサマお願い二人だけの

D r e a m   t i m e ください

お気に入りのうさちゃん抱いて今夜もオヤスミ

ふわふわ時間タイム（ふわふわ時間タイム）

ふわふわ時間タイム（ふわふわ時間タイム）

ふわふわ時間タイム（ふわふわ時間タイム）……」

そして演奏が終了すると割れんばかりの拍手と歓声が響き、それを見た秋山は嬉しそうに笑った。

「み、皆ー！　ありがとうー！ー！」

その言葉と共に拍手と歓声がさらに強まり、漣はふうと息を吐く。

（これで、漣も恥ずかしがりや克服できそうだな）



「ちょ、ちよつと光ちゃん!？」

「わ、若宮君!？」

光矢にギターを押し付けられた唯に山中は驚いてそう叫ぶがその頃には光矢は舞台を飛び降りていた。

「光矢! こつちだ!！」

「おう! それと真由! いるならここに残って似たような事する馬鹿がいたら許可する、遠慮なくぶちのめせ!！」

「了解!！」

同じく犯人を追いかけようとしている孝明の誘導を聞いた光矢は頷いた後妹である真由を呼び、一切の躊躇いなくはつきりとそう口にする。すると真由もまた席を立ててそう返す。

そしてその場を真由や他のメンバーに任せると光矢と孝明は犯人を追う。しかし相手はすばしっこくなかなか追いつけそうにない。二階を走っていると孝明がふと気づいたように窓を見る。

「挟み撃ちしよう、なんとかしてこの先の階段を降りさせて」

「分かった。頼むぞ」

「オツケッ!」

孝明の言葉に光矢は察したように返すと孝明は手近な空いている窓から一気に飛び降り、光矢はスピードを上げて相手を追う。それに動揺した犯人は作戦通り階段を下りていくがその踊り場の辺りで孝明が先回りしており動きを止めると犯人 ガラの悪そうな他校の



男子　　は踊り場の隅に追いやられる。

「さあ、カメラ渡してもらおうか。それとも携帯か？」

「な、なんだよ！？　あんな人前で転ぶようなうっかりした女が悪  
いんだろぅが！？」

「なんだと？」

光矢がそう言うのと犯人は開き直ったように言い、それに光矢が睨み  
を強くすると孝明が口を開いた。

「いい度胸だね、若宮光矢と秋草孝明に逆らおうなんて」

「なっ！？　ま、まさか鬼の若宮、修羅の秋草！？」

「そう呼ばれてるね」

孝明の言葉を聞いた犯人はぎくりとなったように叫び、それに孝明  
は邪悪そうな笑みを浮かべて返す。それを聞いた犯人はひいっと唸  
って正座し頭を下げ土下座を始めた。

「い、ごめんなさい！　許してください！　ど、どうか命だけは！  
！」

「最初っから素直になつてればいいんだよ。僕としてはさっきの写  
真さえ消させてもらえればいいから、借りるね」

犯人が土下座を始めたのを光矢はきょとんとして見つめていたが孝  
明はさらっとそう言うって携帯を借りるとさっきの写真を消し、もし

や他のとこにコピーしてないかもくまなく確認、それをやってないことを確認すると指紋を消してから携帯を返した。

「はい。じゃあもう止めてね？ もしもこれを逆恨みしてこの学校の生徒に手を出したら……分かってるね？」

「は、はひ！！ 失礼しましたあ！！！」

孝明の笑顔での言葉を聞いた犯人は深くお辞儀をすると階段を降り逃げていく。最後の一二段辺りで足を踏み外してずっこけたが二人は気にせず体育館へと戻っていく。その途中にふと光矢が尋ねた。

「なあ、さっきの鬼のなんたらとかって……なんだ？」

「ああ、知らなかったっけ？ ほら覚えてない？ 中一の時どっかの不良一人が売ってきた喧嘩に光矢が勝ったらそれを逆恨みして五十人くらいで仕返しに来たあれ。僕も巻き込まれたんだから忘れたとは言わせないよ？」

「……ああ、あれか」

光矢の問いに孝明がそう尋ね返すと光矢は少し考えた後思い出したように呟く。それに孝明がふつと笑みを浮かべて返した。

「思い出すね」。光矢の友達の女の子、唯ちゃんの事だろうけどそいつを預かったから無傷で返してほしかったら大人しくしろって。和ちゃんを待ってるからって学校に残ってるの知ってたから嘘もいいとこだねって思ってたのに光矢ってば本気でぶち切れるんだもん」

「う、うるせえ、つい頭に血が上っちゃったんだ……」

「はいはい。で、それで僕と光矢二人で五十人の不良を倒したことから不良の間じゃ鬼の若宮と修羅の秋草って物騒な異名がついちやったんだよ。全くもう、この名前を出せばカツアゲしてきた不良を喧嘩なしで追い払えるから便利っちゃ便利だけど僕としてはいい迷惑だよ」

「……悪かったな」

「いいっていいって。光矢にとって唯ちゃんが大事なお姉ちゃんだって事は昔っから知ってるからさ」

「……とつとと戻るぞ」

「はい」

光矢と孝明はそう話をし、孝明の言葉を聞いた光矢は頬を少し赤くしながら足を速めてそう言つと孝明もそれにペースを合わせる。そんな様々な事件があつて桜ヶ丘高校軽音部の初ライブは幕を閉じた。その翌日、軽音部メンバー+孝明は部室に集合する。

「皆！ 昨日はお疲れさん！」

「打ち上げ用に昨日買い過ぎちゃった食材の余りから簡単なケーキ作つたから遠慮せず食べてよ！」

（材料の余りなんてあつたか？……）

律が言つと続けて孝明がそう言つてケーキを取り出すがそれを聞い

た光矢は首を傾げる。しかし唯は嬉しそうな表情を浮かべているからまあいいかと勝手に終わると律は唯の肩に手を置いた。

「それにしても、唯は初ライブだったのになかなかのものだったよ」

「いや、えへへへへ」

律の言葉を聞いた唯は照れたように笑い、次に律は何かのビールを見せる。

「漣はファンクラブが出来たそうだぜ？」

「うわー、すごい！」

「……あの本人は再起不能だけだな」

律の言葉に唯が感嘆の声を上げると律は部屋の隅っこで真っ白になり負のオーラを発しながら体育館座りで何かぶつぶつと呟いている漣を見て続ける。それを見た唯も引きつった笑みを浮かべた。

「恥ずかしがりや、悪化してないよな？」

「さあ？……」

「人間不信にならなきゃいいけど……」

それを見た光矢が律に尋ねると彼女もはあと息を吐きながら言い、流石の孝明も苦笑を浮かべるしか出来ない。すると紬があつと声を出した。

「そういえば気になってたんだけど、若宮君舞台を飛び降りる前に唯ちゃんの事を唯姉えって言ってなかった？」

「えっ!？」

「あー言ってた言ってた」

「そ、そうだったか!?　だ、だわっ!?　唯っ!？」

紬の言葉を聞いた光矢は彼女の方を見ながら声を上げ、それを聞いた律もうんうんと頷く。それに光矢は動揺を隠せず、その瞬間唯が光矢に抱きつく。

「えへへへ、久しぶりに唯姉えって呼んでもらえて嬉しかったな」

「二人っきりの時はいつもそう呼んでるだろうが、はっ!？」

唯の言葉を聞いた光矢はそう叫ぶが途中で墓穴を掘ってしまった事に気づき、どんどん顔を赤く染めていく。孝明と律はニヤニヤと笑みを浮かべており、紬もうふふと笑っていた。

「いや、若いっていいですわねえ、奥さん」

「そうですわね、奥さん、もう冬なのに冷房が必要かもしれませんわ」

「黙れ!!--!!」

孝明と律はわざとらしい口調でそつ話し始め、それを聞いた光矢は  
思いつきり声を轟かせた。

第十話 桜高祭！そして軽音部初ライブ！（後書き）

いや、今回はもうほとんど完成近かったのを仕上げただけで今回は結構走り走りで荒いとはいえ同日二作、今回は一万文字近いのを書ききれるとは思わなんだ。

今回は学園祭、オリジナルとして最初に彼らのデザート店、そして二人の初期設定を利用したちょっとした不良との戦い（？）を書いてみました。というかこの場面だけはこの小説を書こうと思った時に最初から考えてた場面なんですけどね……。

さて、光矢と唯どの辺でくつつけよう？まだ二人とも恋愛フラグそれほど立ってないしなあ……。ま、それでは。感想お待ちしております！

## 第十一話 軽音部メンバーと仲間達でクリスマス会 in 平沢家！

12月中旬、もうすぐクリスマスというような時期にここは桜ヶ丘高校軽音部。軽音部メンバー+孝明はいつものようにここで紅茶を飲んでいた。

「お前テニス部行けよ」

「いや、クリスマスが近くなって恋人いる人はろくに部活に来なくなっちゃったから。困ったもんだよね」

「お前にだけは言われなくないだろうな」

優雅に紅茶を飲んでいる孝明に光矢がツッコむと孝明はけらけらと笑いながらそう返し、それに光矢はため息混じりに呟く。すると軽音部のドアがバァンと開いて律が入ってきた。

「皆ー！ クリスマス会のチラシ作ったぜー！」

「クリスマス会？ やるって言ってたっけ？」

「私は聞いてませんが……」

律がそう言ってクリスマス会のチラシを見せ付けると遷が首を傾げながら尋ね、紬も首を傾げる。と律はえっへんと胸を張った。

「誰にも言っていないからね」

「「「言えよ」「」」



律の言葉に光矢と漣のハモリツッコミが決まる。そして光矢は律からチラシを奪い取って読み流した。

「日時は12月24日で会費1000円……おい、場所勝手に琴吹の家にしていいのか？」

「あの、その日はちょっと都合が悪くって……」

「ほら見る」

光矢はチラシに書かれている日時等を読み最後にそう尋ねると紬がすまなそうに返し、光矢は呆れたように続ける。

「うちは常に何かしらの予定が詰まっていて、一ヶ月前に予約を取らないといけないの。だから、ごめんなさい」

「そ、そうなんだ……」

(どんな家?)

(最低一ヶ月前の予約制って、どっかのパーティ会場なのかこいつの家は?……)

紬の説明を聞いた律が啞然としたように返すと漣と光矢も啞然としたように心中で呟く。すると孝明が尋ねる。

「りっちゃんの家はどう?」

「あー駄目駄目。律の部屋は汚くて足の踏み場もないから」

「なんだとー! 漣の部屋は服とか下着とか散らかってるくせに」

パンツとか」

「まっ真顔ででたらめを言うな！ 若宮に秋草がいるんだぞ!？」

「おやおや何を慌ててるんでしょうね？」

孝明の問いに漣が返すと律が憤慨したように叫んだ後ニヤニヤとした笑みで続け、それに漣が顔を赤くしながら叫ぶと律もまたにやにやと笑いながら返す。そして二人の言い争いが始まり、それを横にしながら絀が孝明に問い返した。

「あの、秋草さんはどうでしょうか？」

「あゝ僕の家はちょっと先約があつてね。その日は無理、まあ僕がパーティーに参加する事自体は問題ないけど」

「そうですか。あの、じゃあ若宮さんは？」

「母さんが近所の知り合いとうちでパーティーするつてさ。唯、お前の家は？」

「大丈夫だよ」

絀の問いに孝明が苦笑ながらに返すと琴吹も笑って返した後光矢に尋ね、それに光矢は肩をすくめながら返して隣にいる唯に尋ねる。それに唯がこくと頷くと漣は口論を止めて唯に歩き寄り話しかけた。

「でも、クリスマスに大勢で押しかけたら迷惑じゃないのか？」

「大丈夫だよ、その日は両親いないから」

「そーいえば追試勉強会で唯の家行った時もお両親いなかったな」

「そういえばそうだ」

「共働きとか？」

「あ、いや、そうじゃなくって……」  
「……」

澪の問いに唯がそう返すと律が気づいたように言い、それに澪も頷いて返す。そして律が唯に尋ねると唯は苦笑を交えながらそれを否定し、光矢も苦笑を浮かべる。そして唯ははにかみながら答えた。

「うちの両親、二人でよく旅行するんだ。クリスマスにはドイツ行くんだって」

（（ラブラブ夫婦！！））

「おかげでうちのクリスマスパーティーとかには唯と憂の参加が当たり前だな。まあ、楽しいからいいけど」

唯の言葉に律と澪が心中ハモリツッコミを披露し、光矢も苦笑交えに続ける。そして唯は自分の胸をドンと叩いた。

「料理の準備は私に任せて！」

「大丈夫か？」

「憂がいるから問題ないだろ。どうせ俺も手伝うことになるんだし」  
「毎年ありがとうございます」

唯の言葉に律が聞き返すと光矢が言い、唯は光矢に向けて頭を下げる。それに光矢は苦笑を浮かべていた。すると律が思いついたように口を開く。

「そうだ！ あれやろうぜあれ！ プレゼント交換！」

「あ、いいですね」

「やるーやるー」

律の提案に紬と唯が賛成する、と律は続けて澗の方を見て笑いながら言った。

「澗、変なもの持ってくるなよ〜？」

「それは律だろ？ 小学校の時びっくり箱渡されたんだからな」

「ベタだな」

律の言葉に澗は呆れたように息を吐いてそう答え、それに光矢はそうツッコミを入れた。それから部活もお約束通りほぼティータイムのみで終了し一行は帰路に着く。とその道中に和を発見した。

「和ちゃん」

「あ、唯」

「やつほー和。今度軽音部でクリスマス会しようと思っただけど、和も参加しない？」

「え？ でも私部外者だけど……いいの？」

和を見つけると唯がいち早く彼女を呼んで走っていき、それに気づいて振り返った和も唯を見て笑みを浮かべる。その次に律がそう尋ねると和は当然だろうがそう聞き返し、それに律は大きく頷いた。

「全然大丈夫だよ。私達友達だし、人数増えた方が会費も増えるし」

「それを何に使う気だ？」

「ま、部員じゃないと参加できないなら僕も厳密には部員じゃないし、大丈夫だよ」

「そ、そう……じゃあ参加しようかな」

「やたー」

律の笑みを浮かべながらの言葉を聞いた澁がじとりとした目つきで彼女に尋ねているのを横に孝明がそう言うのと和は苦笑を浮かべながらそう言い、それを聞いた唯は両手を挙げて喜びを示す。そして唯と和が一緒にプレゼントを買いに行こうと話しているのを横に聞きながら光矢もどうするかと考えていた。

それから次の休日、唯と和は二人で交換会用のプレゼントを買いに来ていた。正確に言うと光矢も一緒に来ていたのだが別のところで購入らしく別の店へと行ってしまったのだが。

(まあ、このお店じゃ買いつらいわね……)

和は店内を見回しながら心中で呟く。二人がプレゼントを買いに来たのはぬいぐるみ等が多い所謂ファンシーショップ、女の子なら全く問題ないとは言え男子にこのお店は入りづらい+買いづらいである。

「和ちゃん、どうしたの？」

「あーはいはい」

唯が店の奥で手を振りながら和を呼ぶと和はそう言って唯の元に歩いていき、二人はプレゼントの吟味を始める。

「あつ！ これ可愛い。和ちゃん、私これにする」

「でも、自分に当たるとは限らないわよ？」

唯がそう言って手に取ったのは可愛い熊のぬいぐるみ、それを見た和がそう言つと唯はあゝと声を出した。

「あーそっか。じゃ、これでいいか」

「おい」

唯がそう言つて手に取ったのはちよび髭の生えた訳の分からない外見の人形、明らかに適感に溢れ和は思わずツッコミを入れていた。そして二人はちゃんとしたものを買つとお店を出て行き、律儀に店の外で待っていた光矢と合流する。彼は大きな紙袋を抱えていた。

「光ちゃんは何買ったの？」

「何買えばいいのか予想もつかなかったから、とりあえず俺らしいものを。それと光ちゃん言うな」

「「ふん」」

唯の問いに光矢はそう返した後いつものツッコミを入れ、それに二人は頷きながら三人は帰路につく。  
それから時間が過ぎてクリスマス会当日。律達軽音部メンバー＋孝明は平沢家へとやってきていた。

「こんにちは」

「はい、いらっしやい」

「よ、真由ちゃん。真由ちゃんもパーティーに参加するの?」

「ええ。高校入試も近いですがちよつと息抜きに」

律が声を出すと家の奥からやってきたのは光矢の妹である真由、彼女に律が挨拶すると真由はにこりと笑みを浮かべながら返し、それに澁はへえと頷いた。

「中三だったんだね。どこ受けるの?」

「憂と一緒に桜ヶ丘を」

「おおー後輩じゃん! じゃあ軽音部へ入部」  
「勧誘は入学してからにしようね?」

漣の言葉に真由はそう言い、それを聞いた律がそう言って勧誘を始めようとするが漣がそれを止める。それを見た真由は苦笑を浮かべた後あっと気づいたように言った。

「玄関で立ち話もなんですし、どうぞ。お兄ちゃんと憂は料理中なので」

「おー」

「「「お邪魔します」「」」

真由の言葉に律は笑いながらそう言って家上がり、漣と紬、孝明も礼儀正しく挨拶した後家上がる。そして会場の部屋に向かうと彼女らは言葉を失った、そこには飾りを作っている唯の姿がある。

「唯……何やってんの？」

「作り出したら止まらなくなっちゃって……」

ようやく漣が尋ねると唯はそう言ってえへへと笑う。それに三人が呆れたように息を吐くと部屋に憂と光矢が料理を持って入ってきた。その料理を見ると律が声を上げる。

「りよ、料理すげえ!!!」

「憂ちゃんが作ってくれたの？」

「え、ええ」

「私も作っただよ!!!」



「そうなのか？」

律の声に続いて漣が憂に尋ねると憂はこくと頷き、続けて唯が言う。律は首を傾げる。そして唯は光矢がテーブルの上に乗せたケーキを持った。

「このケーキ！」

「すげえ！」

「の上に乗せました！」

「私の言っただすげえを返せ！！！」

「ちなみに、作ったのは俺だ」

「だろうね」

唯と律が掛け合いを行っている横で光矢が言う。孝明はふうと息を吐きながら答える。それから料理が全部運ばれ、ジュースも人数分いき渡ると律がコップを持ち上げる。

「それじゃ、メリークリスマス！」

『かんぱーい！』

律がそう言うのを合図に全員がそう言って隣の相手と軽くコップを当てあう。そしてジュースを飲みながら律が口を開いた。

「いや、今年も終わっちゃうね」

「やくね〜オヤジくさい」

律の言葉に返した相手はこの場にはいないはずの相手、それに思わず全員が沈黙してしまい律は声の方を向く。

「これ美味しいわ、お代わりもらえる？」

「どわー！？ さわちゃん！？」

「だ、誰！？」

「安心しろ、うちの顧問だ……」

その相手 山中は平然と憂にお代わりを要求しており、律は驚いたようなオーバリアクションを取りながら叫び、真由が驚いたように言うのと光矢が呆れたように返す。そして山中は憂から料理のお代わりをもらつとぶんぶんという様子で口を開く。

「全くもう！ 顧問を忘れるなんてどういう事！？」

「あ〜いや忘れてたわけじゃないんですけど、その〜……」

山中の言葉に律は頬をかいてそう言い、目を逸らす。と唯がにっこり笑顔で口を開いた。

「先生は彼氏と予定があると思って、呼びませんでした」

唯は悪気のない笑顔で爆弾を投下、しかもその中身は液体窒素でしたと言わんばかりに場が凍りつき、ふるふると震えていた山中は唯

に襲い掛かってその頬を引っ張った。

「そんな事を言うのはこの口かぁー!!!」

「ふえぁー!?!」

「相変わらずだな……」

「だね……」

山中の怒りを受けながら唯は訳が分からないような表情を浮かべており、それを見ながら光矢と孝明はそう言っただけ息をついていた。そして山中は唯の頬を引っ張るのを止めると自分の荷物の中からサント服を取り出す。

「罰として唯ちゃんはこれに着替えてきなさい!」

「なんでそんなもの持つてるんですか!?!」

サント服を突然出された事に唯は当然のツッコミを入れるがなすすべなく着替えさせられる。そのサント服はお臍の部分が露出した所謂へそ出しファッションだ。

「!?!」

それを見た光矢は思わず顔を赤くしてふいつと顔を逸らしてしまい、それに気づいた唯はきよとんとした様子で首を傾げるが彼女が光矢に声をかける前に山中が口を開く。

「可愛いけど駄目ね! 唯ちゃんには恥じらいが足りないわ!」

山中の言葉に唯はがーんとなっており、その間に孝明が光矢にばそぼそと尋ねた。

「どうしたの光矢？ 顔、赤いよ？」

「黙れ、他の奴に言ったら殴り倒すぞ」

「はいはい」

孝明の問いに光矢は殺気混じりの目で孝明を睨み、それに孝明は笑いながらそう返す。

「やっぱりこれが似合いそうなのは……」

「ひっ!？」

その間に山中は溼を照準に定めており、溼はひいっと怯え声を上げて立ち上がる。

「ほぐら、逃げな〜い」

「逃げますよー!」

山中がニヤニヤと笑みを浮かべながら溼に襲い掛かると溼はそう言っつて部屋から逃げ出す、が山中もその後を追って部屋を出て行った。

「……パーティ、続けるか」

それを見た律はどこか諦めたようにそう言い、他のメンバーも黙っ

て頷いた。

「結構遅れちゃったわね……それにしても唯の家に来るの、随分久しぶりだわ……」

一方、ちょっと用事があったて来るのが遅れていた和は一人そう呟いてドアを開けた。

「お邪魔しま〜……」

彼女の言葉は途中で止まる。玄関前、結局捕まってしまった澪はここで山中に服を脱がされかけている。その邪悪な笑みを浮かべている山中と涙目になっている澪を見た和は思わず動きを止めてしまう。

「……ごめんなさい、間違えました」

「間違えてないよ！ 助けてー！！」

そしてそう言つて無慈悲にもドアを閉めようとする和に対し澪は必死でそう叫んだ。

「モウオヨメニイケナイ……」

「気を取り直して、プレゼント交換でもするか！」

場所は戻ってパーティ会場。澪が自分の身体を抱きしめ震えながら涙目でそう言っているのを見ながらこの空気を破るかのごとく勢いで律が宣言すると唯と紬がおーと言つ。すると孝明が気づいたよう

に山中に尋ねた。

「でも、先生は？」

「大丈夫、ちゃんと持ってきたわ」

「流石、準備いいですね」

孝明の言葉に山中がそう言ってプレゼントらしくラッピングした箱を取り出すと孝明はまた笑いながらそう言う。

「本当は今日彼氏に渡すはずのものだったんだけど……」

『……（お、重たい……）』

山中のどこかテンションの下がったような言葉に全員が思わず心中ハモリツツコミを入れた。

「それじゃあ始めるわよ！ 全員プレゼント出してー！！」

「ああ、公平になるよう簡易のくじ引きを作ってそれぞれの名前を書いた紙も入れておいた。順番に引いていってくれ」

「準備いいな、それじゃ私から……」

山中がやけくそになったか開き直ったかそう叫ぶと光矢がそう言うてティッシュの空き箱から作ったくじ引きの箱を取り出す。それに律はそう言っ箱に手を伸ばし、一枚紙を引く。そして全員一枚ずつ紙を引いていき、最後の一枚を光矢が取る。

「じゃあ、他の人に見せないよう中身を確認してくれ。自分のを引いていたらやり直しだ……大丈夫だな？」

光矢がそう尋ねると全員こくと頷き、律はよしと頷くと漣を指差した。

「よし、漣！ 誰のだ!？」

「え、あ、ムギの……」

そう言つて紙を見せるとそれには確かに琴吹紬の名前が書かれており、紬ははいと言つて漣にプレゼントを渡す。

「……クッキー？」

「はい、いつも買っているお店から取り寄せたんです。手を抜いてしまつて申し訳ないですが……」

「……み、漣、これ、値段……」

「なっ……」

(な、なんだ？ いくらなんだ?)

漣が箱を開けてみると中身はクッキーセット、それに紬がどこかすまなそうに微笑みながら言つと律が気づいたように言い、それを聞いて値段を見た漣も絶句する。それを見た光矢が心中で呟いていると律がごほん咳をして孝明を指差した。

「よ、よーっし次、孝明!」

「えっと、真由ちゃんだね」

「はい、どうぞ」

律がそう言うと孝明は若宮真由と書かれた紙を見せ、真由は自分のプレゼントを渡す。それを開けると孝明は少し黙った。

「……ダンベル……うん、まあ真由ちゃんらしいよ」

「らしいの!?!」

「真由は昔から剣道やってて、部屋には女の子らしいものより筋トレセットの方が多い有様だ。小学校の時なんて友達がよく俺の部屋と勘違いしてた」

「うるさいなあ、好きだからいいでしょ」

孝明はプレゼントであるダンベルを見て少し黙った後頷いてそう言い、それに漣が驚いたようにツッコむと光矢が説明、それを聞いた真由は頬を膨らませながらそう言った。それを聞いた全員が苦笑をするとプレゼント交換会が進んでいき、次に律は山中を指した。

「じゃあさわちゃん!」

「漣ちゃんね」

「え!?!」

「はいはい、漣、とつとと渡せ!」



山中がそう言っただけに見せた紙には秋山澗と書かれており、それを聞いた澗が驚いたように硬直すると律は勝手に澗のプレゼントを山中に渡す。

「さ、何が入ってるのかしら？」

「せ、先生！ それは！！！」

山中がそう言っただけで箱を開けようとし、澗がそれを阻止しようとして手を伸ばすが山中が箱を開ける方が明らかに速かった。

「ほがつ！？？」

次の瞬間箱の中から出てきたバネつきの人形が山中の眉間を直撃する。そう、律への仕返しでもしようとしていたのか澗のプレゼントはビックリ箱、澗はさーっと顔色を青くしていき、他のメンバーも誰一人声を発しようとしなかった。すると山中の肩が妙に上下する。

「クツクツクツク……あーっはっはっは！！ 最高のクリスマスだわー！！！！！」

「うわあー！！ 先生が壊れたあー！！！！！」

ショックのあまりか山中が壊れ、澗が悲痛な叫び声を上げる。そしてまたプレゼント交換会が続いていき、最後に律は唯を指す。

「そいじゃ最後に唯！」

「残ってるのは光矢のだね」

「でも、若宮さんプレゼントは？」

律の言葉に孝明が続けると紬が首を傾げる。光矢はプレゼントの箱を持っておらず、律が忘れたのかと尋ねると光矢は立ち上がった口を開いた。

「まあ、ちょっと待っていてくれ。いや、唯でよかった……」

光矢はそう呟きながら部屋を出て行き、壊れた山中と彼女を押さええている澁を除いた全員が首を傾げる。そして数分後光矢はたくさん  
の大小の箱を持って戻ってきた。

「ほい、唯。俺からのプレゼントだ」

「……わ！ ケーキにクッキー、お菓子がたくさん！ めいぐるみもある!？」

「全部俺のお手製だ。いやー流石に全部作りあげるのは疲れた……唯や憂ならここが家だし真由も隣だから楽でいいが他の奴に当たったら持ち帰りどうしようか心配してたぜ」

光矢がそう言って箱を置くと唯はその箱を開けていく。その中にはケーキやクッキー等お菓子がたくさん入っており、また別の箱にはサンタ服を着た熊のぬいぐるみもある。それに唯が目を輝かせると光矢は微笑んでそう言い、ふうと安心したような息を吐いた。

「すっごく嬉しい、ありがとー光ちゃん!!」

「だわぁ抱きつくな唯！ それと光ちゃん言うな!!」

すると唯が嬉しそうに微笑んで光矢に真正面から抱きつき、それに光矢は顔を赤くして叫びなんとか唯を振りほどこうとするが唯はしっかり抱きついて身体もすっかり密着しており離れそうにない。光矢は顔を赤くしてうくと唸っており、律や孝明はニヤニヤと笑みを浮かべていた。

そんな感じで彼らの聖なる夜は更けていく。

第十一話 軽音部メンバーと仲間達でクリスマス会 in 平沢家！（後書き）

今回はクリスマス。次にお正月やらをやって一年目が終了か、早いもんですなあ……。まだ光矢と唯の間に恋愛フラグらしいフラグも立っていないのに一年目終了、本当に高校生活の間でくつつくのかなこの二人……。本格的に恋愛用オリジナルストーリーも組み込んでいくか？……。ま、それでは。

## 第十二話 謹賀新年。軽音部メンバーで初詣

一月四日、丁度平沢家でのクリスマスパーティーから十日経ったその日、光矢は部屋で暇潰しにゲームをしていたが突然携帯が鳴り始め、光矢はゲームを一時停止させると携帯を取った。

「もしもし？」

「おーっす光矢、あけおめ〜」

「田井中か。謹賀新年」

「なんだよ新年から堅苦しいな〜」

「冗談だ冗談。で、何か用か？」

電話の相手は律、彼女が新年の挨拶をすると光矢もどことなくふざけた様子で謹賀新年と返し、それを聞いた律がそう言つと光矢は電話越しでは見えないだろうが笑みを浮かべながら返して用件を尋ねる。それに律がおうと頷いた。

「今日皆で初詣に行こうつて昨日電話しといたんだけどお前と孝明にかけるの忘れててさ〜。来れる？」

「別にいいぜ」

「うっし。んじゃ11時に神社の入り口でな〜」

「おっ」

律の電話内容は初詣の誘い、特に断る理由もないのでそれを了承すると律は時間と場所を言い光矢が了解の意思を伝えると律はんじやな〜と言つて電話を切った。

「11時か……まあ、まだ大丈夫だろ」

光矢はそう呟くとゲームの一時停止を解除し、続きを始めた。そしてゲームのきりがいいところでセーブをして電源を切ると時計を見える。それは大体10時半ぐらいを指しており、光矢は部屋にかけているジャンパーを取り着ると昨日暇潰しに作つて取つておいたクツキーを入れた袋を持ち、玄関に向かう。

「ちよつと出てくるな〜」

「うん、行つてらっしゃい」

出て行きざまにそう言つと真由がそう返し、光矢は家を出ると隣である平沢家に行きインターフォンを鳴らす。それから少しするとドアが開き、憂が顔を出す。

「唯の迎えに来たぞ」

「あ、初詣ですよね？ お姉ちゃん、こたつから出てこなくて……」

「だろうと思つた……唯姉えー！ クツキー持ってきたぞー！」

光矢の言葉に憂が了解しているようにそう言い、どこか呆れたように続けると光矢もまたため息をついて答え、家の中に向けて声を出す。その直後どたどたという足音が聞こえてきて玄関にパジャ

マ姿の唯がやってくる。

「光ちゃんのクッキー！」

「よし、初詣行くぞ。とつとと着替えて来い、着替えたらこれやるぞー」

「ラジャーー！」

唯は光矢の持っているクッキーを見て目を輝かせ、光矢がそう言う  
と唯はすぐにそう言っただけで自分の部屋に戻っていく。

「効果抜群ですね……」

「おう……」

それを見ながら憂が息をついてそう言う。光矢もため息をつきながら返す。そして唯が私服に着替えて玄関にやってくると光矢は約束通りクッキーを唯にあげ、唯はわーいと言いながらクッキーを取り出してもう食べ始めた。

「じゃ、行ってくるね」

「行ってらっしゃい」

唯が上機嫌の様子でそう言う。憂もにこっと微笑みながら返し、光矢も軽く手を振って家を出て行く。それから二人が神社にやってくると既に残る四人は揃っている、しかし律、紬、孝明が私服なのに対し、透だけは晴れ着を着ていた。それに光矢と唯は思わず詰まってしまう。

「……し、新年から気合入ってるね？」

「いや！ 違うんだ！！」

ようやく唯が澁にそう言うのと彼女は両手を前に出してそれを否定し、ううっと言って彼らから目を逸らして続けた。

「昨日律が晴れ着着てくるのかって尋ねてきたから、てっきり着ていくのかと……」

「私は着てくんのかって聞いたただけだぜ？」

「……律ー！！！」

「今年も澁ちゃんのポジションは変わらないみたいだね」

澁の言葉に律はにやにや顔で返し、澁はガーンとばかりに口を開いた後怒ったように叫び、それを見た孝明は笑いながらそう言う。と澁が神社とは反対方向に歩き出した。

「着替えに帰る」

「まーまーまー」

着替えに帰ると言い出した澁の肩を律が掴む、すると唯が口到人差し指をやりながら口を開いた。

「そのままでもいいじゃん、可愛いよ？」



「そ、そう?」

「そうだよ」

唯の言葉に澁が照れたようなでもどこか嬉しそうな表情で聞くと唯も笑顔でそう言って澁の両手を自分の両手で掴んだ。

「新年そうそう、いいもの見せてもらいました」

「お前も相変わらずだな……」

それを見た紬はほうと息を吐いて頬を染めながら言い、それを聞いた律もどこか乾いた笑みでそう返した。それを見ながら孝明が口を開く。

「でも、ムギちゃんってなんかこういう日は晴れ着とか正装とかしてそんな雰囲気あるんだけどなあ」

「あ、私も着てこようと思ったんだけど……三が日中ずっと晴れ着着てたから、普段着着るのこれが今年初めてなの」

「……ご苦労様です」「」「」

孝明の言葉に紬も笑みを浮かべながらそう言った後苦笑いをしながら続ける。それを聞いた全員が思わず彼女に頭を下げてそう唱和していた。それから境内の方に歩いていきながらふと紬が唯に尋ねる。

「唯ちゃんはどんなお正月だったの?」

「え、私?」

「どうせ一日中こたつの中で過ごしてたんだろ？」

「光矢、いくらなんでもそれは……」

「光ちゃんどうして知ってるの!? ま、まさか覗き!？」

「光ちゃん言うな、つか毎年そうだろうが……そこ! わざとらしくひそひそ話するな!!」

紬の言葉に唯が首を傾げると光矢が呆れたようにそう返す。それに澁が苦笑すると唯は凶星を突かれたとばかりに声を上げ、それを聞いた光矢は新年最初の光ちゃん言うなのツッコミを入れた後そう続け、わざとらしくひそひそ話を始めた孝明と律を指差して声を荒げた。

《元旦》

「明けましておめでとございます」

唯はコタツの中に入ってぬくぬくと幸せそうな表情をしている。たまたまつけていたテレビのアナウンサーが新年の挨拶をしていた。

「お姉ちゃん、おせちだよ」

すると憂がおせちを入れた重箱を持ってきた。

《一月二日》

唯はコタツの中に入ってぬくぬくと幸せそうな表情をしている。

「おもち何個食べる？」

すると憂がお雑煮を作りながらそう尋ねてきた。

《一月三日》

唯はコタツの中に入ってぬくぬくと幸せそうな表情をしている。その向かいでは憂が蜜柑の皮を剥いていた。

「はい、蜜柑剥けたよ」

そして蜜柑の皮を剥き終わるとそれを唯に渡す。

「三が日はこんな感じでした」

「憂ちゃんくれ」

「お前はお婆ちゃんか」

唯が自分の三が日を回想して説明すると律と漣がツッコミを入れる。それから律が続けた。

「唯、この正月で太ったんじゃないか？」

「なんで？」

「なんでって、そんなに食っちゃ寝してたら……」

律の問いに唯が聞き返すと律は呆れたように続ける。それに唯はあと頷いた。

「私いくら食べても体重増えないんだ」

「そんなわけないだろー!!!!」

「ムギちゃんまで!？」

「残念だが、事実だったりする。実際俺の作った菓子をどれだけ食っても太らないからな……」

唯の言葉に漣と紬が声を上げ、それに唯が驚いたように叫ぶと光矢が目を瞑ってやけに冷静にそう言った。それから紬ははふうとため息をついた。

「新年はパーティがたくさんあるので……」

「食べ過ぎちゃったんだ……」

「いいなーパーティー」

紬の言葉に孝明が苦笑を漏らすと律がそう続け、唯は漣を見ながら首を傾げた。

「漣ちゃんもお正月食べ過ぎちゃったの?」

「私は特に何も……」

「体質じゃね?」

唯の問いに漣はそう返すと律がにやにやと笑いながらそう言い、その瞬間パァンと音を響かせて漣の袖ピンタが律の顔面に決まった。

それから澪は紬を手招きする。

「ところで、ムギ……何キロ太ったの？」

「……キロです」

「私は……キロ……」

澪の問いに紬は体重のところはさらに声を潜めて言い、澪も同じように体重のところは声を潜めて返す。すると悲しくなってきたのかうとうと言って泣き始めた。

「唯……とりあえず謝ってこい」

それを見た光矢は横で困った顔をしている唯に向けてため息交じりでそう言った。

それから気を取り直して一行は境内へとやってくると律はおみくじのところにいる相手に気づく。

「あれ、さわちゃんじゃね？」

「ほんとだ」

律の言葉に澪が返す。そこに立っているのは山中、彼女はおみくじを引く前にお祈りをしているらしいがその時間が長く、その後わくわくしながらおみくじを引くがその内容を見るとチツと舌打ち、またおみくじの箱に手を伸ばした。

「あ、引きなおした」

「行くぞ」

唯がそう言うと光矢はすたすたと賽銭箱の方に歩いていき、他のメンバーも後を追う。そして全員賽銭箱に10円を投げ入れてパンパンと二拍し一礼してお願い事を祈る。それから律が口を開いた。

「皆、何をお願いしたの？」

「私は家内安全を」

「体重、減りますように……」

「美味しいものたくさん食べられますように！」

「面白いことがもつと起きますように」

「唯が抱きついてこなくなりますように」

「孝明は別にいいけど皆軽音部のこと祈ろうぜ……というか光矢、それは唯に言おう」

「光ちゃん私のスキンシップに飽きたの！？ 私に飽きちゃったの！？」

「恥じらい持てって言いたいんだ！ それと誤解されるような事言っちな光ちゃん言っちな！！」

律の問いにほんわかと微笑みながら言う紬にはそぼそと答える澪、ガツポーズのようなものを取って力強く言う唯、にこにここと微笑みながら言う孝明、ため息混じりに呟く光矢。すると律は苦笑を浮かべて返し、さらに光矢に言う唯ががーんというような勢いで言い、それに光矢がツッコミを返す。それからしょうがないため参拝やり直し、澪はなんでと呟いていた。

「私は部員増えますようにってお願いしたぜ」

「同じくだ」

「演奏が上手くなりますようにってお願いした」

「私もです」

「一応テニス上手くなりますようにってお願いしたよ」

律が言うと光矢もこくと頷き、次に漣が言うと紬が頷き、孝明もそう言うと光矢が唯を見た。

「唯は？」

「ムギちゃんの持つてくるケーキをもっとたくさん食べられますようにはぐっ」

その言葉の直後唯の頭に光矢の拳骨が突き刺さり、唯は三回目の参拜でギターが上手くなりますようにとお願いする。それを光矢が腕組みしながら見張り、漣と紬は苦笑しながらそれを眺めていた。すると律がおーいと皆を呼ぶ。

「皆の分のおみくじ引いてきたぜ」

「なんで勝手に引いてくるんだよ!？」

律が全員分のおみくじを引いてきており、漣がツッコミを入れるがしょうがないと諦めのため息をついて律の提示するおみくじを一枚ずつ引いていく。そして漣が最初におみくじを開く。

「あ、大吉だ」

「私もです」

「俺も」

「私もだ」

「あ、僕も」

溲に続いて紬、光矢、唯、孝明も自分が大吉と示す。すると律は一人固まっております、孝明が声をかける。

「どうしたの、りっちゃん？」

「……凶」

「……」

まさかの一人だけ凶、それに五人は何も言えなくなってしまう、律はゆっくりと溲に歩き寄った。

「返せ！……！」

「ええい見苦しい……！」

「あはは……で、光矢と唯ちゃんって内容何書いてる？」

「ん？……」



「えーっと……」

律がそう言っつて溲に掴みかかり溲がそう叫んでいるのを見て苦笑しながら孝明は二人におみくじの内容を尋ねる。それに二人が内容を見ると後ろから覗き込んだ紬があらと声を出した。

「二人とも、全く同じこと書いてませんか？」

「……え!?」「……」

紬の言葉を聞いた瞬間律と溲はおみくじ争奪戦を止め、孝明も二人のおみくじを覗き込み光矢と唯も互いのおみくじを確認する。それには確かに一言一句全く同じことが書かれていた。それに全員黙り込んでしまい、光矢がごほん咳をして空気を戻す。

「ぐ、偶然だ偶然。ほら、結びに行くぞ」

「おう！　つてあ、そうだ！　溲返せ!!」

「だから見苦しいつてば！　諦める!!」

「とほー……」

光矢がそう言っつと律は頷くが直後思い出したように溲に再度掴みかかり、溲はそれを払いのける。律は涙目でとほーと咳いて歩き出した。そして一行はおみくじを結びに行くがその一角にやけにごちやごちやと結ばれてるところがある。

「やけに結ばれてるな」

漣がそう呟いてふとその先を見ると、そこには現在進行形でおみくじを結んでいる山中の姿があった。

「……どんだけ引いてるんだよ!?」「」

「うわーびつくりしたー!?」

思わず律、漣、光矢がトリプルハモリツッコミを入れてしまい、それを聞いた山中はびくりとなってそう叫び一行の方を向いた。それから軽音部+孝明もおみくじを結んで帰路につく。

「それじゃね〜」

帰る道中で次々と別れていく軽音部+孝明。そして最後の孝明も別れていくと光矢と唯だけが残り、二人が無言のまま歩いているとふと唯が口を開いた。

「ね、そういえば私達が引いたおみくじが全部同じだったなんて凄いやね!?!」

「偶然だろ?」

「偶然でも凄いよお! これってあれかなあ? 二人ともこれから一年ずうっと一緒に過ごせますよって神様からの贈り物かな? これがずうっと続いて一生一緒だったらいいね〜」

唯の言葉に光矢は冷静に返すが唯は対称的に嬉しそうに跳ね回りながらそう言う。それを聞いた光矢はびくんとまって思わず動きを止めてしまった。

「？ 光ちゃん？ いたっ」

「光ちゃん言うな。んでそんな偶然をいちいち言ってたらきりないぞ」

動きを止めてしまった光矢を見た唯が不思議そうに彼の顔を覗き込もうとすると突然光矢が唯にデコピンをし、唯がおでこを押さええていると光矢はそう言って歩みを速めつつ歩き出した。

「わ、待ってよ光ちゃん！」

唯も慌ててその後を追って走り出す。しかし光矢は不自然じゃない程度にスピードを速め追いつかれないようにする。その顔は赤く染まっていた。

（一生、一緒って、俺は何を考えてんだ！？）

そして心中で驚いたようにそう自分に問いながら歩いていく。そのまま二人は隣同士の二人の家につき、光矢が黙って家の中に入っていくのを唯は首を傾げながら見送った後自分も家の中に入っていた。

第十二話 謹賀新年。軽音部メンバーで初詣（後書き）

さて今回はお正月の初詣、次回はあのイベントや期末か……めんどいからスルーして進級させようかな？……ま、そういうわけにもいかないかもしれませんし頑張ります。

そろそろ学校始まりますから更新速度は少し遅くなるかもしれませんが、これからもよろしく願います。それでは。

### 第十三話 平沢唯、初恋？

ここは桜ヶ丘高校グラウンド、現在は四時間目の体育の授業中。一年二組と一年三組の合同で今日は男女に分かれてサッカーが行われている。そして少し男子側に視点を向けてみよう。

「光矢！」

相手側 めんどくさいからとクラスで敵味方を分けたため一年二組メンバーに立ち塞がられた孝明はくつと唸った後素早く光矢にボールを浮かせてパスし、光矢はそれをトラップすると一気にドリブルで相手ゴールに向かって行った。

「いつけえっ!!！」

そして相手ゴール目掛けて蹴り込まれたボールはゴールキーパーに反応させる暇も与えないほどの速さでシュートされ、ボールはゴールの網にかかった後でんてんとゴール内をバウンドしながら転がる。

「うっし!!！」

それを見た光矢と孝明はハイタッチを行った。その頃こちらは女子側 こっちは女子が組みたい人同士で組んでいくと偶然同じ数に分かれた の方では律は試合に参加せずに彼らのサッカー見学を行っている。

「ひゃく、これであの二人何点入れたんだ?.....うちのクラス一点取ったかも怪しいのに.....」

「そりゃ〜秋草君は中学時代サッカー部だったもん。光ちゃんだった昔からスポーツはなんでもこなせたんだよ」

「へ〜そりゃすげえ」

律の言葉に隣で男子サッカーを見学している唯がそう返していると律はふむふむと頷く。するとその二人の頭に何かゴツンとぶつけられた。

「律、唯、サボるな」

透だ。彼女の言葉に律はへ〜いと言って立ち上がり、唯と共に相手の持っているボールを奪いに行く。

「いっくぞー唯ー！」

「おー！」

律と唯のコンビは一気にボールを持っている相手に突進していく、そして律はボールを勢いで奪い取るうとするが相手もさるもの、なかなか奪わせようとしない。するとその背後から唯が襲いかかった。

「てやー！」

唯はそう叫んで律と挟み撃ちにするが、その次の瞬間唯はその相手の足に自分の足を引っ掛けてしまい、走っている勢いで思いつきりずっこけてしまった。

「ふむむっ！〜？」

「唯！ 大丈夫!?!」

唯は思いつきりうつ伏せに倒れながら間抜けな声を上げ、その相手もこけそうになるのを踏みとどまりながら唯を見、漣と律が急いで走り寄る。それに唯は地面の上に座りなおしながらへへと笑った。

「大丈夫大丈夫、ごめんね」

「驚いたー。でも怪我がないみたいで何よりだよ」

「よし、試合再開だ!」

唯の言葉に漣はほつと安堵の息を吐いて返すと律も笑みを浮かべながらそう言い、試合が再開すると唯も立ち上がる。

「?」

その時右足に一瞬何か違和感が走ったが、唯は気のせいかなと首を傾げるとボールを追いかけた。

それから時間が過ぎて放課後、光矢と唯は部活に向かおうかと席を立つがその直後律と漣が教室にやってきて律が二人に話しかけた。

「二人とも言うの忘れてた! ごめん、今日私達部活休む!」

「どっしたの?」

「うちの弟が風邪こじらせててさ、すぐに帰って看病しなきゃいけないんだ」

「私も、何故か連れて行かれることになって……」

「そりゃ仕方ねえな。お大事に」

「おう」

「ああ」

律がぱんつと両手を合わせながらそう言うと唯が首を傾げて尋ね、律がそう言つと澁も呆れたようにでもどこか心配しているような様子で続ける。それに光矢は頷いてそう返し、二人も頷くと教室を出て行った。

「しょうがない、琴吹と三人で練習するか」

「そうだね。お菓子二人の分も食べられるな」

光矢の言葉に唯はそう言つてルンルンと鼻歌を歌い、光矢はじとりとした目を向ける。そして二人が教室を出ると琴吹が話しかけてきた。

「あ、若宮さん、唯ちゃん……あの、今日私部活休んでもいいでしょうか？」

「ムギちゃんまで？ どうしたの？」

「今日はちょっと、どうしても抜けられない用事があった……え？ 私まで？」

「田井中の弟が風邪だそうでな、田井中と秋山も部活休んだんだ……こりゃ今日は軽音部休みにした方が手っ取り早いかな。先生には俺



から言っとく」

「はい、ありがとうございます。では……」

紬の部活欠席を聞いた唯が驚いたように言つと紬はすまなそうに説明し、その後気づいたように尋ね返すと光矢が説明、それからの彼の言葉に紬はいと頷いて歩き去っていく。それから光矢が職員室に近い道を見ながら口を開く。

「じゃあ、俺は山中先生に今日は軽音部休みを伝えてくるから唯は先に玄関行つてろ」

「うん」

光矢がそう言つて職員室に向かうと唯も玄関に行き、自分の靴箱に手を伸ばすとその時右足首にズキンと鈍い痛みが走つたのを感じ、唯は顔をしかめた。

「あいたつ……うう、サッカーの時捻つたのかな？……」

唯は右足を見ながらそう呟く、と唯の携帯が突然鳴り出し唯は電話に出た。

「もしもし？ あ、憂」

「お姉ちゃん？ ごめんね、今日純ちゃんと勉強会する事になって帰りが遅くなるから。晩御飯……」

「大丈夫だよ、自分でなんとかするから心配しないで。いざとなつたら光ちゃんいるし！」

「そ、そうだね……じゃね」

「うん。勉強頑張ってるね」

電話の相手は憂、彼女は友達と勉強会をする事になったと唯に伝え、晩御飯を心配するような声を出す。唯はそう返し、それに憂が苦笑しながらのような声を出すと唯もそう返して電話を切った。

「憂か？」

「ひゃわあ！？……びっくりしたあ、そんなに暗い声で話しかけないですよ」

「山中先生がお茶会が出来ないって文句ぶーぶーだったんだよ。説き伏せるのに苦労したんだぞ……」

電話を切った直後背後から暗い声で話しかけられたのに唯は驚いて振り返るとそこに立っているのは光矢、それに唯が文句を言うと光矢はため息混じりにそう返す。それに唯はあははと苦笑した。

「さ、帰るぞ」

「あ、うん……」

光矢の言葉に唯はこくと頷いた後右足首に目をやるが光矢はそれに気づかず歩き出し、唯も急いでその後を追って歩き出した。それから二人は街を歩いていくが光矢が歩いていく後ろを唯が歩いていくまでは普段のスタイルなのだがその動きは明らかに遅く、光矢は普段のペースより遅いスピードで歩いているのに唯はどんどん遅

れていく。それに光矢は足を止めて振り返り不思議そうに尋ねた。

「唯姉え？ どうしたんだ？」

「え？ う、ううん、なんでもないよ？ ほら、信号変わったちゃう！」

光矢の言葉に唯はあははと笑いながらそう言っただけで点滅し出した歩行者用信号を指差しながら続け、光矢もそつだなど言っただけで歩き出すと唯もその後を追って走り出す。そして横断歩道の上で右足を踏み込んだ瞬間だった。

「づつ！？」

右足に激痛が走り思わず唯はその場にうずくまる。その時には信号が変わっており、車は動き出していた。

「！」

それに気づいた光矢はすぐに身体を反転、地面を蹴って唯に向けて飛び込んだ。その次の瞬間車は唯がいた場所を通り過ぎ、光矢はぎりぎり唯を捕まえ歩道まで戻っていた。

「ばっかやる唯姉え！ 何を……」

光矢はすぐさま唯に向けて怒鳴りつけるがその直後唯の右足の異常を察知、光矢は唯の右足に手をやった。

「唯姉え、悪い」

「え？ わ、ちょっと!？」

光矢はそう唯に謝罪の言葉を入れた直後彼女の靴を脱がせて靴下も脱がせる。

「……なんで黙ってた？」

そして光矢は目を研ぎ澄ませながら唯に尋ねる。唯の足首は腫れて青紫色にまでなっている状態だ。

「い、痛くなかったから？」

「痛くないわけではないだろうが!!! お前、少し間違ってたら車に轢かれてたんだぞ!!!……」

唯が引きつった笑みで言う。光矢はすぐさま怒鳴り、その後左手で自分の顔を覆う。

「こ、光ちゃん？」

「情けねえ、久しぶりに早く帰れるし何かお菓子でも作ってお前に差し入れてやるうかとかギターの特別練習メニューでも組んでやるうかと色々考えて今お前が怪我してるのに気づかなかったなんて…… 本当に、情けねえ……」

「こ、光ちゃんは悪くないよ！ 元々私が言わなかったのが悪いんだし……」

光矢は弱々しい声でそう呟いており、それを聞いた唯が慌ててそう返すと光矢はふっと弱い笑顔を見せた。

「ありがとよ、唯姉え……さて」

弱い笑顔でそう言った後光矢は背負っていたカバンを下ろして彼女に背を向ける、それに唯が不思議そうに首を傾げると光矢は顔だけを振り返らせる。

「何やってんだ？ 乗れ」

「え!？」

「足怪我してる奴を歩かせられるかよ。乗れ」

光矢の言葉に唯が驚いたように声を上げると光矢は笑みを浮かべてそう続け、唯は恐る恐る光矢におぶさる、と光矢はあっさり唯を担いでカバンを持ち立ち上がった。

「うわ、昔はすぐ潰れてたのに……」

「いつの話だいつの。ほら、帰るぞ」

唯が驚いたように呟いていると光矢は苦笑しながらそう言って信号が青になっているのを確認してから横断歩道を渡り出す、それを見ながら唯は光矢に身体を預けておぶさっていた。

光ちゃんとは生まれた頃から一緒だった、そして昔から私は光ちゃんにおぶさってはその重みに耐え切れずすぐに潰れていた。それなのに今彼は私を本当におぶっているのか疑うくらいに軽い足取りで歩いている。それに光ちゃんの背中はとて大きくなっている、今までも後ろから抱きついてたが大体失敗してたし抱きつけてもすぐ

引き剥がされてたから気づかなかった。大きくって安心する、光ちやんの背中……。

「おい、唯姉え？」

「ふえっ!？」

「家、ついたぞ」

唯は昔の光矢を思い出しながら今の光矢の背中に安心しきって身体を預けていたが突然光矢に声をかけられると驚いたように声を上げ、光矢が続ける言葉を聞いてようやく自分の家に辿り着いていた事に気づく。

「包帯とか巻いといた方がいいだろ。とりあえず靴は適当でいいから脱いどけ、後で俺が揃えとくから」

「う、うん……」

光矢の言葉に唯は頷いて靴を脱ぎ、彼女は居間に下ろされる。それから光矢は場所を知っているらしい様子で彼女の家の救急箱を持ってくると薬と包帯を取り出した。

「ちょっと動くなよ」

「う、うん……」

包帯を巻きながらの光矢の言葉に唯は頷くしか出来なかった。動かないではなく動けない、何故か唯は光矢の指示を聞くまでもなく全く動く事が出来なかった。そして包帯を巻き終えると光矢はよしと

頷く。

「憂は？ おじさんとおばさんは確か仲良く一緒に出張中だったろうが」

「え、えと、友達と勉強会って……」

「じゃあ無理に呼び戻すのも悪いな……とりあえずメールしといて、唯姉えと憂の分晩飯作って俺は一旦帰る。もし憂がないまま痛みとかが我慢できなくなったら遠慮せずすぐに電話かけてこい。いいな？」

「あ、うん……」

光矢の言葉を聞いた唯は憂に電話で言われた事を返し、それを聞いた光矢はふむと呟いてそう言い、台所に向かいながらそう念を押す。それに唯がこくと頷くと光矢はよしと頷いて料理を作り出した。

(……)

唯は台所で料理を作っている光矢をただボーっと見ていた、がしばらくするとふと顔を下ろす。

(な、なんだろ？……)

なんだかよく分からないけど、今まで光ちゃんにやってた事がよく分かんない、恥ずかしくなってくる……。

「唯姉え」

「ひゃわあ!？」

「そんなに驚かれたら傷つくぞ……簡単に仕込みはしといたし憂も別にいいのにすぐ帰るってメールが返ってきた。俺は帰るがもし憂がない間や夜寝てた時に痛み出して我慢できなくなったら遠慮せず電話してこいよ?」

「あう、う……うん……」

「? じゃあ、俺は一旦帰るからな」

光矢の説明に唯は彼に顔を向けないまま曖昧に頷き、それに光矢は首を傾げるがそう言ってカバンを持つと自分の家に帰っていく。

(……なんだろ、なんだか……胸がドキドキする……)

それを見送った後唯は自分の心臓がドキドキと高鳴り、まるで身体中の血液が頭に回っていつているかのように顔が真っ赤になり熱くなっていくのを訳も分からないままただ感じていた。



第十三話 平沢唯、初恋？（後書き）

すらすらと書けました今回はオリジナル編、唯 光矢への恋愛フラグを立てさせてみました。やっぱ光矢は唯を守ろうとか世話しようというスタンスが書かせやすいです。

さて、もう一個くらい一年生時の話を書いてから彼らを進級させようかな？ま、それでは。もしも感想があつたなら遠慮なくお願いします。

## 第十四話 見学大歓迎？軽音部喫茶店。

桜ヶ丘高校、ここにたくさん番号が書かれている巨大な掲示板が張り出され、それを見上げていた者は誰かはやったーと歓声を上げ、誰かは落胆を起こす。今日は桜ヶ丘高校入試の結果発表、そして栗色の髪をポニーテールにしている少女は掲示板を見上げ、自分の手に持っている紙に書かれている番号と同じものが掲示板にも書かれているのを確認するとほおっと安堵の息をつく。

「憂、どうだった？」

「あ、真由。合格したよ、真由は？」

「もつちろん。純ちゃんも合格したって今おじさん達に連絡してる」

その憂の背後から黒髪を長く伸ばした少女 真由が話しかけ、それに憂は嬉しそうに頷きながら聞き返すと彼女もにこりと笑みを浮かべて返し、もう一人の友達 鈴木純も合格している事を伝える。それに憂はまた嬉しそうに微笑んだ。

それから数日後、憂達は入学前に部活見学へとやってくる。憂と純は軽音楽部の、真由は女子剣道部の見学だ。そして憂と純は軽音部の部室へとやってきた。中からはポロンポロンとアコースティックギターの優しい音が聞こえ、二人は練習中かなと思いつながらドアを開ける。

「いらっしやいませ」

「……」

「こちらへどうぞー」

そこにいたのはメイド服を着た唯の姿。それに二人が思わず言葉を失ってしまうが唯はそれに気づかず接客を進める。それに従って部屋に入ると律が声をかけた。

「おー憂ちゃんとその友達、よく来たねー……光矢の妹、えー、真由ちゃんは？」

「律さんに紬さんまで……真由は女子剣道部に入るそうなので……」

あの、ところで」

「た、す、け、てー！……！」

声をかけてきた律の横に紬が立つと憂は苦笑しながらそう言い、説明を続けた後なんでそんな格好をしているのか尋ねようとす。しかしそれを遮る勢いで悲鳴が聞こえ、憂はそつちを見る。そこには邪悪な笑みをした山中に部屋の奥へと涙目になりながら引張られていく澁の姿があった。

「今日は憂ちゃん達が見学に来るって聞いたから歓迎しようかと思つてー！」

「いや、あの……放置してていいんですか？」

律の言葉に憂は澁が連れ去られていった先を指差しながらそう尋ねる。それに律は何も返さず、憂は諦めるときよるきよると部室内を見回した。

「ところで、光矢さんは？」

「ああ、光矢なら接客は嫌だと駄々こねるからそこでBGMを演奏してるぜ」

「「これ生演奏!?!」」

憂の問いに律はそう言っている方向を指差す。そこには確かに学園祭で着ていた執事服に身を包み音楽室に置かれていたのかアコースティックギターを物静かに演奏している光矢の姿があった。それに憂と純が驚きの声を上げる、最初こそ練習中かと思っただが唯のメイド服を見た瞬間CDプレイヤーが何かで再生しているのかと心のどこかで思ってしまったがまさかの生演奏だった。

「さーさー、いいから座った座った!」

律がそう言って二人を席に押しつけていき、唯と紬はお茶とケーキの準備に向かう。そして紬がケーキをカットしていると唯が彼女に尋ねる。

「これを入れて持っていけばいいんだよね?」

「あ、もう少し蒸らしてから……」

「……」

唯の問いに紬がそう返しているのを憂は眺めており、紅茶をぶるぶると震えながら運んでくる唯を見ながら憂ははらはらとした様子を見せ、立ち上がると袖をまくった。

「私が用意するからお姉ちゃんは座ってて」

「そ、そうっ？」

「おい」

憂がそう言つと唯は苦笑いしながら席に座るがそれを律が呼びとめ、唯ははうっと言って立ち上がる。

「全く、客に用意させてどうすんだ!？」

「……やっぱ、俺も手伝おう。憂は座つててくれ」

律が唯に注意していると光矢は一曲弾き終えて立ち上がり、憂に座つてるよう促す。そして憂が座ると純が彼女に尋ねた。

「えっと、あの人は？」

「あの人は律さん」

「どうも、部長の律です」

純が律を指差しながら尋ねると憂が紹介し、律自身もえへんと胸を張つて名前を名乗る。その瞬間軽音部のドアがバァンと音をたてて開いた。

「ちょっと律!？ また体育館の使用許可届け出てないわよ!？」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そして和が怒つてるように言つと律は涙目になって手を合わせながらぺこぺこ頭を下げる。それを見ていると紬がケーキを運んでき

た。

「お待たせしてごめんね？」

「あ、はい。ありがとうございます……！ このケーキ美味しい」

紬が運んできたケーキを憂と純は食べ始め、憂がそう言うと純も夢中になってケーキに齧りつく。そして紬は騒いでいる律と澪を見ながら苦笑いを浮かべた。

「さわがしくってごめんね？」

（相変わらず、綺麗で素敵な人だな）

そう言う紬を見ながら憂はそう思う、紬もまた律と澪を見ながら頬に手を当て何かを考えている、その頬は桃色に染まっているような気がした。そしてついに捕まった澪も山中にメイド服に着替えさせられるが着替え部屋から全く出てこようとしない。

「ほら、そんなとこ隠れてないでこっち出てこいよー」

「ヤダ！……！」

律の呆れ気味の言葉を澪は全力で拒否、すると憂がフォローするように口を開く。

「澪さん、似合ってますよ？」

「ほえ？……本当に？」

(可愛い……)

憂の言葉を聞いた澪はすすと憂に近寄り、それを見た憂は心の中でそう思っていた。それからふと気づいたように口を開く。

「そういえば、その服どうしたの？」

「これ？ さわちゃん先生が用意してくれたんだよ」

憂の問いに唯は微笑みながらそう返し、それに山中は気づくとじっと憂を見る。そしてメイド服を一着取り出した。

「あなたも着てみる？」

「結構です」

「あら、そう……あ、せっかくだから演奏見てもらったら？」

「さわちゃんいいこと言うー!!」

山中の提案を憂は即答で却下し、それに山中は残念そうな表情を見せるがその次にはまともな提案をし、それに律は彼女をびしっと指差しながらそう言うつと続けて準備しろーと呼びかける。

「澪ちゃん、ストラップが服に引っ掛るー」

「う……」

「すそが邪魔……だーやりづらいつ！ 誰だメイド服なんて言ったのー!!」

しかし唯が困ったように言うと澪も同じようにストラップに四苦八苦し、律はすそが邪魔と呟いた後声をあげる。それに執事服だが特にギターをやるには問題ないらしい光矢と特にメイド服の影響が少ない紬は顔を見合わせて苦笑を浮かべ、唯達はジャージに着替え出した。そしてジャージに着替えた三人も準備を終えると演奏を始める。それを聞いた純は掌を握った。

（かつこいい！ かつこいいけど、ジャージ！）

そして憂と純は心中でそう呟いていた。

「新歓ライブも見に来てねー！」

それから時間が過ぎ、憂達が帰ろうと部室を出て行くと唯もそう言うって見送る。それに憂も手を振って返し、帰り道で純に尋ねた。

「…………ど、どうだった？ 軽音部…………」

「色々と凄かったね…………」

憂の問いに純も返答に困るといっような様子で返し、二人は黙り込む。

「あ、ケーキはすごく美味しかった！」

「そ、そうだね…………」

そして純が思い出したように言うと憂も苦笑を浮かべながらそう返



した。

それから時間が過ぎて夜、憂が食事が終わった後の食器を運んでいると本を読んでいる唯がふと憂に顔を向けた。

「お友達、軽音部のこと何か言ってた？」

「えーっと……す、すごいねーって」

唯の言葉に憂は少し困ったように黙った後そう返す、すると唯はパアツと顔を輝かせた。

「でしょー！？ 楽しいよ、軽音部！」

(そういえばお姉ちゃん、軽音部に入ってからイキイキしてるなあ……)

唯の言葉を聞いた憂はふふっと笑みを浮かべながら心中で呟く。

「憂も入ろうよ、ね？」

「か……考えとく」

しかしその次の唯の提案にはそう返すのが精一杯だった。

第十四話 見学大歓迎？軽音部喫茶店（後書き）

一応主人公であるはずの光矢が空気となつた彼らの一年生最後の話です。次回から彼らは二年生、そしてあずにゃん加入です。さて、あずにゃんはけいおん！お気に入りキャラの一人だし構成も練つてるし頑張つてとつと書き上げるか！それでは。

今回はちよつと短いですが、感想があればお待ちしております。それでは。

## 第十五話 二年生突入！新歓ライブと新入部員

季節は春、ここは桜ヶ丘高校、今日はこの高校の入学式だ。そして新入生である憂と真由は二人仲良く登校して一年生の教室に向かうと憂が友達の姿を見つけて声を出した。

「あ、純ちゃん」

「憂、真由、やほー」

「みてみて、制服ぶかぶかなの」

憂がそう言つとその相手 純もやほーと手を振って二人に歩き寄り、憂は自分のぶかぶかな制服を見せて笑いながら言い、それに純と真由はくすくすと笑う。それから憂がまた口を開いた。

「それで、結局純ちゃんはどの部活に入る事にしたの？」

「ん〜、まだ決めてないけど……とりあえず軽音部は止めとく。真由は？」

「私は女子剣道部に決めています。というより見学の時に本気の勧誘をされました……」

「また剣道部の先輩達を全員叩きのめしちゃったの？」

「……うん」

憂の問いに純がそう返すと憂は残念そうな表情をし、純が真由はど

うするのかと尋ねると真由はそう返し、彼女が言葉に詰まると憂がまさかと言わんばかりの表情で尋ね、それに真由は静かに頷く。

「……流石、小学校前から剣道続けてるだけあるね」

「い、いえ、まだまだ兄には敵いません……」

「そうなの!？」

「はい……たまに手合わせを頼んでいます、きちんとやった事な  
いはずなのに反応速度や剣の速さがもう異常で……」

それに純が唾然としたように言うと真由はぶんぶんと首を横に振り、  
それに純が驚いたように叫ぶと真由は静かに返す。それに憂は頷い  
た。

「光矢さん、中学校時代は色々な運動部から勧誘受けてて、でも全  
部断つてて助っ人レベルしかやってなかったのにそれ知らない他校  
からはエース扱い受けてたもんね……」

「兄の運動能力は天性のもので、絶対進む道間違えてますよ……  
まあ、人それぞれ行きたい道を行く事は良い事なので口出しはしま  
せんけど」

憂の言葉に真由は口を尖らせながら言う。それから三人は時間を見  
て教室へ向かうと教室内から話し声が聞こえてきた。

「へえ、それじゃ梓ちゃんは軽音部に入るんだ」

「うんっ!」

(わあ、ちっちゃくて可愛い子だなあ……)

クラスの女子の言葉に頷くのは小柄で黒い髪をツインテールにしている女の子、その姿を見た憂がそう思っていると純が苦笑交じりに呟く。

「軽音部に入りたい人、いるんだね……」

「あはは……」

純の言葉に憂が苦笑し、真由も肩をすくめる。とその女の子はピクンと反応し三人に歩き寄った。

「あ、あの、軽音部のこと何か知ってるんですか？」

「ああ、この二人の兄妹が軽音部なの」

「本当！？ パート何やってるんですか!？」

女の子の言葉に純が二人を指しながら言うと女の子は詰め寄る勢いで尋ねる。それに二人は顔を見合わせた。

「二人ともギターだよね？」

「確かお兄ちゃんがリズム、唯お姉ちゃんがリードって言った  
た」

「凄いつ!!!」

憂の言葉に真由がそう返すと女の子は声を上げ、三人はびくりとなる。

「私、この学校の去年の学園祭のライブの録音聴いたんだけど、リードギターの人凄く上手くて憧れてたんだ……きつとこの学校の軽音部って凄くレベル高いんだろっな」

（凄く美化されてるよお姉ちゃん!!!）

（ねえ、大丈夫だと思う？）

（真面目みたいですし、ボロが出たら退部されるかも……）

女の子はキラキラとしながら両手を合わせて握りながら言い、それを聞いた憂は慌てたように心中で叫び純と真由はひそひそと話し合う。

そんな事が一年生の方で行われているとは知らないこちらは二年生に進級した光矢達。彼らもクラス分けを調べていた。

「俺は2組か」

「私も2組だよ！ 一緒だね光ちゃ……」

「光ちゃん言うなそして離れ……あれ？ 抱きついてこないのか？」

光矢の言葉に唯がそう言うのと光矢はいつものツッコミを入れた後抱きついてくる唯をすぐ引き剥がせるように構えるがいつまで経っても唯は抱きついてこず、驚いたように光矢が言うのと唯は彼から目を逸らしながらうんと曖昧に頷いた。

「えと、その、光ちゃんに迷惑かなって……」

「まあ、突然抱きつかれて驚くのは確かだが……お前最近変じゃな

いか？　つか光ちゃん言うな」

「そ、そんな事ないよお！　あ、りっちゃんムギちゃん！」

唯の言葉に光矢は頷いて返すと首を傾げながら尋ねる。ここ最近朝迎えに行ったら寝坊していたのはいつもの事だがいつもなら遅くなくてごめんね〜と言って抱きついてくるのに最近近づいてきたのに気づかなかったぐらい静かだし登校途中もまるで借りてきた猫のように大人しい。しかし唯はぶんぶんと首を横に振って返すと律と袖を見つけて走っていく。それを光矢は不思議そうに首を傾げて眺めていた。

「ね、二人は新しいクラス何組だった？」

「2組だったよ」

「私も」

「本当に！？　私と光ちゃんも2組だったよ！！」

「あ、漣。漣はどうだった？」

唯の問いに律と袖がそう返すと唯は嬉しそうにそう言って袖に抱きつき、律は漣がやってくるかどうか尋ねる。それに彼女は沈んだ表情で口を開いた。

「……………1組……………」

「……………」

「な、なんだよ皆そんな目で見て……………」

澪の言葉に女子三人はなんと声をかければいいのかというように目で澪を見始め、澪はそう返す。そして律が澪の肩に手を置いた。

「寂しくなったらいつでも2組に遊びに来ていいんだよ?」

「私や小学生か」

律の言葉に澪はそうツッコミを入れ、律から離れて腕を組むと返すように言った。

「律こそ私とクラス離れて大丈夫か? もう私に宿題見せてもらえなくなるぞ?」

「へへーん、こっちにはムギがいるもんね」

「くっ……」

澪の言葉に律は袖を前に押し出しながら言い、それに澪はくっと思える。

「やれやれ……」

「やつほー光矢」

「よお孝明」

それを眺めながら光矢は呆れたような笑みを見せているとその背後から孝明が声をかけ、光矢がよおと返す。



「僕は1組だったよ。知り合いは澪ちゃんと和ちゃん、あとはテニス部が数人……テニス部の面々から逃げるのが辛くなるな……」

「部活行けや」

孝明の言葉に光矢はそうツツコミを入れ、それから一行は二組に分かれてそれぞれの教室に歩いていく。

そして視点を1組の方に向けてみよう、澪は一人ぼつーんと席にっいていたがその姿を見つけた和と孝明が彼女に声をかける。

「澪!」

「澪ちゃん」

「和、秋草君……」

二人が声をかけてくると澪はぼんやりと二人の名を言い、和はふうと微笑んだ。

「良かったー。唯ともクラス離れちゃったし、知ってる人がいるか不安だったの。秋草君もいるし、これから一年間よろし」

「よろしく!!!!」

和が言い終える前に澪は涙目で彼女の手を掴みそう返していた。

それから時間は過ぎて現在昼休みここは軽音部。ここに集合した面々は顔を見合わせてうんと頷き、律が声を上げる。

「それじゃあ、今から軽音部新入部員勧誘作戦を行う! 全員、覚悟はいいな!!」

「おー!!!!」

「とどのつまりがビラ配りだろうが、とっとと行かないと時間なくなるぞ」

「それもそうだな。よし漣、ビラは!？」

「作ってきてるよ」

律の言葉に唯と紬が右手を挙げながら返すと光矢が冷静にツッコミ、それに律は頷いて漣の方を見ると彼女はそう言っただけからたくさんのビラを取り出す。それを律が見るが首を傾げて呟いた。

「うーん……なんか普通だな」

「えっ!？」

律の言葉に漣はガンというようにショックを受けた表情を見せる。確かにビラに書かれているのは一緒にバンドやりませんかという文字と色んな楽器が周りに描かれ、シンプルで分かりやすいのだが悪く言えば地味という感じがする。すると漣の肩を何者かが叩いた。

「インパクトがなければ、つけるまでよ!！」

「……」

そう言う相手が山中である時点で光矢は嫌な予感しかしなかったのはもはや言っただけでもないだろう。

「……はあ」

そして場所は玄関前に移り、光矢はビラを持ちながらため息をつく。そして一つの方をちらりと見た。

「軽音部です」

「どうぞー」

そこにはコアラや猿、牛の着ぐるみを着た軽音部の面々がビラを配っている姿があった。山中のインパクトがなければつけるまで作戦はこれ、確かにインパクトはある、あるのだが……。

「引かれてるだろ……」

新入生達はざわざわとなっており、近づこうとしていない。光矢は着ぐるみを着ず少し離れたところでやっていてよかったと内心で呟いていた、一応自分には部活に興味があるらしい人達が時たまやってくる。

「あの、軽音部ですか？」

「ん？ ああ、これチラシだ。放課後には新入生対象の部活紹介でライブやるし、気に入ったらこれに書かれてる通り経験問わないから気軽に来てくれ。極端な話楽器を触ったことすらない素人でも歓迎するぜ」

「はいっ！」

突然声をかけられ光矢はその相手　黒い髪をツインテールにしている小柄な少女　にそう言っってビラを渡し、説明すると彼女は笑顔でそう言っくと友達に呼ばれたらしく走っていく。

「大変だね」

「ん、よお孝明……と、そっちは？」

「テニス部の原さん。勧誘ぐらいは真面目にやるようにつて見張られてるんだ」

「原麗華と申します」

「こいつはご丁寧にも。若宮光矢だ」

次に声をかけてきた相手 孝明に光矢はそう返した後彼の横にいるメガネをかけた礼儀正しそうな少女を見て続けると孝明は紹介、少女 原も名乗り、光矢もご丁寧にと言って自分の名前を名乗った。すると孝明が不思議そうに首を傾げているのに気づく。

「どっつした？」

「いや、さつき光矢からビラ貰った女の子……どっかで見たような気がするんだけどなあ……」

「秋草さん、私語をしている暇があるなら普段理由なくサボっている分今回は真面目に働いてください」

「あーはいはい。それじゃまたね」

「おう」

孝明が首を傾げながらそう呟いていると原はそう言って孝明を引

張り、彼の言葉に光矢は頷いてそう返した。そして唯達の方に視線を向けるとコアラの着ぐるみを着ている唯が憂に悲鳴を上げて逃げられている光景を目撃する。

「ははは……」

それに光矢は苦笑を浮かべるしか出来なかった。

そして昼休みも終わる時間になったので一行は軽音部部室へと戻ってくる。

「はあ……あんまりビラ受け取ってもらえなかったね」

唯は残念そうにため息をつく、そのテンションの低さは気づかれなかったとはいえ憂に逃げられてしまったのも一因にあるのは恐らく間違いないだろう。

「こうなったら新歓ライブでアピールするしかないな！」

「はい！」

律の力強い言葉に絢が頷いて返す、と律は自分の背後から山中がメイド服を持って視線を投げかけているのに気がついた。

「さーみんな、頑張ろうぜ!!!」

そして山中が何か言う前に気合を入れるようにそう言った、と思うと思いついたように溼に尋ねる。

「そつえば、今日四曲やるけど曲順どうする？」

「あ、紙に書いておいたからマイクやスピーカーに貼っておいて」

「ありがとう」

律の問いに漑はそう言って人数分のメモ用紙を取り出し渡していき、唯はありがとうと言って受け取る。そして光矢もそのメモを見た。

「ふわふわタイム、カレーのちライス、私の恋はホツチキス、ふでペン、ボールペン……」

「相変わらず、漑のセンスは独特だよな……」

「へ？」

その曲名を見た光矢は思わず声に出してしまい、律も苦笑交じりにそう言うが漑はきょとんとした表情でそう言うだけだった。

そして時間は新入生への部活紹介、場所は体育館に移る。現在は合唱部の部活紹介が行われており、次の軽音部である一行は舞台袖に来ていた。そして漑はこっそりと体育館を見、そこにいる新入生達の姿を見た。

「り、律う、体育館人でいっぱいだよ」

「そりゃー新入生全員来るからなあ」

「もうだめだ」

「ボーカルじゃなくても結局緊張するのか……」

澗の泣き声に律がそう返すと澗は頭を抱えて言っており、それを見た光矢は呆れ気味にそう呟いていた。

「りっちゃん光ちゃん！ 舞台袖で百円拾った！」

「お前はもう少し緊張しろ」

「そして光ちゃん言うな」

それとは対称的に唯は目を輝かせて百円玉を見せており、それに律と光矢はそうツッコミを入れていた。

「次は軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です」

「お、私達の番だ。んじゃ頑張ろうぜー！」

「「おおー！」」

すると進行の放送が聞こえ、律が気合を入れるようにそう言つと唯と紬も右手を挙げてそう返す。すると共に舞台袖にいた山中が真剣な目で口を開く。

「皆、一つだけ言っておきたいことがあるわ……制服も、意外とい  
い！」

「さ、行くぞー」

「い、行つてきまーす」

山中の言葉に光矢と律はそう言つて舞台上上がっていき、それぞれの楽器をスタンバイする。そしてMCを担当する唯が口を開いた。

「どうも、軽音部です！ 新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！」

唯はそう言ってぺこりつと一礼し、顔を上げて続ける。

「私、最初軽音部のことを軽〜い音楽だと思ってたんですよ〜」

『あはははは』

（唯姉えのMCは何故だか安心して聞けるな……）

唯の和やかな言葉に当てられたか新入生達から笑い声上がり、それを聞いている光矢も口元を緩ませながら心中で呟く。

「カスタネットが出来ればい〜いかな〜って軽い気持ちで入部しちゃいました。なので皆さんもそんな感じで気軽に入部してください」

（さて、やるか）

唯の話が一段落したところで光矢は気合を入れなおし始めるぞと律達にアイコンタクトを送る。

「あ〜でも私が言ったカスタネットって本当はミハルスって言うんだって秋草君が言ってて、カスタネットは実は難しいんだってさわちゃんが言ってました」

「ん？」

「あ、さわちゃんってというのは先生の名前で、秋草君は同級生なんです」



「早く始める……！」

しかし唯は話し続け、業を煮やしたように光矢が怒鳴ると唯ははうつと言つて怯んだ。

「それじゃ、スタート！ ふわふわ時間タイム……！」

そして演奏がスタートし、その出だしを唯が上手く弾いたのを聞くと光矢は自分も弾きながらほうと唸る。

「（この曲の出だし、難しいのに弾けるようになって……って  
いうか）歌うの忘れてるぞ唯姉えっ……！」

「はうあっ……？ ど、どうしよう、ど忘れしちゃった……！」

「だーもう！ 秋山、お前しか覚えてない！ 頼む歌ってくれっ……！」

光矢は感心した直後唯が歌うのを忘れているのに気づいて声を潜めながら叫び、それに唯が焦ったように返すと光矢は必死で漣にサポートを願った。それに漣は一瞬嫌そうな顔をするが覚悟を決めると口を開く。

「揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ」

「早く歌え……！」

「……いつも頑張る君の横顔、ずっと見ても気づかないよね……」

漣が顔を赤らめながら歌いだすと光矢も唯に歌うよう言い、歌詞の一部分を聞いて思い出したか唯も歌いだす。そして唯と漣の即興ダ

ブルボーカルで演奏は続いていき、なんとか全曲が終了した。

「軽音楽部でした。次は吹奏楽部の……」

進行がそう言うのを合図に一行は舞台袖に下がっていく。

「うわーん！ 澪ちゃんありがとうー！！」

すると舞台袖に下がった瞬間唯は半泣きになりながら澪に抱きつき、澪も困ったような表情を見せながら彼女を抱きとめた。

「まったく、唯が歌詞をど忘れしたって言い出した時はどうなるかと思っただ……」

「お二人のダブルボーカル、素敵でした！」

「怪我の功名だな」

光矢が呆れたように顔を押しさえながら呟いていると紬が笑顔で言い、律も笑みを浮かべながら言った後悪戯っぽい笑顔で続ける。

「秘密特訓の甲斐があつたな」

「……特訓って？」「」

「な、なんでもない！！」

律の悪戯っぽい言葉に光矢、唯、紬が異口同音に尋ねると澪は顔を真っ赤にしながら声を上げた。そして後彼女らが行うのは部屋に戻って新入部員を待つのみ、そう思って部屋に戻っていると唯が声を上げた。

「あ、あの、光ちゃん」

「光ちゃん言うな……なんだ？」

「あの、歌詞ど忘れしちゃった時私の失敗なのに湊ちゃんに歌うのお願いしてくれたりしてくれてありがとう」

「なんだそんな事か。お前の失敗をサポートするなんてガキの頃からの決まりごとみたいなものだ、気にすんなよ」

唯の言葉に光矢はいつものツッコミを入れてから聞き返し、それに唯は微笑みながらお礼を言うが光矢はふっと笑いながらそう返す。それに唯は静かに頷いた。

「うん、でもほんとに、本当に……ありがとう」

唯はそう言いながら久しぶりに光矢に抱きつく。普段なら咄嗟に払いのけるか引き剥がすかだが光矢はそのどちらもせずただその状態を受け入れ、優しい笑みを浮かべながら彼女の頭をよしよしと撫でていた。そして部屋に到着すると彼女らは後輩となる新入部員を待ち始めた。

「うん、新入部員来ないなあー」

「ライブ、上手くいったのに！」

「や、やっぱり軽音部って人気ないのかな……」

「あ、あの、皆さん……そんな目で見ていたら来るものも来ないんじゃないあ……」

「お前ら少しは落ち着け」

律、唯、漣がドアや廊下側の窓を半開けにして新入部員が来ないか目を皿のようにして見ていると絢が苦笑いをしながら言い、光矢も呆れたようにツツコミを入れる。そして三人もドアや窓を閉めて落ち着きを取り戻すと律がぐつと拳を握る。

「こつなつたら、憂ちゃんと真由ちゃんと拉致るしか！」

「拉致るとか言うな」

「俺と真由両方を喧嘩の相手にするっていうならやってみる。ちなみに真由は女子剣道部で中学時代入部前に先輩全員なぎ倒した実績の持ち主だ」

律の言葉に漣がツツコミを入れ光矢もそう続ける、ちなみに妹が高校でも同じ事を繰り返したのを彼は知らない。

「あ〜」

すると突然そんな聞き慣れない声が聞こえ、軽音部メンバー全員主に律と唯は勢いよく　ドアの方を見る。

「あ、昼休みの」

「軽音楽部ってここでしょうか？　入部希望なんですけど……」

そこにいたのは光矢が昼休みの部員勧誘の時にピラを渡したツインテールの女の子。彼女はおずおずとした雰囲気ですべて入ってくるすると女子三人は顔を輝かせ始め、律はまるで獲物を見つけた獣のような目で少女に近寄ると……

「確保ーっ！ー！！」

「ぎゃーっ!」

一気に飛びかかり、少女も悲鳴を上げる。

「悲鳴が聞こえたけどどうしたのそしてちょっとかくまって!」

その直後部員勧誘から逃げてきたのか孝明が部室に入り、孝明とツインテールの少女の目が合う。すると孝明は少女の顔をまじまじと眺め、やがて驚いたように目を見開いた。

「……ま、まさか、あず!」

「お、お兄さん!」

そして孝明がその声を上げた直後あずと呼ばれた少女も孝明を見て声を上げた。

## 第十五話 二年生突入！新歓ライブと新入部員（後書き）

中途半端感溢れてますが一回ここで切ります。新入部員である梓の登場と孝明との謎の言葉、どついうことかはまた次回。もし感想があつたらお待ちしております。それでは。

## 第十六話 新入部員と軽音部

「……ま、まさか、あず!?!」

「お、お兄さん!?!」

軽音楽部部室、入部希望である黒髪ツインテールの小柄な女子とテニス部の勧誘活動から逃げてきた孝明は互いを見て驚いたように声を上げ、それを聞いた軽音部メンバーはきょとんとしていたが少しすると唯が声を出す。

「え?……知り合い?」

「お兄さんって……まさか、秋草君の生き別れの妹!?!」

「ち、違う違う! 僕とあずはただの幼馴染だよ!」

唯の言葉に濁が驚いたように続けると孝明はそう言い、あずと呼ばれた小柄な女子もこくこくと頷くがふと首を傾げる。

「秋草?」

「立ち話もなんだし、とりあえず座ってもらえ。孝明も状況を治めるためにもかくまってやるから」

しかしそんな疑問を掻き消すような呆れ交じりの光矢の言葉に全員は頷いてあずは一旦椅子に座る。そして光矢が尋ねた。

「んで、あずだっけか? 本名は?」

「えっと、1年2組の中野梓って言います。お兄……孝明さんとは説明されたように……幼馴染です」

「でも秋草君に私達以外の幼馴染がいたなんて知らなかったな」

「唯ちゃん、それ僕が友達少ないって聞こえるんだけど？ まあ詮索しないでもらえると嬉しいよ。ミステリアスは魅力の一つだしね？」

「へいへい」

「まー、あずと一緒にだったのは幼稚園だけで、小学校に上がってからはほとんど会わなくなってたからね。昼休みの勧誘で光矢からチラシ貰ってたのも見たけど分かんなかったし……大きくなったね、あず」

光矢の問いにあずこと梓はそう言い、それを聞いた唯がそう言うこと孝明はどこかもの悲しげな目で呟くが直後いつものへらへら笑いを出して続け、光矢は呆れたようなため息をついて頷くと孝明はそう続ける。光矢はそれを聞きながらふと心中で考え出した。

（そういえば、俺こいつとは小学生からの付き合いだが、未だに色々聞いてもはぐらかされる事があるな……家庭とか……）

そういえば未だにこいつの家には一度も遊びに行ったことがなかった、光矢はそう考えを持っていくが誰しも言いたくない事はあるだろうしとそこで考えを打ち切る。すると唯と律が好きな食べ物とか部活には関係のない質問を梓に投げかけているのに気づいた。



「お前ら、せめて部活に関係あること質問しろ」

「はーい。じゃーえっと、楽器は何かやってた？」

「あ、はい。パートはギターを少し……」

「おおっ、唯や光矢と一緒にだな！」

光矢のため息交じりの言葉に唯はそう返した後梓に尋ね、梓が答えると律がそう言っただけで唯と光矢の方を向く。すると梓は近くのためか唯の方を向いて頭を下げた。

「よろしくお願いします、唯先輩」

(唯先輩！……先輩、せんぱい……)

「トリップしてねえでとっとと帰ってこい」

梓の言葉を受けた唯は昇天したかのような表情でそう呟いており、光矢は呆れ混じりにそう言っただけで唯をどっぴりしていた。すると唯は正気に戻って自分のギターを梓に渡す。

「それじゃ、早速だけど何か弾いてみて！」

「まだ初心者なので、下手なんですけど……」

「大丈夫！ 私が教えてあげるから！！」

「早くも先輩風吹かせてるな」

唯がそう言つて梓にギターを渡すと彼女は重いと呟いた後謙虚にそう言つが唯はえっへんと胸を張つて返し、漑がくすくすと笑いながら言つ。そして梓がギターを弾き始めると全員が閉口する。彼女のギターは光矢ほどではないものの少なくとも唯よりは断然上手だった。

(う、上手い……)

(私より断然……)

(実力、火を見るより明らかだな……)

漑が驚いたように心中で呟くと唯もぼかーんと口を開き、光矢も目を逸らして心中で呟く。そして五人が黙っていると梓もまた彼女らとは違う意味でぼかーんとなつてしまい、頭を下げた。

「ごめんなさい、聞き苦しかったですよね……」

「あ、いや、そういうわけじゃ」

「ま、まだまだだね!!!」

( )(おいっ!?) ( )

梓の言葉を聞いた漑が慌てて取り繕うとすると唯が腕を組んで見栄を張り、それに光矢、漑、律が心中八モリツツコミを入れる。すると梓が目を輝かせながら唯を見た。

「私、唯先輩のギターもう一度聞きたいです!」

「えーっ!?!」

(唯姉え、見栄なんて張るな。諦めろ)

梓の言葉を聞いた唯が驚いたように叫ぶ横で光矢が彼女に耳打ちし、

でも諦めたくないのか唯は必死で頭を働かせているらしく梓から目を逸らして指先をツンツンと合わせていた。

「えーっと、その……ラ、ライブのせいできつくり腰になっちゃったからまた今度ねー！」

（（苦しい……））

そして言い出した言い訳を聞いた光矢と律は唯を冷めた目で見ながら心中でそう呟いていた。そして光矢は唯を梓の前から引つ張り去って、梓の相手を律がし始める。

「それじゃとにかく、入部してくれるってことでいいんだよね？」

「はい！ 皆さんの新歓ライブを聞いて感動しました。これからよろしくお願いします！」

律の言葉に梓は光り輝く満面の笑顔でそう言う、それを見た唯は目の前を両手で覆った。

「うう、眩しすぎて直視できません……」

「……」

そしてそう呟く唯を光矢は呆れた目で見つめ、律は梓の入部届を受け取った。

「それじゃ入部届受け取ったから、明日からよろしくね」

「はいっ！ それじゃ、失礼しまーす」

「僕もそろそろやばそうな気がするし別のところに逃げるよ。またね」

律の言葉に梓は元気一杯にそう言った後失礼しますと言って部室を去り、孝明もそれに合わせて部室を出て行く。唯はそれを笑顔で手を振り見送っていたが彼女が去っていったのを確認すると引きつった笑顔で口を開く。

「私……どうしよう」

「練習しろ」

その言葉に光矢、漣、律の三人は異口同音でそう返した。

そしてその翌日の放課後、光矢達軽音部メンバーが揃っているところアが開き元気一杯の声が聞こえてきた。

「こんにちはー！」

「お、元気一杯だな」

「はい！ 放課後が待ち遠しかったです」

梓だ。彼女が入ってくると律はにっと笑いながらそう言い、梓はここにこと微笑みながらそれに頷く。すると律は「それじゃあ」と言っ

（早速練習するんだ……）

確かに光矢はギターを準備し始めている。しかし甘い、紬はお茶を入れたカップとお菓子を準備し始め律はその内の一つを手にとった。

「お茶にするか」

「梓ちゃんもどうぞー」

（えーっ!?!）

いきなり練習もせずにお茶を飲み始め慣れたようにそう言う紬を見た梓は驚いたように心中で叫び、慌てたように律に言う。

「あ、あの、部室でこんなことして大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫」

「あー!」

梓の言葉に律はごくごく軽く頷きながら答えていると山中がやってきてその光景を見ると声を上げる。

「わ、先生……こ、これは、その」

怒られると思ったのか梓はどうにかフローしようとするものの中はそんな梓を通り過ぎて椅子に座ると紬に言った。

「私ミルクティーね？」

「はい」

(ええーっ!?)

山中も慣れたように紬に注文しており、それに梓がまた驚いていると山中は梓を見た。

「この子が新入部員？」

「うん」

山中の言葉に唯はケーキを齧りながら返し、山中は梓に向けて笑顔を見せる。

「顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「よ、よろしくお願いします」

山中の言葉に梓も慌てたようにそう返す。と山中は梓をじーっと見始め、思わず梓は顔を赤らめながらうつむいた。

(綺麗な人だなあ……)

(ネコミミとか似合いそうね……)

そして二人は心の中でお互いにそう違う事を考えており、見つめられているのが気になったのか梓は席を立つ。そしてわいわいと話している唯、律、山中を見ながら梓ははっと気づいた表情を見せる。

(もしかして、私の自主性を試されてるのかも)

確かに光矢は音を小さくしながらもギターを弾いている。梓もそれを見ると自分のギターケースの方に歩き、ギターを取り出す。

「それじゃさっそく」

そしてそう言っただけで弦の調子確認のためジャアーンと大きく音を鳴らす。

「うるさい！！！！」

「ええーっ!?!」

「アホかあー！！！！」

すると山中が目を吊り上げながら怒鳴り、それに梓が驚きの声を上げると光矢が山中目掛けて怒鳴り声を上げる。

「だって静かにお茶したかったんだもん……」

「言い方ってもんがあるだろ!?　そして少なくともさっきのは顧問の言葉じゃない!」

山中が涙目になりながらそう訴えると部員である光矢が顧問である山中を叱り出すというあべこべ現象が起きる。その間に溲が梓のフオローに駆け寄った。

「い、ごめんね。あの先生ちょっと変なの……」

「……………」

澪がそう言っているのを聞いてるのか聞いてないのか梓はうつむきながらふるふる震えながら声を絞り出す。

「こんなのじゃ駄目ですー！！！」

「うわーっ切れたー！！！」

梓は両腕を振り上げて声を上げ、澪は慌てて叫ぶ。そして梓はまだケーキを齧っている唯やティーカップを持っている律に目を向ける。

「皆さんやる気が感じられないです！」

「いやー、新歓終わった後だし……」

「そんなの関係ありません！」

梓の声に律は苦笑いをしながら返すが梓は真剣にそう言い、さらに続けた。

「音楽室を私物化するのもしけないと思います！ ティーセットは全部撤去すべきです！」

「それだけは勘弁して！！！」

「なんで先生が言うんですかー！？」

梓の訴えに泣きそうな声を上げながら梓にしがみついたのは山中、その姿を見た梓が驚いたように叫ぶ。それを見ながら光矢は呆れたように額を押さえ、澪が苦笑しながら梓に声をかけた。



「ま、まあとにかく落ち着いて……」

「これが落ち着いていられますかー!!」

しかし漣の言葉も今の梓には効かず腕を上下に振りながらぷんぷんと怒った様子を見せ続ける。すると突然唯が梓を後ろから抱きしめ、彼女の頭を撫で始めた。

「いー子いー子」

「そんなのでおさまるはず……」

唯の暢気な対処法に漣は呆れたように言いながら梓の顔を見る、と彼女はほんわかとした表情を見せている。

「おさまった!?!」

それに漣は驚きの声を上げた。

「取り乱してすみませんでした……」

そして落ち着いてから梓はぺこりと頭を下げる、と漣が続けた。

「でも、梓のいう事にも一理あるよ。私達ももっとやる気出していないと」

「そうだな。休憩も大事だが、そこは中野と秋山の言うとおりだ」

さらに漣の言葉に光矢も賛同し、梓は顔を輝かせる。そして二人は唯達に目を向けた。

「分かったな？」

「分かりましたね？」

「はい……」

そして二人の同時の言葉に唯と山中はそう返した。

それからまた翌日の放課後、梓は足取り重く部活に向かっていた。

「はあ……」

ふとため息が漏れてしまう、するとその背後から誰かが声をかけた。

「や、どうしたの？」

「あ、おに……孝明さん」

「お兄さんでいいよ、あずは妹みたいなものなんだし。と言ってももう七、八年くらい会ってなかったかな？」

孝明だ。その姿を確認した梓は小さい頃の癖でお兄さんと呼びかけそうになったが途中で口をつぐみ、言い直す。それに孝明は笑いながらそう返し、それに梓はくすりと笑った。

「お兄さん、変わってませんね。昔っから明るくて周りを元気にして」

「そうかな？ それよりどうしたの？」

「……昨日、部活で迷惑かけちゃって……」

「あ、あずつて真面目だからああいう雰囲気は驚いちゃったんだね。大丈夫大丈夫、あずはいい子だし軽音部の皆もいい人ばかりだからすぐに打ち解けられるよ」

「あ、ありがとうございます……」

梓の言葉に孝明はけらけらと笑いながら返し、もう一度尋ねると梓はうつむきながらそう言い、それだけで察したのか孝明は笑いながら彼女を元氣付けるように返す。それに梓はぺこりと頭を下げて返して部室に向け歩き出すが孝明も同じ方向に歩いている。

「あ、あの……なんでついて来るんですか？」

「ん？ 今日にはテニス部休みだから軽音部に遊びに行こうかなってあずも心配だしね」

「!?!」

梓の言葉に孝明は両手を頭の後ろに回しながら言い、梓を見て微笑みかけながら続ける。それに梓の驚きを示すように彼女のツインテールが少し跳ねると彼女はぷいっつと顔を背けて歩くスピードを速めた。しかしやはりというか音楽室に近づぐことに歩みは遅くなっていき、音楽室前で足を止めると梓はちよっとドアが開いている事に気づいてそこからそーっと中を見る。そこには昨日のようにお茶を楽しんでいる唯達の姿があった。

(全然動じてない!?)

「ね？ 大丈夫大丈夫」

梓は思わず目を見開いてしまい、孝明も笑いながらそう言う。梓はでもと言わんばかりに唯達をじーっと見る。するとその視線に気づいた唯が梓に気づき、慌てて立ち上がるとギターを取った。

「こ、これから練習するところだったんだよ？ 本当だよ！？」

そしてギターを準備してちゃりらーんと鳴らした、と思っただらへなへなと崩れ落ちる。

「やっぱりケーキ食べないと力出ないよ」

（はやつ！？）

へなへなと崩れ落ちた唯を見た梓は心中でツッコミを入れており、細がフォークに一口ケーキを刺して唯にあぐんで食べさせる。そして唯はそれを租借し飲み込むとかつと目を見開いて立ち上がる、なんかシャキーンという効果音まで聞こえた気もするが気にしないようにしよう。そして唯はギターを先ほどとは全く違いギヤアアアアアとかき鳴らす。

「う、うんまーい！ー！」

それを聞いた思わず梓はそう叫んでしまい、唯もふつと得意気な笑みを浮かべる。そしてギターを下ろすとさっきのケーキを一口フォークで刺し梓に向けた。

「はい、梓ちゃんも食べてみなよ。美味しいよ」

「むぐっ」

その言葉と共に半ば強引に梓の口の中にケーキを突っ込み、梓はそれをもぐもぐと租借する。

「あ、おいし……」

「ん〜、なんだって〜?」

「あ、お、惜しいっ!〜!」

「何が!?!」

つい呟いてしまった言葉を律が聞き逃さずににやにやと笑みを浮かべながら尋ねてくると梓はそう誤魔化すように声を上げ、それに律も驚いたように返す。それを見ながら唯は残念そうな表情を浮かべる。

「う〜ん、気に入らなかつたか〜」

「あ」

唯はそう言っただけケーキを片付けようとするがそれに梓が思わず声を出すと唯は梓の方を振り向き、ケーキをフォークに一口刺して梓の方に向ける。それに梓は顔をぱーっと輝かせるが遠ざけるとしよぱーんとなり、また近づけるとぱーっと顔を輝かせる。

(面白い……)

「遊ぶな」

それに唯が心中でそう呟いていると背後から光矢がツツコミを入れた。

その頃こちらは山中、彼女は「さようなら」と声をかけてくる生徒に「はいさようなら」と返しながら軽音部に向かっていた。そしてふうと小さくため息をつく。

(あゝあ、今日から音楽室でのティータイムはなしなあ……まあ、ケーキ食べられなくなったのは残念だけど教師らしくちゃんとしなきゃ)

山中は残念そうに心中で呟くがそう気分を入れ替えると音楽室のドアを開ける。

「皆、練習頑張ってるー？」

「あ、先生」

音楽室のドアを開けながらの言葉に唯達はケーキを食べお茶を飲みながら返した。

(食べてるじゃん)

いつも通りのお茶会を見た山中はがくつと膝を折りながらそう呟く。そして山中もティータイムに参加し、ケーキを食べると感極まったように涙目になってぶるぶると震え出した。

「私もうここで死んでもいい……」

「死ぬな」

山中の言葉に光矢と律が呆れ気味にツツコミを入れ、山中はふと梓に尋ねた。

「でも、なんでティーセット撤去しなかったの？」

「そ、それは……」

昨日は音楽室を私物化してはいけない、ティーセットは全部撤去すべきだと主張していた梓は山中の言葉に詰まってしまい、少し黙ってから口を開いた。

「な、なんでもかんでも否定するのはいけないと思って」

「へー」

(どっちが教師なんだか分かんねえな……)

梓の言葉に山中がへーと頷いてるのを見ながら光矢は呆れたように心中で呟く。すると今度は唯が梓に尋ねる。

「そういえば、梓ちゃんっていつギターを始めたの？」

「小四の頃です。親がジャズバンドやってたのでその影響で」

「あー、おじさんとおばさん。そういえばバンドやってたって聞いたことあったっけね」

唯の言葉に梓が返すと孝明がふつと笑みを浮かべながら返し、律は

「サラブレッドだ」と驚いたように呟いているのを横に梓が唯に尋ね返した。

「唯先輩はどうしてギターを始めたんですか？ 新歓ライブの時間き逃しちゃって……」

「え！？……い、言えない、軽い感じの音楽だと思ってたなんて絶対言えない……」

（まあ、軽い感じの音楽と思い込んで入部した後活動内容を知ったなんて言えんわな）

梓の問いに唯はぎくりとなって目を逸らしながら心中で呟き、その横で光矢も呆れたようにそう心中で呟いていた。

「あ、そういうえばおじさんとおばさん元気？ 今度久しぶりに会いに行こうかな？」

「あ、そうですね。きっと喜びますよ」

唯が困っているのに気づいた孝明は話を逸らすために梓に話しかけ、それに梓は微笑みながらそう返す、それに唯はほおっと安堵の息を吐いた。と今度は山中が口を開く。

「そうそう、私梓ちゃんにプレゼント持ってきたんだっわ」

山中がそう言って荷物をまさぐり、はいと梓に手渡したのはまごうことなきネコミミカチューシャ、それを見た梓は思わず目を点にしてしまい、顔を上げて山中に尋ねる。



「あの、これなんですか？」

「何って、ネコミミだけど？」

「いや、それは分かるんですけど……これをどうすれば？」

梓の問いに山中が真顔でさらっと返すと梓は困ったようにネコミミを見る、と山中がフッフッフと気味悪く笑い出した。

「じつするのよー！ー！ー！」

「ぎゃーっ！ー！」

そしていきなり梓に飛び掛り、彼女は悲鳴を上げる。

「や、止めてくださ、せ、先輩助けて……！」

「大丈夫、軽音部の儀式みたいなものだから」

「何の！？」

梓は必死に近くにいた律に助けを求めるが律はさらっとそう返し、それに梓は叫ぶ。そして力づくで山中の拘束から逃げた。

「んもう、恥ずかしがりやさんねえ」

「当たり前です！　せ、先輩だつてこんなの恥ずかしいですよね！  
？」

「ほえ？……はい」

ふうと頬を膨らませながらの山中の言葉に梓はそう叫び、唯の方を見て続けると彼女は首を傾げてネコミミカチューシャを手に取り、事も無げに自分の頭に装着する。次に紬もネコミミをつけ、きゅっきゅつと楽しそうに騒いでいる先輩を梓は啞然として見ていた。

(あれ?……私がおかしいのかな?……)

「いや、おかしいのはあいつらだ」

梓はついそう錯覚を起こしてしまうが少し離れたところで光矢が表情から彼女の思考を予想したのか呆れたように呟く。そして唯がネコミミを梓に渡した。

「はい、次梓ちゃんの番」

「う〜……」

唯の言葉についに断りきれなくなったのか梓は意を決したようにネコミミカチューシャをつける。それを見た唯は顔を輝かせた。

「わー、凄いい合ってるよー……」

「」「」「軽音部へようこそ!」「」「」

「」「こで!?!」

唯がそう言った後に唯、律、紬、山中の四人が声を合わせてようこそと言い、それに梓がツツコミを入れる。そして唯が梓をぎゅっと抱きしめてすりすり頬擦りし始めた。

「ん〜、梓ちゃん可愛い〜」

「ニヤ〜って言うてみて、ニヤ〜って」

唯が頬擦りしてくるのを困ったように受けている梓に律がそう言つと梓はきよとんと首を傾げ、ポーズも取って口を開く。

「にゃ、にゃ〜?……」

そう言つた瞬間律や山中達がメロメロとした状態になり、それを見た梓は直後気づく。

「はっ!? つい!?!」

「あだ名はあずにゃんで決定だね!」

しまったと言わんばかりの梓に対し唯はぐつと拳を握りながらそう言つた。それを光矢と孝明は少し離れた場から見ている。

「まったく、新入部員困らせまくってるな……」

「そうだね〜。まああずもすぐに慣れるよ、この人達は皆良い人ばかりだからね」

「だといいいけどな」

光矢が呆れたようにため息をつきながらそう言つと孝明も笑いながら言い、光矢もやれやれと首を振りながら呟いた後ふと唯を見る。すると孝明がああと声を出した。

「さっき唯ちゃんのネコミミ姿をこっそり写メったけど、いる？」

「い、いらねえよ馬鹿！！！」

孝明の言葉と彼の携帯に写っている唯のネコミミ画像を見た光矢は顔を赤く染めながらそう叫び返して孝明の頭に拳骨を叩き込み、孝明はいたたと呟いて殴られた頭をさすりながらも楽しそうに笑っていた。

それから時間も過ぎて部活が終了、軽音部+ の面々はそれぞれ帰っていたがその道中で漣は自分の荷物を確認していると声を出す。

「あ、筆箱忘れてきてる。ごめん律、先行ってて」

漣はそう言うつと音楽室に戻っていき、机の上に筆箱が乗っているのを見つけるとあったあったと呟きながら筆箱に手を伸ばすがふとその横に置かれていたネコミミカチューシャに目を向ける。

「……………」

そして少し考えるとネコミミに手を伸ばし、そーっと頭につけるがその直後漣は律がこっそり見ていることに気づき、さっとネコミミを頭から外して鼻の下にやると律の方に振り向いた。

「ヒ、ヒゲ！」

「苦しいぞ〜」

しかし律は面白いものを見たというようにニヤニヤと微笑んでいた。

第十六話 新入部員と軽音部（後書き）

やゝ、ようやっと書き上げられた……というわけで孝明と梓は今のところ単なる幼馴染です、生き別れの兄妹と予想した方残念でした！……そんな予想した人いるか分かりませんが……。では、感想お待ちしております。それでは。

## 第十七話 新入部員の軽音部生活

「あ、あず。やっほー」

「お兄さん、今日はテニス部ですか？」

「いや、今日はお休み。外雨だからね」

桜ヶ丘高校の一階、もう授業も全て終わった放課後ここの生徒である中野梓が部活に行こうと教室を出て部室に向かっていると彼女の幼馴染である孝明が声をかけ、それに梓が小首を傾げながら尋ねると孝明は雨が降っている外を見ながら返す。どうやらここのテニス部は雨が降ったら部活が休みになるらしい、あるいはそれを理由にサボろうとでもいう彼の魂胆なのだろうか。まあそれはいいだろう。

「というわけで暇だし軽音部に遊びに行こうかなってね。一緒に行こうか」

「お兄さんも軽音部に入部したらどうですか？」

「いや、兼部は良心が痛むからね。それに僕楽器出来ないし身体動かす方が性にあってるから」

孝明の言葉に梓が呆れたような笑みを見せながら返すと孝明はあはたとわざとらしく笑いながら返す。それに梓はふふつと笑った。

「そっぴや、あずって新歓ライブに感動して入部したんだよね？」

「え!?!……は、はい」

孝明の問いに梓は一瞬驚いた後顔を逸らしながら頷き、孝明はふふと笑う。そして軽音部部室に辿り着き梓は扉を開けた。

「……何コレ」

中の光景を見た梓はため息をつきながら呟く。唯と律はだらりと机に突っ伏しており紬はティータイムの準備中、部員唯一の男子である光矢は珍しくまだやってきていなかった。

「やあ梓、秋草君」

「漣先輩」

「もう軽音部には慣れた？」

すると彼女らに気づいた漣が二人に声をかけ、それに梓が返すと漣はまた尋ねる。それに梓は苦笑を浮かべた。

「えっと、まだこののんびりした空気が……」

「「あー」「」

「大丈夫、すぐ慣れるよ！」

(ていうか慣れたくない……)

梓の言葉に孝明と漣は納得したように声を出すと唯が梓の両肩に両手を置きながら返す。それに梓はそう呟いていた。その間に孝明は部室を見回しながら漣に尋ねる。

「そついえば光矢、まだ来てないの？」

「あ、光ちゃんギターを家に忘れてきたって言って一回帰っちゃったの」

溼に尋ねたその問いに唯が返す。それに孝明は珍しいとばかりに頷いた。

「へ〜顔に似合わず真面目な光矢が珍しい」

「顔に似合わなくって悪かったな」

すると孝明の背後からそんな声が聞こえ、孝明はだらだらと冷や汗を流す。そして直後、ゴンという拳骨が孝明の頭に突き刺さり、ギターケースを背負っている光矢が部屋に入ってきたながら唯を見て口を開く。

「唯、口元にケーキの欠片付いてるぞ」

「ふえ？ どこ？」

「ここだここ」

光矢の言葉に唯が口元に手をやりながら返すと光矢が唯の口元に手を伸ばしてケーキの欠片を取る。それに唯はびくりとなって固まっ  
てしまい、光矢は部屋に置かれていたティッシュを一枚取ると欠片  
についていたクリームごと欠片を拭くとゴミ箱にティッシュを投げ  
捨てた。



「……どうした、唯？」

「ふえ、あ、な、なんでもないよ！」

「そうか？ さて、練習するか……」

ティッシュがゴミ箱にシュートされたのを見届けてから光矢は唯を見、固まって心なしか顔が赤くなっている唯を見て首を傾げて尋ねるが唯はぶんぶんと首を横に振って声を上げ、光矢はまた首を傾げてそう呟いた後ギターケースからギターを取り出して少し調整をする。それを見ていた梓がふと澪と光矢に尋ねた。

「澪先輩と若宮先輩って外でバンドとか組まないんですか？ 折角上手なのに……」

「いや、俺は興味ない」

「うーん、外バンも面白そうだよね……」

梓の問いに光矢は興味ないと即答するが澪は少し微笑みながらそう呟く、と律がにやにやと笑みを見せながら口を開いた。

「あー、そんな事言ってるのいいのかな？」

そう言いながら律が一枚の写真を取り出しながら呟き、それに澪はあーっと声を上げながらその写真を奪い取る。

（何か弱み握られてるのかな？……）

それを見ながら梓が心中でそう呟き、その写真の内容の予想がついている孝明は苦笑を漏らしていた。そして澪は律から奪い取った写

真をぐしゃぐしゃに潰しながら口を開く。

「さ、さあそろそろ練習するぞ！」

漣の言葉を聞いた梓がはいと頷いてギターを取り出すと唯がそのギターを見ながら口を開く。

「あずにゃんが使ってるギター、可愛いね〜」

「そうですね？ 私手が小さいからネックが細いギターじゃないと弾けないんです」

唯の言葉に梓はそう言いながらほらと自分の手を唯の手と重ねる、確かに梓の手の方が明らかに小さい。

「ずるい！..！」

「ずるい!?!」

それに唯がその声を上げ、梓も驚いたように返していた。そして唯は律や紬と右手を広げて合わせていたが二人とも唯より手が小さく、唯はあれ〜と呟く。

「私、手大きいのかなあ?.....光ちゃんは？」

「女の子より手が小さいとか言われたら傷つくわ。それと光ちゃん言うな」

唯の言葉に光矢はギターを弾きながら返しいつものツッコミも入れる。それに唯はう〜んと唸りながら今度は漣と手を重ね合わせた。

「あ、澪ちゃんの方が手大きいね」

確かに澪の方がぎりぎり唯より手が大きい、すると澪はそれにシヨツクを受けたのか涙目で自分の掌を見つめ始める。なんかどよんとしたオーラが見えてきた。

「あ、あれだよ！ 澪ちゃんの手は細くて長くて綺麗だよ！」

それを見た唯は慌ててフォローを行う、しかし澪のオーラは治まらず慌てて絀がフォローに入ると梓が目をキラキラさせながら唯に声をかけた。

「あ、あの、唯先輩、ギター聞かせてくれるって約束……」

「いつ!?!?……」

梓の言葉に唯は怯み、そのキラキラとした目を見てぶるぶると震える。

「唯、いい加減諦めろ」

「じ、持病のしゃくが……」

「いい加減諦めなさいって」

「お前に持病なんてねえのは知ってたよ」

律の言葉に唯はお腹を押さえながらそう言いだすが律と光矢が呆れたようにツツコミを入れる。

「ところで、しゃくつてなあに?」

「知らんと使つてたんかい」

「しゃくつて言うのは癩に障るや癩癩を起こす等の癩と書いて、胸や腹の辺りに起こる激痛の総称なんだ。胆石症や胃痛、盲腸や生理痛などからくる腹痛がすべてしゃくと呼ばれてたんだよ」

すると唯は首を傾げながらそう言い、それに光矢と律のハモリツッコミが入る。すると孝明がすらすらつと説明し、澪はへえと感心したように頷く。すると唯が梓に抱きついた。

「あずにゃんギター教えてくださいっ!」

「変わり身はええなっ!?」

「……」

唯の行動に律が声を上げ、光矢は呆れたように額を押さえる。そして唯がギターを鳴らしているのを梓が見ながら口を開く。

「あ、そこはミュートして、それとさっきのとはビブラートきかせた方が」

「ほえ? ミュート? ビブラート? 何それ?」

「ほえっ!?!?」

梓のアドバイスを唯はきよとんとした表情で聞き返し、梓も驚いたようにそう叫んで横に立つ光矢を見ながら恐る恐る唯を指差す。

「こんなでも一年間やってきてんだ……」

「ミュ、ミュートもビブラートも知らずにどつやって……」

その意味を理解したらしい光矢は呆れ顔でそう返し、それに梓は啞然とした表情で呟きながら唯のギターを聞く。

「あれ？ ちゃんとミュートできてる……」

するとその音はミュートがかかっており、梓がきよとんとした声で呟くと唯が声を出した。

「あ、これがミュートっていうんだ」

「唯はゲーム買ってても説明書読まないタイプなんだ。おかげで専門用語を教えるのも苦労する……」

「納得です」

「とりあえず基本は中野が教えてくれ。どうしても理解できなかつたら俺が叩き込む」

唯が頭に手をやりながら言うつと光矢はため息をつきながら返し、それに梓も返す。そして光矢は心なしか目を研ぎ澄ませながら続け、そのオーラに当てられたか梓は少し光矢から離れながらこくこくと頷いた。そして光矢も入って一曲梓に聞いてもらおうという事になり、五人は調整の演奏を少し行う。

（唯先輩は音楽用語まるで知らないし、律先輩のドラムは走り気味……なのに）

梓は軽音部五人の演奏風景を見ながらふと考えており、その間に演奏がスタートする。

(なんで五人揃ったらこんないい演奏になるんだろう?……)

梓は五人の演奏を聞きながらそう考えていた。そして演奏が終わると唯達はティータイムに入り、その間に澪が梓に言った。

「梓、さつき私と若宮君がなんで外バンを組まないのかって聞いてきたよね?」

「あ、はい」

澪の言葉に梓はこくと頷く、すると澪の横に立っていた光矢が先に口を開いた。

「さつきも言った通り、俺は純粹に外バンに興味はない。唯達とやって楽しいので充分だ」

「私も、やっぱりこのメンバーでバンドをするのが楽しいんだと思う。お茶飲んだりだらだらすることもあるけど、それも大事な時間なんだよ」

光矢に続いて澪もそう言い、三人はティータイムを行っているメンバーを見る。と唯と律はやる気がないかのようにだら〜と机に突っ伏していた。ちなみに紬と孝明はその横でお茶を飲みながら談笑している。

「……本当に?」

「『……多分』」

その光景を見た梓の言葉に二人は言葉に詰まりながらそう返した。

第十七話 新入部員の軽音部生活（後書き）

今回はちょっと短いけどぱと書き上げられました、ちなみに次回は何かオリジナル話でも入れようかなと思案しております。もし感想あったらお待ちしております。それでは。



## 第十八話 軽音部メンバーと仲間達、遊園地での一日

「おおー……」

唯は目をキラキラさせながら目の前の光景に夢中になっており、律もうずうずとした様子を隠しきれないように両手を握り締めていると突然それを振り上げて声を上げた。

「いよっしゃー！ 遊ぶぞー！！」

「「「おおー！！」「」」

その言葉に唯、紬、孝明の三人がノリノリで右手を挙げる。

巨大な観覧車に始まりジェットコースターにコーヒーカップ、メリーゴランド等見渡す限り広がる遊具。ここまで言えば分かるだろう、今彼らは遊園地に遊びに来ていた。ちなみに何故そうになっているのかというのは回想した方が早いだろう。

前日の放課後、軽音部部室。唯達が孝明作のお茶でいつものようにティータイムを行い、漣と梓、光矢がベースやギターの練習を行っている中珍しく紬が遅れてやってくる。

「こんにちはー」

「あ、ムギちゃん。お茶僕が入れといたから、どうぞ」

「ありがとうございます」

紬に気づいた孝明はそう言いながら紬の分のお茶を準備し、紬はお

礼を言って席に座りお茶を一口飲むと口を開いた。

「あの、皆さん明日は暇でしょうか？」

「明日って土曜日？ 私は暇だけど？」

「私も暇だよ」

「僕も別に予定はないね」

紬の問いに律、唯、孝明が返した後光矢達三人も大丈夫と頷く。すると紬が十枚のチケットを取り出した。

「実は私のお父様のお知り合いから遊園地への招待券をいただいて、私一人じゃつまらないので、一緒にどうでしょうか？」

「おっいいねー。私賛成！ 澁もいいよな？」

「いいよ」

「私もー、光ちゃんもいいよね？」

「光ちゃん言うな……俺もいいぜ」

「僕も、面白そうだし参加するよ。あずも行くよね？」

「あ、はい！」

紬の提案に全員が賛成の意を示し、紬はよかったと笑顔を浮かべる。すると光矢が口を開いた。

「なあ、後三人だよな？ 真由と憂もいいか？」

「あ、和ちゃんも！」

光矢に続いて唯がそう言うのと紬は構いませんよと返す。そして念のため光矢と唯が三人に連絡したところ二つ返事で了承が貰え、翌日全員揃ってその遊園地へと遊びに来たわけである。

「よっしやー！ 行こうぜ漣ー！！」

「わ、ちよっ律！？」

律は右手で漣の左手を掴むとだつと走り出し、漣は驚きながら律に引きずられていく。それを眺めていた唯は少し頬を赤くしながら光矢の方を向いた。

「こ、光ちゃん！ あ、あの、一緒に行こ？」

「ん？ いいぜ、んじゃあ真由」

「あ、憂ちゃんと真由ちゃん、なんかあずと親睦を深めたいらしくつてさ！ 僕とムギちゃん、和ちゃんもついてく事になったから二人でどうぞ！」

「え！？ あ、ああ……んじゃ、行くか」

唯の言葉を聞いた光矢は二人の妹も一緒の方が楽しいだろうと気を使ったのか真由と憂を呼ぼうとするがそこに孝明が先手を打つ。それに光矢は一瞬驚いた表情を見せた後唯と二人で歩いていき、孝明

はくすくすと笑いを零していた。

「秋草君……」

「ごめんごめん。でもこっちの方が面白そうだし」

「相変わらずね……」

「心配しなくても後をつけたりとかはしないから安心してってば」

和のどこか呆れたような言葉に孝明がへらへらと笑いながら返すと和はため息をついてそう呟く。それに孝明が微笑を湛えながら言う  
と和はまたやれやれと頭を横に振った。

「それじゃ、遊びに行こうか。折角入場料タダで来れたんだから少なくともその分は遊ばなきゃ損だよ」

孝明は自分が受け持った一年生達に向けてそう言い、それに三人がうんと頷くと孝明は紬と和も連れてアトラクションの方に歩いていった。

一方光矢と唯も遊園地内を歩き回っており、光矢は唯にアイスクリームを奢りで持ってくる。そして唯にチョコアイスを手渡した。

「ほら」

「あ、ありがと……」

光矢がそう言って渡してくるチョコアイスを唯はおずおずと取り、唯がアイスを食べ始めると光矢も自分の分として買ってきたバナナアイスを食べ始める。

「……美味しい」

「ああ、そうだな……」

唯がそうぼそりと呟くと光矢も静かにそう返す、そしてふと唯の方を見るとおかしいものを見たというようにくくつと笑う。

「な、何？」

「唯姉え、ほつぺにチヨコ付いてるぞ」

唯が驚いたように言うと光矢はそう言っただけで唯の頬についているチヨコの塊を人差し指で拭い、少し躊躇いがちにペロリと舐める。

「っ……!」

それらに唯は思わず顔を真っ赤にしてしまい、光矢はちょうどハンカチやティッシュの持ち合わせがなかったのか服で指についたよだれやチヨコの残りを拭き取ると唯を見て少し首を傾げる。

「どした、唯姉え？」

「ふあ、な、なんでもないよ！ こ、光ちゃん！ あ、あれ！ あれやろっ……!」

光矢の言葉に唯は慌てて首を横に振りながら言うと言つと誤魔化すように光矢の腕を掴み適当な方を指差して続ける。それを聞いた光矢は唯の指差している方を見て不思議そうに言った。

「別にいいが……唯姉え、怖いのが平気だったっけ？」

「え？……！？」

光矢の言葉に唯は呆けた声を出した後自分が指差している方の先を見る、そこにあつたのはボロボロの外見をした不気味な雰囲気の漂う建物　お化け屋敷だ。

「……」

それに気づいた唯はお化け屋敷を指差したポーズのまま固まり、それに気づいた光矢が口を開いた。

「……やっぱり嫌なら別にいいんだが……」

「そ、そんな事ないもん！　大丈夫だから！　い、行こう！！」

光矢の言葉に唯はむきになったように叫び、光矢の手を掴みながらお化け屋敷に引っ張っていく。それに光矢は「無理しなくてもいいんだがなあ」と呟きながらお化け屋敷へと唯に引っ張られていった。

「……唯姉え、今からでも遅くないから一人で出たらどうだ？」

「だ、だだ大丈夫だもん！」

「じゃあそんなにしがみつくなよ、歩きにくい……」

光矢は明らかに心配そうな声で言っているのに唯は光矢に必死にし

がみつきなから震える声でそう返し、それに光矢は呆れたような口調で返す。そして光矢は右から自分の服にしがみついてくる唯と共に歩き出し、ある一点に差し掛かった瞬間右の方から何かが飛び出した。

「アアアアアー!!!」

「きゃーっ!!!」

「うわっ唯姉えいきなり抱きつくな暗くてバランスがっ!？」

定番といおうかお化けの仮装をした係員が不気味な声を出しながら驚かしてきたのを見た唯は目を瞑って光矢にのしかかるように抱きつき、館内が薄暗くさらに唯に抱きつかれていたためか若干平衡感覚を失っていた光矢が慌ててそう叫びとにかくバランスを取ろうと左足を移動させるが、それがお化け屋敷のセットの何かに躓いてしまふ。

「えっ?」

「ふえっ?」

一瞬浮遊感のような妙な感じが二人を襲い、その次の瞬間ドダーンという音がお化け屋敷に響いた。

「じめんね、光ちゃん……」

「光ちゃん言うな……いてて……」

二人はお化け屋敷から出て近くにあるベンチに座り、唯がぺこりと頭を下げながら謝ると光矢は頭を押さえながらそう返す。

「ったく、お化け屋敷のお化け役の係員に心配されるなんて事を体験するとは思わなかった……」

光矢はため息をつきながらそう呟く。躓いた光矢はさらに上から唯がのしかかってきた事により完璧にバランスを崩してしまい、驚かしてきたお化け役の係員が思わず「大丈夫ですか？」と心配してしまつような転びっぷりを披露する事になってしまったのだ。

「全く……」

光矢はそう悪態をつくように呟くと左手で頬杖をついて手すりに左肘を乗せ、唯から目を逸らすように地面を見る。

（思わず唯姉えが地面にぶつからないよう抱きしめちゃった……唯姉えの身体、柔らかかったな……って俺は変態か!？）

光矢はそこまで考えると気恥ずかしさを隠すかのようにわしゃわしゃと右手で乱暴に髪を掻き毟る。しかし唯はそれには気づいておらず、彼女の方も光矢から顔を逸らして考えに没頭していた。

（こ、光ちゃんに抱きしめられちゃった……光ちゃんの身体、とってもたくましかったな……あう、思い出したら恥ずかしくなってきた……）

唯はそこまで記憶を手繰っていくと気恥ずかしくなつたように顔を赤くしてうつむく。二人はしばらく互いにそんな考えに没頭してし



まっていた。

一方その頃こちらは孝明達。彼らは先にアトラクションへと特攻していた律、漣コンビと合流し八人でアトラクションを見て回っていた。

「よーっし！ 次あっち！！」

「あ、こら律！ そう先々行くな！」

先導する律が走り出すとその後を漣が追い、孝明達はくすくすと笑いながらそれに続く。そして律は一つのアトラクションを指差した。それは一つのコースを狭しと数々の小さな車が走っている、ゴーカートだ。

「あれやろっぜあれ！ 二人一組で競走しよう！」

「いいですね、負けませんよ！ 憂、一緒に乗ろ！」

律の言葉にすっかり彼女と意気投合したらしい真由が拳を握り締めながら言う、と孝明が苦笑を浮かべながら口を開いた。

「ぼ、僕はいいよ。荷物番してるから皆だけで楽しんできて」

「え〜なんで〜？ せっかくだから一緒にやろっぜほらほら〜」

孝明の言葉に律は驚いたようにそう言った後孝明を連れて行くことと彼の右腕を掴みゴーカート乗り場に引っ張ろうとする。

「っ!!」

するとその瞬間孝明は力強く律の手を振り払った。それに女性メンバー全員が固まり、孝明を唾然とした様子で見るがそれに気づいた瞬間孝明はすまなそうに笑う。

「あ、ごめんごめん。実はちょっと疲れててさ……ちょっと競走とかそういうのやれる気分じゃないから荷物番しながら休みたいんだ。気にしないで」

「あ……おう……」

「じゃ、荷物貸して。そのベンチにいるから終わったら声かけてよ」

孝明の言葉に律が曖昧に頷くと彼はいつもの笑顔でそう言い、それに全員はそれぞれのゴーカートには邪魔になりそうなかさばるような荷物を孝明に渡し、孝明はそれらを受け取ると近くのベンチに歩いていく。それから律達もゴーカート乗り場に向かっていった。

「……ふう……」

孝明はベンチにつくと荷物を下ろし、背もたれの部分に両手をつけて体重を預けながらうつむき、暗い表情でため息をつく。

「どうしたんですか？ お兄さん？」

「!?!? あ、あず!?!? どうしたの!?!?」

すると突然後ろからそんな声が聞こえ、孝明は完全に不意を突かれたと言わんばかりに振り向いてその相手　中野梓に向けて声をかける。それに梓は残念そうな笑みを浮かべた。

「二人一組なので余っちゃって。私も荷物番に来たんです」

「あ、そう……じゃあ座ってなよ。ちょ、ちょっと散歩してくるか  
ら……」

「？　疲れてるんじゃないんですか？」

梓の言葉に孝明は微笑を浮かべながら返すとベンチを指しながら言った後そう続けて梓に背を向け歩き出すとする。それに梓がきょとんとした表情で尋ねると孝明はうつと詰まった。

「あゝいや、その……じ、実はちょっと気分が悪くてね！　散歩して気分直したいんだ！　荷物押し付けちゃうけど、ごめんね！  
すぐ戻るから！」

孝明はそう言うとすたすたと歩き出し、梓はきょとんとしたまま孝明を見送る。そして孝明は彼女らから離れると地面に座り込んでふうと息を吐き、空を見上げた。

「少しはマシになってきたと思ってたんだけど……まだちょっと甘かったかな……」

孝明は自嘲するように笑いながらそう呟き、立ち上がると自分の頬をパンと叩いて踵を返した。

「さてと、りっちゃん達のレース順位くらいは見とかないと話合わ

せられないよね。あずにも謝つとかないと」

一人そう呟くと彼はいつもの笑みを浮かべながら梓の元に歩いていった。

一方光矢と唯もそれぞれお互いについて考えていた事は露知らず二人で遊園地を歩き回り、メリーゴーラウンドやジェットコースター、巨大迷路等のアトラクションを回っていた。そして唯は遊び足りないというようにきよるきよるとアトラクションを見回すとある一つのものに目を止めて光矢の腕を引っ張る。

「光ちゃん、今度はあれ！」

「ん？ ああ、コーヒーカップか。いいぜ。つか光ちゃん言うな」

唯の言葉に光矢はふつと笑みを浮かべて返し、二人はコーヒーカップに乗る。そして明るい音楽がBGMに鳴り出すと共にコーヒーカップは回転し、動き始めた。

「ほら、光ちゃん！ ハンドル回して！」

「へいへい」

唯が楽しそうな笑顔で言うのに光矢も心なしか楽しそうに頬を緩ませながら思いつきりハンドルを回し、コーヒーカップを回転させる。そしてコーヒーカップが止まって二人は降りアトラクションを出るが、光矢は心配そうな表情で唯を見た。

「唯姉え……大丈夫か？」

「だいじょ〜ぶ〜……」

「足ふらふらしてんぞ」

光矢の言葉に唯は足取りふらふらとさせながら返し、光矢は呆れたようにツッコむ。唯はすっかりコーヒークップで目を回してしまっていた。それに光矢は呆れたような笑みを見せ、ふと携帯を見ると了解と一人呟き、唯の前に立つと彼女を背負う。

「ふあう!？」

「孝明からメールでそろそろ集合だよ。そんな足取りじゃ時間かかるから背負ってやる」

「ん……ありがと……」

唯が驚いたように声を上げると光矢はそう言い、それを聞いた唯は静かに呟く。それから光矢は遊園地の入り口に向けて歩き出した。

一方遊園地の入り口で二人を待っていた孝明達は唯が光矢に背負われているのを見つけると律ははは〜んとばかりに笑みを浮かべた。

「なーなー孝明、あの二人ってもしかして……」

「残念ながら、今のところは付き合っていないよ」

「今のと」……は？」

律がにやにやと笑いながら孝明に尋ねるが彼はくすくすと笑いながら返し、その言葉に漣が首を傾げて返す。それに孝明はうんと微笑んだ。

「十中八九二人は両思いだね。まー光矢ってこういうところ鈍感だし唯ちゃんも似たようなもんだし、多分それが恋心だってお互いに気づいてないと思うよ」

「へ〜……」

孝明の言葉に律は面白い事を考えたと言わんばかりに気味の悪い笑みを浮かべる、と孝明が律の肩に手を置いて口を開いた。

「りっちゃん、言うておくけどこのネタで二人をからかおうなんて僕が許さないよ」

「秋草君……」

そういう孝明の言葉に漣が感心した声を出す。そして律がぶすくれた顔を見せると孝明はニヤリと微笑んだ。

「だって恋心を自覚させちゃったらつままないじゃない。姉弟のように育つてた二人が互いに特別な感情をその正体も分からずにどきまぎしてるのを遠くから見てる方がきつと楽しいよ」

「あ、秋草……」

その言葉に漣は今度は呆れきった声を出す。それを後ろで眺めていた和と梓、憂と真由も呆れたようにため息をつき、細も苦笑を漏らしていた。

そして光矢と唯も孝明達と合流し、軽音部メンバー＋は全員揃ってから遊園地を出て行った。

第十八話 軽音部メンバーと仲間達、遊園地での一日（後書き）

今回はオリジナル話、光矢×唯を主軸に考えてみました。ちなみに僕は遊園地にはほとんど行った事なかったりします、どっちかと言うと動物園の方が好きだしそもそも出不精だし一緒に行く相手もないし……。

ま、それはともかくさあ次回はどうしよっかな？そして感想心待ちにしております。それでは！



## 第十九話 期末テストで大騒ぎ！

「澪、お昼食べよう」

学校の昼休みここは二年一組、お弁当の用意をしていた澪に和がその声をかけ、澪もうんと頷く。ちなみに二人の友達であり同じクラスの孝明はどうやら食堂に行っているようで教室内にその姿はない。そして二人は机を向かい合わせると改めて座り、和はお弁当を広げる。すると澪が思わず口を開いた。

「うわー、綺麗なお弁当」

「そんな事ないよ、ありあわせの物詰めただけだし」

「えっ！自分で作ってるんだ！？すごい」

「やだなー、そんな事ないってばー」

澪の言葉に和が笑いながら言うと澪は驚いたようにそう言い、それに和はどこか照れたように笑いながら返す。それを聞きながら澪は心中で呟いた。

（ああ、普通の会話が出来るって素晴らしい……）

「？」

澪はそう心中で呟きながらお弁当を食べており、その雰囲気気づいたのか和はお弁当を食べながら首を傾げる。それから思い出したように澪に尋ねた。

「ねえ、軽音部はどう？ 唯は上手くやってる？」

「ん？ ああ、一つの事覚えたら一つの事忘れて大変よお」

「あーあるある。一度やりだしたら凄いとこるまで行くんだけどね」

「そうそう。私もだけどそれ以上に若宮君もいつも大変そうなの」

「昔から二人はそうなのよね」

澪と和はそう楽しそうに会話を行っている、すると一組の扉を半開きにしてそれを覗いている者達がいた。

「りっちゃん、あの二人なんだかいいムードだよ」

「ふん、これは怪しいわね」

唯と律だ。二人は教室の外からA組内にいる澪と和を覗いていたが、どこからどう見ても二人の方が怪しいのはツツコまないでおこう。

「突撃ーっ！！」

「!？」

律の叫び声と共に教室の扉が開け放されて律と唯は澪目掛けて突撃し、澪はビクンと飛び上がる。そして律は澪に抱きついてニヤニヤ笑いながら口を開いた。

「お二人さーん、仲良いですねー？」

「ご飯食べてただけなのに……」

律の言葉に漣は半泣きになりながらそう呟いていた。漣の貴重な癒しタイム、終了である。それから和は自分の目の前でパンを齧っている唯に目を向けた。

「それにしても、お昼にこっちのクラスに来るなんて珍しいわね……何かあったの？」

「実は期末テストのことなんだけど」

「却下」

それに唯はえへへと笑って言うが言い終える前に和はぶいっと顔を逸らしながら返し、それに唯は驚愕の表情を取った後声を上げた。

「ま、まだ何も言っていないよ!？」

「どうせまた勉強教えてくれって言っただけでしょ？ 自分でやらないと力にならないわよ」

「ふえ〜んいじわる〜、光ちゃんにも言われたのに〜」

唯の言葉に和は呆れたように小さく息をついてそう言い、抱きついてくる唯をあしらうように続ける。

(唯のあしらい方、勉強になるなあ……)

それを見ながら漣は心の中でそう呟いていた、それから唯は和から離れるとしゅんとなって口を開く。

「……分かった、今回は自分で頑張ってみる……」

「お、偉いぞ」

唯の言葉に漣はうんと頷いて言い、くすりと笑いながら律の方を見た。

「律も唯を見習って今回は自分でやってみたらどうだ？」

「えー？……も、もちろん最初からそのつもりだったさー！」

「ほーお」

「「がんばるぞー」」

漣の言葉に律は驚いたようにぎくりとなるが顔を逸らしながら続け、それに漣がにやりと笑いながら呟くと律と唯は肩を組み合いながらおーっと手を挙げる。

（本当に大丈夫かな……）

それを見た漣は心配そうに心中で呟いていた。

それから時間が過ぎ、漣は家に帰ると紬と電話で話していた。

「……というわけで、二人とも今回は一人で頑張るって言ってたから。若宮君は言わなくなっちゃって大丈夫だと思うけど、ムギも二人が泣きついてきても心を鬼にして教えちゃ駄目よ？」

「分かったわ」

漣の言葉に紬はふふっと笑いながら返す。すると電話口から別の声が聞こえてきた。

「お嬢様、今よろしいでしょうか？」

「斉藤！！ 今電話中なのよ、静かになさい！！」

「!?!?」

その声の瞬間紬の凜とした声が飛び、漣はびくりとなる。

「ごめんなさい、何の話だったっけ？」

(ムギは怒らせないよう注意しよう……)

それから聞こえてきたムギの普段の口調を聞きながら漣は震えてそう考えていた。そして話を終えて電話を切ると漣は自分の部屋に戻っていく。

「さ、二人に負けないよう私も勉強頑張らないと」

そう呟きながらちやと部屋のドアを開ける。

「あ、おかえりー」

「……」

そこには律の姿があり、漣は一瞬硬直した後「しし」と目を擦る。

「この漫画面白いね、借りていい？」

しかし律の姿は確かにそこにあり、漣は怪訝な目で彼女を見る。と律は一つの袋を漣に見せた。

「ケーキ買ってきたんだ、一緒に食べよう？」

「……律がそんな事するなんて珍しいな？」

「そんなことないヨ？」

「私、これから勉強するんだけど……」

「まあまあ、そうおっしゃらずに」

律の行動を漣が怪しむように言うと律は猫っ口をしてくねくねと身体を動かしながら返し、漣は目を瞑るとため息をついて口を開いた。

「……で、本音は？」

「勉強教えてくraisai!!」

漣の言葉の瞬間律は彼女に抱きつきながら言い、漣は呆れたように半目になると歩き出し律は漣の腰にしがみつく。

「今回は一人でやるんだろ？」

「そんないけず言わないでよー」

澪の言葉に律は泣きそうな声で返し、澪は律を一旦離すと彼女の方を向いた。

「全く、昼の威勢はどうした？」

「だって唯の手前ああいうしかないじゃん……きっと唯だってなんだかねで光矢に頼ってるって！」

「そんな訳ないだろ……」

澪の言葉に律は両手の人差し指をつんつんとさせた後思いついたようにそう声に出す。それに澪はため息をついてそう返した。

「こゝちゃん、お願いだから勉強教えて〜？」

「だ、め、だ。自分でやらないと力にならないって真鍋も言っただろうが。それと光ちゃん言うな」

その頃こちらは若宮家玄関、そこには光矢と勉強道具を抱えている唯の姿があり、唯が懇願するような声で言うと光矢は腕を組みながら返す。

「このままじゃ私留年しちゃうよー」

「来年中野と憂に教わってる。じゃ、俺も勉強あるから」

唯の言葉に光矢はそう言って踵を返すが唯は逃すものかと言わんばかりに彼の服をがしっと掴んでおり、光矢は呆れたように唯の方を

向く。無防備にそんな行動を起こしたのが彼の敗因だった。

「光ちゃん……」

「うぐっ……」

唯はうるうるとした涙目の上目遣いで光矢を見上げており、それを直視した光矢は頬を赤く染め上げ思わずそれを隠すように目を背ける。

「お願い、ね、いいでしょ？……」

「……上げれ」

続けての唯の小首を傾げながら甘えるようにお願いする言葉の連続コンボに光矢陥落、その言葉に唯はぱあっと顔を輝かせた。そして唯は光矢と共に彼の部屋へと向かう。

「はぁ……ムギにあんな事言っというて、私は甘いなぁ……」

一方漣、彼女は律の買ってきた駅前のガトーショコラの誘惑に負け律に勉強を教えることとなった。

「漣！ ポーツとしてないで早く勉強教える！」

「なんだって？」

「勉強教えてください！ 先生！！」



その事に関して澁が一人反省をしているとその後ろの机のところに座っている律が机をバンバンと叩きながら声を上げ、それに澁がイラストとした様子で振り向くと律はぎよっとなり敬礼をしながら丁寧にそう言い直す。

一方紬も部屋で勉強を行っており、ふとペンを止めるとふふっと笑う。

「澁ちゃんと若宮君、りっちゃんと唯ちゃんに勉強教えてる頃かしらっ。」

そして一人そう呟く。その予想は思いっきり正解していた。

「飽きた」

「早いな！」

視点は澁の部屋に戻る。すると律は鉛筆を投げ出して机に突っ伏しながらそう言っており、それに澁がツッコミを入れ、続けて呆れたようにため息をついた。

「計画立ててやらないからはかどらないんだよ」

「なんですと！ 私だってちゃんと計画立ててやってるんだよ！！」

「あ、そうなの？」

「私の計画、「溇の部屋で一夜漬け」……ダメ？」

「それは立派な計画ですこと……」

溇の言葉に律が心外だとばかりに言う。溇はすまなそうに返す、しかしその次の律の言葉を聞いた彼女は威圧感溢れる声でそう律に言う。そして律の頭に拳骨を一つ落とすと溇は自分の勉強机へと移動する。

「だらけるのはいいけど、私の勉強の邪魔はするなよ？」

「は……い……」

溇の言葉に律がそう返すと溇は数学の勉強を始める。そして解き方をぶつぶつと呟きながら問題を解いていくがやがてそのペースが落ちていく。なんかその表情も苛々としたものに変わっていった。

「だーっ！ 人の髪で遊ぶなーっ！！」

「あー、まだ途中だったのにー」

律は溇の髪を三つ編みやらなにやらにしており、それに溇が怒鳴ると律は残念そうに返す。そして律はまた溇から拳骨を受けると大人しくベッドの上に座り込んだ、すると急に彼女を睡魔が襲い、律はふらふらと揺れるとくるとベッドに倒れこみ、そのまま眠ってしまった。

「……ふえ……おわー寝てたっ!? 今何時!？」

「23時」

「なんで起こしてくれなかったのー!？」

「何度も起こしたぞ、はーいとかへーいとか返事しといて全然起きなかったじゃない」

それからしばらく時間が経って律は目を覚ますと一気にはげつと飛び起き、漣に今の時刻を尋ねると漣は勉強しながら返し、それに律が慌てたように返すと漣はやはり勉強しながらどこか呆れたように返す。それを聞いた律はがくとベッドに倒れこみ、涙目になる。

「あうう、赤点決定だ……へ？」

すると漣が一枚のプリントを差し出し、それに律がへつと呟きながらそれを受け取ると漣は机に戻りながら口を開いた。

「テストに出そうなところピックアップしといたから、せいぜい朝まで頑張りなさい」

「みおしゃん……」

それを聞いた律はプリントを抱きしめながら感極まったようにそう呟いていた。

それから数日後、テストが返されてからの軽音部部室に軽音部二年

生メンバーは勢揃いしていた。

「じゃーんっ！ー！」

「わー、りっちゃんすごい」

「ふふんっ、まあ私の実力なら当然だな！ 唯はどうだった？」

「え？ あ、うん、えと……い、妹に教えてもらったから追試はなかったよ！」

「なーんだ、結局一人でやってないんじゃないっ……って妹！？」

律が自信満々に答案を見せると唯がそう返し、律がふふんっと言った後にそう尋ねると唯は少し目を逸らしてから考えたと返す。それに律はけらけらと笑うがその後に叫び声を上げる。それを光矢と漣はやれやれという様子で眺めていた。

「お二人もお疲れさまでした」

「「本当に疲れた……って、え？」」

その二人に紬が声をかけると二人は息をつきながら返し直後互いの顔を見合わせる。

（（）というか、ばれてる！？）

そしてその次に紬の方を驚愕の顔で見る。それに対し紬はいつもの笑顔できょとんと首を傾げるだけだった。

一方こちらは一年生教室。返された答案を見た梓は固まっております、それを憂が後ろから覗き込むとわっと声を出した。

「梓ちゃん100点じゃない!」

「本当!? わー、凄いですね……私88点だったんですが……」

「88点でも充分凄いつてば……」

「え、あ、うん、まあ……」

憂の言葉に真由が驚いたように返すと純がため息をつきながら返し、梓はこくこくと空額きをする。

(お兄さんの張ったヤマが完全に当たってる……怖いくらい……)

その心の中では驚愕の表情でそう呟いていた。ちなみに彼女の机の中には他の教科の100点オンパレード答案が眠っているのを憂達は知らない。

「ふー疲れた。あずのテスト問題予想にちよつと本気出しすぎちゃったかな……ま、いつか」

その頃、その孝明は屋上で寝転んで自分のテスト 全科目赤点ではないが平均にも届いていない中の下程度を保っている を眺めながらそう呟いており、起き上がるとテストを鞆にしまつて鞆を肩に担いだ。

「さーってと、軽音部に遊びに行こっかな」

そして彼はいつもの笑顔を浮かべながらひょいひょいと屋上を出て行った。

第十九話 期末テストで大騒ぎ！（後書き）

今回はテスト編、漣律コンビを主軸に色々と視点を変えながら書いていったので割りと楽しかったです。まあ視点の換え方ってこんなもんでいいのかなって不安もありますが。もし感想を貰えれば喜びます。それでは。

## 第二十話 再び合宿！

「失礼しまーす」

「さわちゃんは……あ、いたいた」

夏休み間近、唯と律は職員室にやってくると顧問の山中を探し、見つけると彼女の近くに歩いていく。

「あら二人とも、わざわざ職員室まで……どうしたの？」

「夏休み、軽音部で合宿するんだけど」

「先生も来るかなって思って」

「……合宿ねえ」

二人に気づいた山中が尋ねると二人はそう用件を伝える。その言葉を聞いた山中はいかにもめんどくさいとでも言わんばかりの表情でそう呟き、それに律と唯は目を細める。

「うわあ、めんどくさそうな顔……」

「じゃあいいよ、私達だけで行くから」

唯の言葉に律ははあと息を吐いてそう言い、二人は振り返って出口に向かう。そして律は両手を頭の後ろで組むとやれやれと言わんばかりに口を開いた。

「声かけなかったらかけなかったで怒るのにかけたらすぐこれだ」



「泳いだりバーベキューしたりできるのにねー」

「えっ！？　ちょよ、ちょつと二人とも！？」

二人の言葉を聞いた山中は二人を呼びとめようとそう叫んで右手を伸ばすがその頃には二人とも職員室を出て行ってご丁寧にドアまで閉めており、山中は硬直した後諦めたように右手を下ろし、がくつと頭を下げた。

そしてその翌日の放課後、軽音部＋　は街に合宿の買出しに出かけていた。そしてその中の少女の一人　中野梓がキラキラした笑顔で手を組んだ。

「いつも遊んでばっかりで不安だったんですけど、ちゃんとこつやつて特別合宿とかもするんですね！　ところで何を買いに行くんですか？　食材とか、機材とか？」

「あー、うん……まあそれもだけど……」

梓のキラキラ笑顔での言葉に漣が歯切れ悪く返しながら彼女らはデパートの中を歩いていく。そして辿り着いた先で唯が口を開いた。

「水着だよ？」

「遊ぶ気満々！？」

彼女らがやってきていたのは水着売り場。そこでの唯の言葉に梓は思わずそうツッコミを入れ、続けてがくんとつな垂れる。

「どうせこんな事だろうと思ってました……」

「ま、まあまあ……」

そう言う梓に紬がフォローを入れており、律が頬をかく。

「べ、別にずっと遊ぶわけじゃないよ？」

「信用できないですっ!!」

「でもまあ、息抜きも必要だし」

「そ、そうですよねっ!!」

律の言葉に梓はほっぺを膨らませながらそう声を荒げるが対して漣の言葉にはきらきらとした笑顔で返し、漣のよしよしという撫で撫ではえへへと笑う。それに対し律は一種の疎外感を感じていた。

「じゃ、僕と光矢は食材買ってくるから」

「ま、適当に選んでろ」

「お、おう。じゃあまた後でな」

すると孝明と光矢がそう声をかけ、律がこくこくと頷きながらそう返すと二人は食材売り場へと歩いていく。それを見た梓がふと首を傾げて尋ねた。

「あの、なんでお兄さんまで合宿の買出しに？」

「ああ、秋草君も合宿に参加するんだ」

「えっ!?!」

「孝明って料理上手いしデザートも美味いんだ。それに孝明はもはや準部員と言って過言ではない存在だからな、部長として参加を特別に許可したのだ!」

「はあ……」

梓の問いに漣がそう言つと梓は驚愕の声を上げて食材売り場の方を見、律が満面の笑顔でそう言つと梓はツッコミも忘れてそう曖昧に頷くしか出来なかった。

「漣ちゃん、りつちゃん、あずにゃん、早く早くー!」

そして唯がびよんびよん飛び跳ねながら三人を呼ぶのを聞くと彼女らはそつちの方を向き、既に水着選びを始めている唯と紬の方に歩いていった。

「さて、合宿のご飯どうする?」

「田井中がバーベキューとすいか割りやろうぜーとか言ってたからその準備は必要だな。後は……まあ、またカレーとかでいいんじゃないか?」

「そうだね、じゃあ行こつか。ああ、あと何かデザートの方も買わないと……」

孝明の言葉に光矢はそう返し、それに孝明はうんと頷いて返した後歩き出し、思い出したようにそう呟いた。

それから数日後、光矢達は去年来たところとは別の琴吹家別荘へとやってきていた。それを見た梓はぽかーんと口を開いており、律もひゃーと声を出す。

「こりやまた一段とすげえなー……」

「これが去年言ってた借りられなかった別荘なんだね？」

律の言葉に続いて唯が紬に尋ねる、すると紬はすまなそうに口を開いた。

「ごめんなさい、その別荘は今年も駄目だったの……多少狭いと思うけど、我慢してね？」

（　　）（まだ上があるのかー！？）

「さあ、荷物を中に運ぶぞー」

紬の言葉に唯と律は驚きながらの心中ハモリツッコミを行い、その後ろで光矢と孝明が荷物を手に別荘に入っていくと溻と梓もその後に続いた。そして荷物をとりあえず部屋に運ぶと唯と律が声を上げる。

「よーっし、遊ぶぞー！」

「おーっ！」

「うおおおおおおいっ！！　遊ぶのは練習してから！」

いつの間にか水着に着替えていた二人に漣が大声をあげ、続けてお説教を行う。それに二人は口を尖らせた。

「えーっ」

「遊びたいっ」

「……じゃあ多数決にしよう。私は練習が先」

「「遊ぶっ!!」」

「練習がいいです!」

唯と律の言葉に漣は少し考えてからそう提案し、自分の意見を述べると二人は声を合わせて遊ぶに一票、続けて梓は練習に一票。

「僕は部外者だから投票棄権しとくね?」

「当然だ。んじゃ去年みたいに遊び疲れて練習できないなんて言われても困るし、俺も練習。後は琴吹だな」

孝明がへらへらと笑いながら言うのと光矢はうんと頷いて理由も付けながら練習に一票、続けて紬に意見を聞くが漣達は紬なら練習に入れるだろうと考えていた。つまり四対二で練習が先だ。

「遊びたいです」

(まさかの裏切り!?)

しかし紬の一票は遊ぶに入り、それに漣と光矢が心中でハモリツッ

「コシを行う。これで三対三の同点だ。」

「じゃあもういつそ遊ぶ代表のりっちゃんも練習代表の漣ちゃんじゃんけんでもしたらどう？ 泣いても笑っても一回勝負って」

「それでいくか。じゃあいくぞ、律」

「ふっふっふ、負けないぜー漣」

「漣先輩！ 頑張って！」

「りっちゃん！ ファイト！」

孝明の提案を聞いた漣は頷くと一歩前に出、律も怪しく笑いながらその前に立つ。そして梓と唯の声援が聞こえる中二人はすうっと息を吸った。そして互いにキツと睨みあう。

「「さいしょはグー！ じゃんけんっ！」

……場所はざざーんと波の音が聞こえる海岸へと移る。さっきのじやんけんの結果は漣の負け、遊ぶのが先になってしまった。

「り、律のやつ……騙まし討ちは卑怯だろ……」

「まさか今時あんな手使ってくるとはな……」

水着に着替えた漣がパラソルの下で体育座りしながらうつむきながら呟くと光矢も僅かに笑いながら返す。律はさっきのじやんけんの時に右手を振り上げ、思いつきり広げている状態で突き出そうとしているのを見た漣は自分の右手をチョキの形に変えて前に出す。し

かしその次の瞬間律は拳を握り締めていた左手を前に出したのだ。つまり右手のパーを囿にし左手のグーをフェイントで出したというわけだ。その結果律はグー、漣はチヨキで律の勝利が決定したわけである。現在唯と律はきゅきゅとビーチバレーを楽しんでおり、孝明は袖からこの近くの釣りのポイントを聞くとそっちに向かっていた。そして光矢も立ち上がる。

「じゃ、俺も泳いでくる」

「ああ、溺れるなよ」

「準備体操するから問題ない」

光矢の言葉に漣がはあと息をつきながら言つと光矢はそう返して歩いていった。すると律が梓に話しかけた。

「梓も一緒にやらない？」

「結構ですっ！」

その言葉に梓はぶいっとそっぽを向く、すると律はにやにやと笑った。

「あゝ、ひよつとしてスポーツとか駄目な人？」

「そ、そんな事ありません！ やってやるですー!!」

その言葉に梓は反応して立ち上がると律の方に向かっていき、三人はビーチバレー対決を始める。

「梓ちゃんもすっかり皆と仲良くなったわね」

「……そうか？」

紬の言葉に漣は苦笑を浮かべながらそう聞き返していた。

それから大分時間が過ぎ、光矢が遠泳から戻り孝明が魚釣り 今回はキャッチ&リリースにしたらしい から戻ってきた頃に唯と律は背中合わせで座りながらふうと息を吐く。

「ふはー」

「遊んだ遊んだー。もうご飯食べて寝ようぜ」

「練習はどうした？」

「やっぱり遊ばず先に練習した方がよかったですじゃないですかっ！」

唯がふはーと息を吐くと律もそう言い、続けると漣がツッコミを入れ、梓がぶんぷんというような調子で続けると律は黙って梓の方を見、言った。

「梓が一番遊んでたじゃん。そんなに真っ黒になって……」

「わ、わ、私はちゃんと練習もするもんっ！」

確かに梓の身体は全身真っ黒だ。その律の言葉に梓は一瞬痛いところを疲れたとばかりの表情を見せるがそう続ける。それを見ながら光矢は唯を揺さぶった。

「おい唯、中に入って練習始めるぞ。寝るな」



「疲れたー、光ちゃん練習場所までおぶってー。そしたら真面目に練習するからー」

「……しょうがねえな。あと光ちゃん言うな」

光矢が起こすのに対し唯は寝ぼけながら光矢に甘え、それを聞いた光矢は少し黙った後頭をかいてそう呟くと唯を背負い、それに安心したのか唯がくうくう寝息を立て始めたのを聞くと一つため息をついてから歩き出す。それを見ると律は漣を見た。

「なあ、み」

「断る」

「はやっ!? まだ何も言っていないのに!？」

「自分で練習場所まで行け」

律の言葉を漣は一瞬で遮り、それに律が声を上げると漣はそう言っ  
て建物内に歩き出す。それを見た律は諦めたように息を吐いて立ち  
上がると一つ欠伸をして歩き出した。そして漣と前のめりになって  
並んで歩きながら口を開く。

「疲れたー、お腹空いたー」

「我慢しろ」

「うわー! すっごーいつ!」

律の抗議の声を漣が一蹴していると前を歩いていた梓がそう声を出し、二人も部屋の中を覗きこむ。

「うわっ！ 確かに凄いな！」

「こんなすごいアンプ使ったことないですよ！！」

溲の言葉に梓がそう続けると、突然律はしゃきんと立ちなおしてドラムを眺め始め、振り返るとキラキラとした目で口を開く。

「溲！ 早く練習しようぜ！！ スネアが新品だ！」

「現金なやつ……ま、練習するっていうならいいか」

その言葉に溲はふうと息を吐きながらそう呟く。その間に光矢が唯を部屋に下ろすと孝明が口を開いた。

「じゃあ僕は夕飯作ってるから。メニューはカレーって伝えといて」

「おう。練習が終わったらすぐに手伝う」

「一人で大丈夫だって。じゃあね」

孝明の言葉に光矢がそう返すと孝明は笑いながら言い、部屋を出て行く。それを見送ってから光矢は唯を揺らした。

「ゆ〜い〜、起〜き〜ろ〜」

「う〜い〜……眠い〜」

光矢の言葉に唯はすっかり遊び疲れたのかそう口にするのみ。それに光矢はため息をついてからきよるきよると用心深く辺りを見回す

と唯の耳元に口をやる。

「唯姉え、今すぐ起きれば今日一緒に寝てやる」

「ふにやつ!」

光矢の言葉を聞いた瞬間唯は覚醒、目を開けると恐る恐る光矢を見て口を開いた。

「こ、光ちゃん……えと、その……ほんと?」

「……泊まる部屋が一緒に他に誰もいなかったらな」

「……う、うん。そ、それでいい……」

「おう。じゃ、練習するぞ」

「うん……」

顔を赤くしながらの唯の言葉に光矢もまた顔を赤くしながら条件を提示、それに唯がこくこくと頷くと光矢は安堵の息を吐いてそう言い、それに唯は頷いた。

(流石に今年は男女別だろ……)

光矢は心中でそう呟きながらギターの準備をする。しかし彼自身さっきの言葉につい舞い上がってしまったのかそれらのやり取りを細かくすすくと笑いながら見ているのには気づいていなかった。

そして唯も赤い顔でギターを準備していると梓が何かしているのに気づく。

「あずにゃん、何してるの？ それなーに？」

「これですか？ ただのチューナーですけど……」

「へへ、チューナーって言うんだあ」

唯の言葉に梓がきよとんとしながらからそう返すと唯はふんふんと頷きながら呟く。それに梓は驚いたように目を丸くした。

「唯先輩チューナー知らないんですか！？ い、今までどうやってチューニングを……」

「え、適当に……」

梓の言葉に唯はそう言いながら弦をいじって構える。

「ほら」

そしてジャーンと音を鳴らす、その音は見事に合ったものだった。

（ぜ、絶対音感……… 凄いのか凄くないのか分からない人だ……）

それを見た梓は啞然とした表情でそう呟いた。そして全員の準備とウォーミングアップ、個人練習を終えた後六人で合わせて演奏を行う。それが終わると梓がうんと頷いた。

「今の、凄いいい感じでしたよね？」

「みんなびったり合ってたわ」

「律もちゃんとリズムキープ出来てたな。特訓でもしてたのか？」  
梓の言葉に紬が頷くと漣も感心したように言い、律の方を向く。

「お腹空いて力出ないよう……」

「お腹空いてるから無駄な力抜けたのね……」

その律はきゆうと言わんばかりにドラムにもたれかかって呟いており、それに漣は呆れ半分の様子でそう返していた。

「カレー出来たよー」

「飯！」

「ご飯！」

すると孝明が現れて晩飯が出来た旨を伝える。その瞬間律と唯がしやきーんとなつて孝明の方に走り、それを見た光矢は諦めたように息をついた。

「とりあえず、先に晩飯食うか」

「……そうだな」

光矢の言葉に漣もため息混じりに返し、一行は孝明を先頭に食堂へと歩いていった。

「肝試しをしよう！ やっぱ夏で合宿といえは肝試しだ！」

「飯食った途端元気だな……」

軽音部メンバー＋ がカレーを食べていると律が唐突にそう言い、  
光矢が呆れたようにツツコミを入れる。

「私はやらないぞ」

「あー、澪は怖い駄目だもんな」

「なっ！？ ぜ、ぜんっぜん余裕よ！ やってやろうじゃないの！」

（乗せられてんな……）

澪の言葉に律がにやにやと笑いながら返すと彼女は一瞬驚いた表情  
を見せた後つんと顔を逸らしながら強い口調で言い、光矢はそれ  
を見ながら呆れたように呟いていた。

「僕は晩御飯の片付けと、肝試しの後用にデザートを用意しとくよ」

「お邪魔でなければ私もお手伝いしますわ」

「あ、ありがとう」

孝明の言葉に絢がにっこり笑って返すと孝明も微笑みながら返す。

「……」

「？ どしたの、あずにゃん？」

「!? な、なんでもないですっ!」

それを梓が微妙な表情で見つめていると唯が首を傾げて尋ね、それに梓はぷいっと顔を逸らしながら返す。唯はそれにきよとんと首を傾げていた。

そして場所は琴吹家別荘の後ろに広がる森の入り口へと移り、先に行く事になった漣&梓ペアはその森を眺めていた。その後ろには光矢&唯ペアが待っており、律は森のどこかで驚かせ役となっている。

「じゃ、じゃあ、逝ってくるっ!」

「テンパリすぎて漢字がおかしくなってるぞ……」

漣のガタガタ震えながらの言葉に光矢は静かにツッコミを入れ、漣は分かっているのか分かってないのかこくこくと頷くと森の方に歩いていく。しかし手と足が同時に出ているところを見る限り恐怖で相当テンパッているようだ。

「大丈夫なのか?……」

「さあ?……」

それを見た光矢はそう呟き、唯もそれには苦笑でそう返すのが精一杯だった。

日が暮れた森の中、それは完全なる闇に支配され、下手をすれば一寸先すら見るのが叶わぬ空間。そして森に生える木々のざわめきは人によってはそこに潜んでいるやもしれぬ得体の知れないものの気配にも感じ取れ、不気味な雰囲気をかもしだしていた。

「……こ、高校生にもなつてき、肝試しもないわよねえ？」

「澪先輩、手、痛いんですが……」

澪は恐怖を紛らわせるためか梓に話しかける。しかし梓はぎゅっと握り締めてくる澪の手に自分の手の痛みを感じ少し顔をしかめながらそう呟いていた。すると突然後ろから何者かの気配を感じ、二人は振り向く。

「やっと見つけたあ〜〜」

「ヒイイイイイツッ！！！」

そこにいたのはぼさぼさの長い髪の毛がだらんとぶらさがり、血走った目で二人を見据えている女性。その姿を見た澪はそう悲鳴を上げ、それに梓はびくっとなっていた。タイミングを逃したおかげか悲鳴を聞いたせいとその表情は若干冷静がかつている。

「おい、どうした！？ 悲鳴が聞こえたぞ！？」

「あれっ！？ さわちゃん先生どうしたの！？ っていうかなんているの！？」

すると光矢と唯が合流、そして唯は女性 山中さわ子を見て驚いたようにそう彼女に声をかける。それに対し山中は髪の毛についている葉っぱを払いのけながら口を開いた。

「後から合流して皆を驚かせようと思ったけど、途中で道に迷ってさまよってたのよ……皆と合流できてよかったあ〜……」



「お、驚かせようって目的は達成できたようですね……」

山中の言葉に梓は真っ白になって燃え尽きている溼の方を見て苦笑する。それを聞くと光矢は「たくと悪態とため息をついて携帯を取り出した。」

「とりあえず、田井中に連絡取るか」

「あれ？ りっちゃん携帯持って行ってるの？」

「ああ。この暗い中だ、もしもの事があつたらいけないから念のためにな……もしもし、田井中か？」

「うらめしやあ……」

「ふざけてると切るぞ？……肝試しは中止だ。山中先生がいてな、別荘に戻る」

「さわちゃんが？ うん、分かった。すぐ行く」

「おう。じゃな」

「お〜」

光矢の携帯を取り出しながらの言葉に唯が尋ねると彼は頷いてそう答え、携帯を鳴らす。そして相手が電話に出た事を確認するとそう言うが律は開口一番お化けのお約束台詞を言い、それに光矢がスパツとツッコミを入れ用件を伝える。それに律が驚いたように言った後分かったと続けると光矢はおうと言って携帯を切った。そしてや

つてきた田井中と合流してからメンバーは別荘へと戻っていく。

「たぁーかぁーあぁーきいー!!!」

「どつたのー光矢ー？」

山中が合宿に飛び入り参加し、メンバーのお風呂が終わった後の琴吹家別荘に光矢の怒号が響き渡る。それに孝明がけらけらと笑いながら返すと光矢は部屋割りを孝明に突きつける。

「なんでまた俺と唯が同室なんだ!？」

「いやそれがね、ムギちゃんが女子が泊まる予定だった大部屋の空気の入れ替えについて窓を開けっぱなしにしちゃって、風が強かったみたいで木の葉や泥とかが入ってベッドも相当汚れちゃったみたいなんだ」

「海に行く前にきちんと閉めたつもりだったんですが、ごめんなさい」

光矢の言葉に孝明が参ったように説明すると紬は本当にすまなそうに頭を下げ謝り、それを見た光矢は流石に相手が紬でしかもこんなに謝られているとなると強く言えないのかぐつと唸る。

「だ、だがっ、二人一組なら俺と孝明でもいいだろ!？ な、中野も孝明と同室じゃ困るよなっ!？」

「え？ あの、私は」

「何を言ってるのさ？ 大人である山中先生を合わせて大部屋

に四人もいれば安心だけど女性が一人だけで泥棒の侵入とかもしもの事があったらいけないでしょ？ 僕はあずを妹のように思ってるし、光矢も唯ちゃんとは姉弟のような関係でしょ？ しっかり守るのは最低限の勤めだよ？」

「てめえはいけしゃあしゃあと……」

光矢の言葉に梓が返そうとすると孝明は笑顔でそう言い、光矢は苛々としたように返す。そして舌打ちを叩くと諦めたようにため息をつき、部屋に向かう。それを確認すると孝明は我慢できなかったように噴出した。

「ぷふっ！ あー楽しっ！ 光矢ってばホントに変なところ純情だねー」

「全くもう、教師として不純異性交遊になりそうな行動は看過できないわよ？」

「それにしても先生も必死で噴出さないよう我慢していたようにお見受けしますけど？」

孝明の言葉に山中が呆れたように注意すると彼はくっくつと笑いながら返し、それに山中はうつと唸る。

「んじゃ、部屋に行くか」

「ああ」

「僕達も行くっか」

「は、はいっ！」

それからの律の言葉に遷が呆れたように息を吐きながら返すと孝明もそう言い、それに梓はびくっとなりながらも頷く。

そして光矢&唯ペア、二人は同じ部屋に入ると互いに黙りあっていた。一応ベッドは離れた地点に二つある。しかし……

「こ、光ちゃん、えと、約束……」

「分かってる……」

そう。光矢は唯に練習させるために約束を行っていた、「今日二人きりで泊まる事になったら一緒に寝る」という約束を。光矢からすれば今年も男女別だろうとたかをくくっていたための約束、それがまさか今年も同じ部屋で二人きりとは予想だにしていなかった。別に幼稚園の頃はこんな約束屁でもない、しかし高校生という思春期真っ只中ともなるとそう割り切れるはずがない。そもそも光矢自身この約束の状況になるはずがないと思っていたため幼稚園の頃のノリで言ったただけだ。

「（とりあえず、とっとと寝て夢に逃げよう……）…ね、寝るか」

「……………うん」

光矢はらしくない逃避策を考えるととっとと寝ようとする。それに唯もつつむきながらこくと頷き、二人は同じベッドで横になる。

「「お、お休みなさい……………」」

そして二人はそう言い合うと目を閉じる。後はそのままリラックスして睡魔に身を委ね、夢の世界に入るだけだ。光矢はそう考え、身体中の力を抜く。

一方こちらは孝明&梓。孝明は自分の寝るベッド　当然梓とは別のものを用意しているし梓のベッドとはカーテンで仕切りが出来るようになっていて　の上に座ってくすくすと笑っていた。

「今頃光矢と唯ちゃん同じベッドで寝てるだろうな。いや〜想像するだけで楽しい楽しい」

「お、お兄さん、それってどういう?.....」

孝明の言葉に梓は頬をひくひくさせながら尋ねる。それに孝明はけらけらと笑った。

「いやね〜、ムギちゃんから聞いたんだけど光矢、今夜同じ部屋に泊まったら一緒に寝るって約束で唯ちゃんを練習に参加させたそうなんだよ。光矢って昔から自分で決めた約束は絶対守るからね」

「昔からって.....」

「まあ昔からって言っても僕が知ってるのは小学四年か五年から程度だけどね。あずと会わなくなったのが小三くらいだったっけ?」

「そのくらい、ですね。お兄さん私がギター始めたの知らなかったですよ?」

「うん。じゃあそれくらいか」

孝明と梓はそう会話を行う。そして孝明は両手を頭の後ろで組んだ。

「あの二人は見てて飽きないよ。唯ちゃんが何かやったら光矢がそのフォロワーに走って、光矢が何かやるのに唯ちゃんがついてってね。今はお互いに恋愛感情があるのに気づいてないし、新しい観察目標が出来て楽しいよ」

「お兄さん、そういうところ相変わらずですね……」

孝明のにかにか笑いに梓は呆れたように呟く。すると孝明は目を細めた。

「まあ……二人とも、互いに大切な人がすぐ近くにいるって認識できればいいからね。いなくなっただけからその大切さを痛感してからじゃ遅いんだよ……」

「お兄さん？」

「え？ あゝいやいやっ、二人とももつと仲良くなって、あわよくば恋人同士になっっちゃえば僕も楽しいからさ。やっぱり皆仲良くが一番だよって思ってるだけっ！」

孝明の言葉に梓が首を傾げると彼はけらけらと笑いながらそう言い、梓の方を向いて悪戯っぽく笑った。

「じゃ、僕達も寝ようか。なんなら昔みたいに一緒に寝る？」

「なっ！？ ふ、ふざけないでくださいっ、お兄さんのエッチッ！」

孝明の言葉を聞いた梓は途端に顔を真っ赤にした後照れたようにそう叫んでカーテンをシャツと閉める。それを見た孝明はまた一つ笑うと寝転がった。

(大切な人、か……)

そして心中で一つそう呟くと目を閉じ、やがてやってくる睡魔に身を委ねていった。

一方、光矢&唯。ベッドの上で唯はくうくう寝息を立てており、光矢はごろんと寝返りをうつと目を開く。

(眠れん……)

「んうゝ、こゝちやくん、クッキーお代わりいゝ……」

光矢が苦しそうにそう呟くのに対し唯は甘い寝言でそう呟きながらごろんと光矢の方に転がる。自分の発言と約束は守るという律儀な性格ゆえとはいえ、彼は精神的拷問状態に陥っていた。

次の日の朝、唯がつやつやとした笑顔でいたのに対し光矢は完璧寝不足のように目を真っ赤にしてぐたっとなっているのを見たメンバーが不思議そうに首を傾げていたりくすくすと笑っていたのはまた別のお話。

## 第二十話 再び合宿！（後書き）

ふにゆく疲れた。ようやく二年目の合宿編書き終えましたよ……別に男女が同じベッドで寝るくらい、問題ないですよ？ 彼女いないし、別のところでこのシチュ書き慣れてるので自分がそういうのに対する感覚ずれまくってる可能性も無きにしも非ずですが……大丈夫、ですよ？

さーて次は何だったかなつと。ま、それでは。



## 第二十一話 一年生達のとある一日

とある休日、平沢唯の妹こと平沢憂と若宮光矢の妹こと若宮真由は桜ヶ丘高校に入学して知り合った、唯達の所属する軽音部の後輩でもある少女 中野梓と今日お出かけの約束をしていた。

「遅いねー梓ちゃん」

「もう真由、落ち着いて待ってたら？」

黒髪を長く伸ばした少女 真由が壁に背を預けながら言っている  
と茶髪を小さなポニーテールにした少女 憂が苦笑ながら返す。

「おーい」

「あっ」

突然聞こえてきた声に憂が反応すると真由も立ちなおしてそつちを見る。声の方からは黒い髪をツインテールにした色黒の少女が走ってきていた。

「ごめん、遅れちゃったー」

「もー遅いよー……って」

「……誰？ まっくる」

「梓だよー!?!」

少女の言葉を聞いた憂が笑いながら返すが直後憂と真由が声を揃えて言い、それに梓ががーんとなったように声を上げる。

それから三人は昼食を取りに近くに某ハンバーガーショップへと寄り、真由が席を取っている間に憂と梓が注文、注文品を受け取ると真由が取った窓際の席に移動する。

「それにしても、本当に誰だか分からなかったよー」

「本当に申し訳ありません」

「そんな大袈裟な……」

ハンバーガーの包みを開けながら憂が苦笑気味に言うと言由もフライドポテトを齧りながらぺこりと頭を下げ、それに梓が呆れたように言う。それから憂が首を傾げた。

「ところで、なんでそんなに日焼けしてるの？」

「日焼けさろん、とやらにでも行ってきたんですか？」

「うっん、軽音部の合宿だよ」

「でも、お兄ちゃんも唯お姉ちゃんもそんなに日焼けしてませんでしたし……」

憂の問いに続けて真由も首を傾げて尋ねると梓は首を横に振って返し、それに真由が不思議そうに言うと言由は罰が悪そうに顔を背け、ぞうーとジュースを吸う。

「私が、一番はしゃいでたから……」

ジュースを吸いながらのその言葉に憂はニコニコと微笑んでいた。

そして憂ははむっとハンバーガーを齧りながら梓を見た。

「いいなー合宿、楽しそう」

「憂も軽音部入れば？ 真由はもう剣道部に入ってるけど」

「はい、私達は学校に泊り込んでの特訓をしました。私としては山口県への遠征を提案したかったんですが、一年生が口出しするのもどうかと思って」

「なんで、山口県？」

「梓ちゃん、それ聞くと長いよ……」

憂の言葉に梓が問い、真由に言うのと彼女もはいと頷いてそう返し、それに梓が呟くと憂が頭を押さえて言う。それから真由がにっこりと微笑んだ。

「山口県にはかの宮本武蔵と佐々木小次郎が決闘を行ったとされる巖流島がありまして、そもそも私が剣の道を志したのも日ノ本最強の侍、宮本武蔵様の影響があるところが大きいのです。そのため昔から少しでも武蔵様に近づくため二刀流を学んだのですが、剣道では大学生になるまで二刀流が禁止なのがとても残念です。それで実際に巖流島のある山口県に向かい」

「ま、真由！！ 梓ちゃん剣道詳しくないから少し自重してー！！」

真由は満面の笑顔を浮かべまるで水を得た魚の如く喋り出し、それに梓はぎょっとする。梓から見た真由は口数はともかく常に丁寧でクールなイメージがあったためここまでぺらぺらと喋り出すなんて

予想もしていなかった。そして憂が慌てたように叫ぶと真由ははっとしたような表情になり、しゅんとうつむく。

「も、申し訳ありません。少し我を忘れていました……」

「あ、いいよ、別に……ちょっとびっくりしたけど……」

「真由って火が点くとほんと凄いの……あ、そういえば軽音部の合宿ってどんなことやったの？」

真由の言葉に梓が苦笑ながらに返すと憂がふうと息を吐いて再度ハンバーガーを齧り、思い出したように尋ねる。すると今度は梓が微笑んだ。

「すっごいんだよ!! 別荘の近くに海があるの!! 二日目はバーベキューしたりすいか割りしたり……はっ!？」

梓はそう言っていた途中で憂と真由がニコニコと微笑んでいるのに気づく。

「梓ちゃん、すっかり軽音部に馴染んでるじゃない」

「そうですね。最初すっごく嫌がってたのに」

「そ、そんなことないっ!!」

そして二人はそう言い、それに梓は思わず席を立ち上がりながらそう叫んでいた。

「「ごちそうさまー。美味しかったー」

「ご馳走様でした」

それから少し時間が経ち、憂達はハンバーガー等を食べ終わると憂は満足そうな笑顔で言い、真由は行儀よく両手を合わせてそう言う。すると同じくハンバーガーセットを食べ終えた梓が両肘を机についた。

「それにしても、唯先輩には困ってるんだけど」

「ほえ？」

「何がですか？」

「ぜんっぜん練習しないし変なあだ名つけてくるし、やたらスキンシップしてくるし!!」

「お姉ちゃんってあったかくて気持ちいいよね」

「あ、分かる分かるー」

梓の言葉に二人が首を傾げて返すと梓が返し、それを聞いた憂が妙に真顔でそう言うと言つと真由も笑って返す。

「いや、そういう話じゃないんだけど………そういう日は今日唯先輩と光矢先輩は何してるの？」

「お兄ちゃんは今朝から裁縫に。くーたんが損傷したと血相を変えて」

「くーたん？」

「光矢さんが小学六年生の時に作ってお姉ちゃんにプレゼントした

白熊の巨大ぬいぐるみ。光矢さんもお姉ちゃんも凄く愛着持っていて、昨日の夜凄かったよねー」

「うんうん。唯お姉ちゃんがくーたんの腕が取れたーって電話してきて、それを聞くと否やお兄ちゃん裁縫道具持って飛び出すんだもん。結局今日は一日かけて腕の修復と他にボロボロになったところを修繕するそうだよ。あ、そうそう、朝に材料買いに行くって出かけたっけ」

二人のずれた答えに梓は呆れたように返した後ふと尋ね、それに真由が返すと梓が首を傾げると憂が説明、その後にくすくすと笑いながら真由に尋ねると彼女も無邪気な笑みを浮かべてそう返した。

「へ、へー……で、唯先輩は？」

「あ、お姉ちゃんも家にいるよ。お姉ちゃん暑いのが苦手で、冷房も嫌いな」

「……ダレてる姿が目には浮かぶわ」

「最近是一日中ぐったりしてるよ、流石に愛着あるくーたんの危機には焦ってたけど」

「だらしないわねー」

梓の問いに憂はそう返し、それらの言葉に梓は呆れたように返す。と憂は両頬に手をやった。

「でも、ゴロゴロしてるお姉ちゃん可愛いよ？」

「あ、分かる分かる。なんか和むよねー」

(……なんだろう、この私と憂達の感覚の違いは……)

憂の言葉に真由も同意するように頷いており、梓は二人をどこか遠い目で見つめていた。

「でも、私も漣先輩みたいなお姉ちゃんだったらほしいなあ」

「漣さん優しくてかつこいいもんねー」

「軽音部で頼りになるの漣先輩だけだよ」

「律先輩は？」

梓の言葉に憂がうんと頷きながら言うと梓がうんうんと頷くがその次の問いには両手を挙げて呆れ顔を見せる。

「あの人は大雑把でいい加減だからパス」

「ほほお〜」

「あ、梓ちゃん……私じゃないよ？」

その次に聞こえてきたのはその律の声、その次の憂の言葉に梓はギヤーと心の中で叫んでいた。そして律が梓に軽いヘッドロックをかけてぐりぐりとしていると憂が苦笑ながらに挨拶する。

「こゝ、こんにちは、律さん」

「やつほー。外から見たから来ちゃった」

「今日は一人なんですか？」

「うん。溇は夏期講習行ってるし」

憂の挨拶に律もそう返し、その次の真由の問いにも律はうんと頷く。その言葉を聞いた梓が顔を上げた。

「律先輩は行かなくていいんですか？」

「へ？ 私が？ 夏期講習？ なんで？」

「いや……いいです」

梓の問いに律はもう真顔で返しており、それを聞いた梓はツッコミを放棄した。

それから律がハンバーガーを注文し 真由も新しいものを注文、買ってきていた 食べているとふと梓が口を開いた。

「ところで律先輩、前から気になってたんですが……」

「あい？」

「ムギ先輩って自前のティーセット持ってきたり大きな別荘持ったり……すごいお嬢様なんですか？」

梓の言葉に律がハンバーガーを齧りながら首を傾げると梓はそう問い、それを聞いた律はハンバーガーを置くとうんうんと頷いた。



「そつだぞー。家には執事さんがいて、長期休暇には外国行ったりしてるんだぞー」

「本当ですか!?!」

「だったら面白いよねー」

「知らないんじゃないですか……」

律の言葉に梓が驚いたように叫ぶと律はあっけらかんとそう言い、それを聞いた梓は呆れたようにツッコミを入れる。すると律は携帯を取り出した。

「今から電話して、ムギんち遊びに行こうぜー」

「いいんですか? そんな突然……」

律の言葉に梓がそう言っている間に律は電話をかける。しかし少しすると首を傾げて携帯電話を耳元から離した。

「あれー? 携帯に出ないなー……家電にかけてみるか」

律はそう言つてムギの家電の電話番号を押し、再度携帯を耳元にやる。梓も律の携帯に耳を近づけた。

「はい、もしもし」

「(あ、繋がった……)……もしもし、細さんのお父さんですか?」

「いえ、私琴吹家の執事でございます」

（本当に執事いたーっ！？）

電話口から聞こえてきたのは男性の声、それを聞いた律が尋ねると男性　執事はそう名乗りそれを聞いた律と梓が心中で叫ぶ。

「え、えーっと、っ、紬さんはいらっしやいますかしら!？」

「律先輩！　落ち着いて！」

律は完璧にパニックモード突入、その言動を聞いた梓が慌てたように落ち着くよう言っていた。

「紬お嬢様はただいまフィンランドで避暑中でございます」

「そ、そうですね！　ありがとうございます、失礼しました!!」

執事の言葉を聞いた律は焦ったようにそう言って電話を切り、ほっと息を吐く。

「ど、どうだ！　私の言った通りだろ!？」

そして次に胸を張ってそう言い、一年生三人はおくと手を鳴らした。それから四人は店を出て歩き出すが突然律が大きなため息をつく。

「あゝ、なんかどつと疲れたー」

「あ、うち寄っていきます？　すいかありますよ」

律の言葉に憂がそう尋ね、律はすいかと聞いてそれを了承、一行は

平沢家へと向かった。

「お姉ちゃん、ただいまー。律さんと梓ちゃんと真由が来たよー…」

「お〜か〜え〜り〜…」

唯は居間で暑さに負けてぐったりとしており、その姿を見た憂と真由は和んだような様子を見せる。

（ ……なんか、ほっとするなー ）

そして律と梓も心中でそう呟いていた。

第二十一話 一年生達のとある一日（後書き）

今回は一年生組の話にここ最近出番のなかった真由を出してみましたが……うーん、なんか真面目なキャラだったはずなのに妙にキャラが固定できてないような……ま、いつか。本編も後書きも短いですが、それでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3318r/>

---

けいおん！～平沢唯と幼馴染と高校生活～

2011年10月10日12時33分発行